厚生労働省 令和7年度老人保健健康増進等事業

介護技能向上を目的としたコンテストの効果分析に関する調査研究事業

報告書

令和８年３月

社会福祉法人　こうほうえん

はじめに

「オールジャパンケアコンテスト」（以下、「AJCC」と言う。）は、「介護の質の向上と地域との繋がりを目指して」という理念のもと、介護の仕事に携わる人たちが生き甲斐を感じ、知識や技術の向上を図るとともに、地域や社会において介護への関心と理解を深めることが必要であるとの考えで開催しているものである。

2010（平成 22）年に第 1 回大会を開催し、爾来、毎年継続開催してきた全国規模のケアコンテストである。今年度の AJCC2025（第 15 回）大会は、昨年度に引き続き東京ビッグサイトを会場として開催し、全国から 150 名の選手が参加した。また、介護福祉士等の養成校の学生・生徒を対象とした動画投稿コンテストを同時開催し、養成段階にある学生・生徒の参加を得て実施したところである。

本年度の第 15 回大会においては、昨年度に引き続き、厚生労働省の「令和 7 年度老人保健健康増進等事業」として、「介護技能の向上を目的とするコンテストの効果分析に関する調査研究事業」を実施した。本書は、その調査研究事業の成果を報告書として取りまとめたものである。

本調査研究は、昨年度実施した調査研究の成果を踏まえ、その分析・検討の枠組みを継承しつつ実施したものである。先行研究においては、AJCC が介護技能の向上を図る場であるとともに、介護の「見える化」や専門性の共有、介護人材の多様性の可視化、学び合いの機会の創出など、多様な機能を有していることを明らかにした。本年度の調査研究では、これらの整理を前提としながら、第 15 回大会における活動とその成果について改めて検証を行い、AJCC の継続的な取り組みがもたらしている成果や社会的意義について、より具体的かつ多面的に分析・検討を行ったところである。

本調査研究を通じて、AJCC の活動が、参加選手やその所属する事業所における介護技術・技能の向上や意識の変化を促すとともに、介護の価値や魅力の共有、さらには介護に関わる多様な主体の参画による協働の基盤としての機能を有していることが改めて明らかとなったことは誠に意義深いことである。調査研究事業に関わられた調査検討委員会の委員をはじめ、ご協力いただいた関係者の皆様に深く感謝申し上げる次第である。

我が国は、団塊の世代のすべてが 75 歳以上となる超高齢社会を迎え、介護ニーズの増大とともに、介護人材の確保・育成・定着がますます重要な課題となっている。そうしたなかで、介護の仕事の価値や専門性を社会に発信し、その魅力を高めていく取り組みが求められている。AJCC は、今後ともケアコンテストの開催を通じて、介護の価値創造と社会的評価の向上、そして新しい介護文化の創造を目指した取り組みを継続していくこととしたい。

令和 8 年 3 月

調査検討委員会　委員　廣江　研
（社会福祉法人 こうほうえん 会長）

目 次

はじめに （1）

第 1 章 介護技能の向上を目的としたコンテストの効果分析に関する調査研究事業の概要…… 4

1. 調査研究事業の目的…… 4

2. 調査検討委員会での検討…… 4

【調査検討委員会 委員】 【オブザーバー】 【技術支援】（5）

3. 調査研究の方法及び事業内容…… 5

- 調査員による参加観察 （5）
- ロジックモデルのフレームワークに基づく検証 （5）
- アンケート及びヒアリングによる検証 （6）
- 先行の調査研究について（補足）（6）

第 2 章 AJCC の開催ドキュメント…… 7

1. AJCC2025（第 15 回） 前夜祭ドキュメント…… 7

2. AJCC2025（第 15 回） 大会ドキュメント…… 10

第 3 章 プラットフォーム機能の形成と拡がり……18

1. AJCC 創設期における社会的背景と課題意識…… 15

2. 継続開始を通じたプラットフォーム機能の形成…… 15

3. 評価・学習の仕組みの整備と拡がり…… 16

4. AJCC 開催の歩み…… 17

5. 介護に関わる各種コンテストについて（補足）…… 20

第 4 章 主要な関係者の関わり・活動とその成果…… 22

1. 参加選手の関わり・活動とその成果…… 22

（1） 参加選手の属性及び参加動機 （23）

（2） ケアコンテストの事前準備活動とその成果 （26）

（3） 前夜祭及び大会当日の活動とその成果 （31）

（4） 介護の仕事とケアコンテスト(AJCC)（38）

（5） 外国人職員分野の選手特性 （43）

2. 選手派遣事業所の関わり・活動とその成果…… 46

（1） 法人・事業所の属性 （46）

（2） 選手派遣の選考基準 （47）

（3） 参加選手に対する法人・事業所としての支援 （48）

（4） 参加プロセスを通じて得られた成果と期待（50）

（5） ケアコンテスト（AJCC）への希望・改善点など（52）
＜選手派遣事業所ヒアリング結果＞ 事例1～8 （53）
3．動画投稿養成校の関わり・活動とその成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 61
（1） 動画投稿選手の活動 （61）
（2） 動画投稿の成果 （62）
＜動画投稿養成校ヒアリング結果＞事例1～8 （64）
4．アドバイザー及び高齢者役の関わり・活動とその成果・・・・・・・・・・・・・・・・ 73
（1） アドバイザーが策定する設定課題と評価指標 （73）
（2） アドバイザーコメントについて （78）
（3） 高齢者役の関わり・活動とその成果 （80）
（4） 高齢者役としての参加とこれから(83)
5．大会来場者の関心と参画・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 86
（1） 来場者の属性 （86）
（2） 介護についての関心領域 （87）
（3） ケアコンテスト（AJCC）の意義 （89）
第 5 章 アウトカムと今後への期待（考察）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 93
1．継続活動の成果（初期アウトカム）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 93
（1） 介護の「見える化」「価値・魅力」の共創 （95）
（2） 理念・エビデンスに基づく「良質な介護」の誘引 （96）
（3） 介護職のモチベーションアップ （96）
（4） 介護技術・技能、コンピテンシーの向上 （97）
（5） 外国人介護人材の育成・ダイバーシティ （98）
（6） 介護現場のトレーニングモデルとしての機能 （98）
（7） 介護職の交流・ネットワーク、地域との繋がり （99）
2．期待される成果・中長期の影響（インパクト）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 100
（1）介護職の社会的評価の向上 （100）
（2）介護人材の確保・育成・定着 （101）
（3）介護の質の向上 （102）
（4）新しい介護文化の創造 ～「Well-Being を共創する介護」 （103）
3．AJCC への期待と課題・・ 104
（1）「挑戦の場」の継続的確保と参加機会の拡大 （104）
（2） 評価指標等の現場活用とフィードバックの充実 （104）
（3） 選手相互の交流、ネットワークの促進 （104）
（4） 次世代養成・動画投稿コンテストの拡充 （105）
（5） グローバル化への対応と多文化共生の深化 （105）
あとがき（106）
＜参考資料＞各種アンケート及びヒアリング調査票・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・107

第1章
介護技能の向上を目的としたコンテストの効果分析に関する調査研究事業の概要

1. 調査研究事業の目的

オールジャパンケアコンテスト（以下、「AJCC」と言う。）は、「介護の質の向上と地域との繋がりを目指して」という理念を掲げ、2010 年（平成 22 年）に第 1 回大会を開催し、以降、毎年多くの参加者と共に成長を重ねてきた。第 15 回大会となった今年は、全国の介護現場で働く 150 人が選手としてエントリーし、昨年度に引き続き東京ビッグサイトに集い、介護現場で培ってきた介護実技を披露した。介護の仕事の価値や魅力、社会的意義を地域社会に広げるための活動として意義深いものとなっている。

本調査研究事業（以下、「本調査研究」と言う。）は、厚生労働省「令和 7 年度老人保健健康増進等事業」の一環として実施するものである。本調査研究では、AJCC2025 大会を対象に、介護技能向上を目的としたコンテストが、参加者や関係者にどのような影響を及ぼしているのかについて整理・検討することを目的とする。

具体的には、介護技術・技能の向上という直接的な効果に加え、参加者の意識や行動、事業所における取り組み、来場者や社会における介護に対する認識など、AJCC の活動を通じて生じている成果を多面的に捉えることを重視する。また、これらの成果を整理することを通じて、AJCC が果たしている役割や今後に向けた示唆を明らかにすることを目的とする。

2. 調査検討委員会での検討

本調査研究は、調査研究の適切な実施と成果の整理を目的として、調査検討委員会を設置し、その検討を踏まえて進めた。調査検討委員会では、調査研究の目的や基本的な方向性、調査方法の設計、分析の視点等について意見交換を行い、選手及び選手派遣事業所等を対象とする各種アンケート及びヒアリングを行い、報告書の取りまとめを行った。

【調査検討委員会　委員】

廣江　研　（社会福祉法人こうほうえん　会長）
及川　ゆりこ　（公益社団法人日本介護福祉士会　会長）
浦上　克哉　（鳥取大学医学部保健学科　認知症予防学講座教授）

白井　孝子　（学校法人滋慶学園　顧問）
伊藤　優子　（龍谷大学短期大学部　社会福祉学科　教授）
小林　光俊　（学校法人敬心学園　理事長）
秋山　由美子　（社会福祉法人福音寮　理事長）
新津　ふみこ　（NPO 法人メイアイヘルプユー　代表理事）

【オブザーバー】

厚生労働省　社会・援護局福祉基盤課
芦田　雅嗣　（福祉人材確保対策室　室長）
岡本　慎　（同上　室長補佐）
金山　峰之　（同上　介護人材定着促進専門官）
水津　秀幸　（同上　マンパワー企画係長、指導養成係長）
瀧川　凛　（同上　マンパワー企画係、指導養成係）

【技術支援】

NPO 法人　福祉経営ネットワーク
宮崎　民雄　（代表理事、㈲カスタマー・サービス代表取締役社長）
大塚　孝喜　（理事、㈱エイデル研究所　代表取締役所長）
遠藤　紀彦　（理事、㈱エイデル研究所　主任コンサルタント）

（敬称略）

3. 調査研究の方法及び事業内容

本調査研究では、AJCC2025（第 15 回）大会の活動とその成果をより具体的かつ多面的に把握し、検証するため、複数の調査手法を組み合わせて実施した。

●調査研究の方法

具体的には、調査員による参加観察を行い、大会の進行や参加者の様子、関係者間のやり取り等を記録した。また、ロジックモデルのフレームに基づき、AJCC の活動、成果、アウトカムの関係性を整理した。さらに、選手、選手派遣事業所、来場者、アドバイザー、高齢者役、動画参加養成校等を対象としたアンケート及びヒアリング調査を実施し、定量的・定性的なデータを収集した。

これらの調査結果を総合的に分析することにより、AJCC の活動とその成果について整理を行っている。

●ロジックモデルのフレームに基づく整理

ロジックモデルは、事業に投入される資源、実施される活動、そこから生じる成果、さらにアウトカムへと至る関係性を構造的に捉える枠組みである。

本年度の調査研究においては、このフレームを用いて、AJCC における各主体の活動や成果を整理するとともに、それらがどのようなアウトカムにつながっていると考えられるかについて検討を行っている。

また、AJCC の活動は、単年度で完結するものではなく、継続的に活動を通じて社会的価値を形成して

いるものである。創設以来 15 年間の AJCC の活動の歩みを振り返り、多様な主体が参画し、介護の価値・魅力の創造等に取り組む協働基盤としてプラットフォーム機能に着眼し、検討を行っている。

●アンケート及びヒアリングによる検証

AJCC2025（第 15 回）大会における活動の効果や影響を具体的に検証するため、以下の関係者を対象としたアンケート及びヒアリング調査を実施した。

- 来場者アンケート
- 選手アンケート（コンテスト前及び後）
- 選手ヒアリング（コンテスト実技後）
- 選手派遣事業所アンケート
- 動画投稿選手アンケート
- 高齢者役アンケート
- 選手派遣事業所ヒアリング
- 動画投稿養成校ヒアリング

これらの調査を通して、AJCC2025（第 15 回）大会と活動が、選手や選手派遣事業所等にどのような意識や行動の変化をもたらしたのか、具体的な効果を明らかにした。例えば、選手やその所属する事業所にとっての AJCC の活動の意義や、技術・技能の向上を目指す意欲、介護という仕事に対する誇りの醸成、また、来場者の反応やその影響がどのように反映されているかを、データとして収集・分析した。

●先行研究の成果を踏まえた検証

本調査研究については、昨年度、AJCC2024（第 14 回）大会を対象に調査研究を行っている。この先行研究では、AJCC が介護技能向上を図る場であると共に、介護の「見える化」や専門性の共有、介護人材のダイバーシティの可視化、学習機会の提供といった多様な側面を持つ活動であると整理している。

本年度の調査研究では、これらの整理を前提としつつ、AJCC2025（第 15 回）大会を対象とした調査研究を実施し、AJCC の活動や成果について改めて検証するものである。先行研究の成果に新たな視点を加えて分析・検討を行っている。

本調査研究の結果から AJCC の活動がもたらす広範な効果を明確化し、その社会的意義や価値を客観的に捉えるとともに、介護の価値や魅力、介護職の社会的評価を高めることに寄与する成果をまとめ、今後への期待や改善点を浮き彫りにすることで、AJCC のこれからの活動、さらなる発展の礎となることが本調査研究の目指すところである。

第2章
AJCC（第 15 回）大会ドキュメント

1．AJCC2025（第 15 回） 前夜祭ドキュメント

～「明日はみんな頑張ろう」の掛け声を合わせて

大会前夜、全国各地から集まった選手たちが、前夜祭会場となるホテルに続々と姿を見せていた。受付では、複数名のグループで手続きを行う選手の姿が多く見られ、受付後は分野別・部門別に指定された 15 のテーブルへと案内されていった。会場に入った直後の選手たちの表情には、緊張感とともに、明日の実技コンテストに向けた強い集中が感じられた。

多くの選手は、翌日の大会会場となる東京ビッグサイトの下見を行って来たようである。大きく掲示された「オールジャパンケアコンテスト」の案内表示、広いホールに設営された開会式会場、そして 15 の分野別・部門別の実技ブースを実際に目にすることで、コンテストの規模と重みを実感し、意気込みを新たにして前夜祭会場に入ってきた様子がうかがえた。

17 時 30 分から大会のオリエンテーションが始まると、会場の空気は一層引き締まった。選手たちは真剣な表情で説明に耳を傾けている。やがてスクリーンに昨年度 AJCC（第 14 回）大会の映像が映し出されると、張り詰めていた表情が次第に和らぎ、テーブル内での自己紹介や会話が増えていった。各テーブルにアドバイザーが着席し、選手とアドバイザーが同じ場を共有する構図が自然とつくられていた。

■前夜祭の開会

18 時、司会者による開会宣言をもって前夜祭が正式に始まった。「第 15 回オールジャパンケアコンテストは、北は北海道から南は鹿児島まで、全国から 150 名の選手が参加し、さらに動画投稿部門には大学・専門学校・高等学校 8 校から 35 名の選手が挑戦。大会史上、最も多くの参加を得ての開催となりました」と紹介がなされると、会場からは静かながらも確かな高揚感が伝わってきた。

大会実行委員会会長の廣江研氏（主管法人・社会福祉法人こうほうえん会長）は、「皆さん元気ですか」と選手に語りかけ、会場から大きな反響が返ってきた。「介護の仕事をもっと良くしていかなければならない」「明日は日頃培ってきた技を存分に発揮してほしい」「今夜は交流を深めてほしい」との挨拶に、選手たちの表情が次第に高揚してくるのが伺えた。会場の雰囲気は一気に高まってきた。

来賓挨拶では、厚生労働省事務次官の井原和人氏が登壇し、日頃の介護現場での活動へのねぎらいとともに、ご自身の身内の介護体験を通じて感じられた介護職の専門性やコミュニケーションの素晴らしさについて話された。介護職の処遇改善の必要性に触れながら、「加速する超高齢社会において、介護や医療の担い手である皆さんへの期待はますます大きい。明日は、磨いてきた技術を存分に発揮してほしい」と、選手への激励のメッセージが送られた。

続いて、大会実行委員会委員である浦上克哉氏（鳥取大学医学部教授）の乾杯の発声を合図に、各テーブルでの会食と交流が本格的に始まった。会場は、「認知症」「食事」「入浴」「排泄」「看取り」「口腔ケア」「外国人介護職員」の 7 分野に分かれ、さらに経験年数 10 年以上の A 部門、10 年未満の B 部門ごとに選手が着席している。各テーブルには 10 名の選手と 2 名のアドバイザーが同席し、ほとんどが初対面であるにもかかわらず、介護への共通の関心や経験をきっかけに、自然と会話が弾んでいった。

シフト勤務の都合などから前夜祭に参加できない選手もおり、そのことを残念がる声も聞かれた。しかし、24 時間 365 日の支援を担うエッセンシャルワーカーとしての介護職の仕事の特性を考えれば、やむを得ないことである。

「看取り」分野 A 部門では、ベテラン介護職が多く参加しているためか、前夜祭を欠席する選手も見受けられたが、会場にいる選手たちは落ち着いた表情で明日の実技に向けた思いを語り合っていた。会食の最中、一人の選手が調査研究について関心を示し、テーブルを移動して声をかけてきた。長野県の小規模多機能施設に 20 年以上勤務し、現在は管理職の立場にある選手であった。「看取りの介護は、これからますます必要になる分野だと思います。まだ経験は少ないのですが、あえて挑戦しました」と語る姿か

らは、AJCC を自身の実践を振り返り、新たな学びに踏み出す場として捉えている様子がうかがえた。

やがて、各分野・部門のアドバイザー紹介が行われ、続いて選手一人ひとりの所属法人と名前が読み上げられた。4 人目に紹介された選手がテーブルを代表して決意表明を行うという流れになった。「明日はガンバロー」と拳を突き上げ、声を合わせる場面が次第に増えていった。出会ってからわずか 1 時間ほどであるが、選手たちの間にはすでに仲間としての連帯感と一体感が生まれていた。明日のコンテストは、単なる競争ではなく、「仲間としての磨き合い」として受けとめられているようであった。

前夜祭の終盤には、記念撮影や握手が交わされ、互いの健闘を祈る姿が会場の各所で見られた。一部の選手はアドバイザーに再度確認を行い、翌日の実技に向けた準備を進めていた。肩をたたき合い、励まし合う光景があちこちで自然に生まれ、会場全体が活気に充ち、しかも温かな雰囲気が印象的であった。

20 時少し前に、大会実行委員の木島寛氏（主管法人　東京ロイヤル株式会社代表取締役）が挨拶に立ち、明日への期待を込めて「優しい思いやりの心を大事に」と、語りかけた。前夜祭のフィナーレである。

2. AJCC2025（第 15 回）大会ドキュメント

～介護の理念、エビデンスに基づく「良質な介護」を極める

■開会式

秋の爽やかな風が吹く朝、東京ビッグサイト正面の案内表示に沿って西 3 ホールへ入ると、会場にはすでに選手が整列していた。選手は出場分野ごとに色分けされたビブスを身に着け、開会式場前に静かに並んでいる。その表情は引き締まり、視線は自然と壇上へ向かっていた。8 時 45 分、実行委員会役員が登壇すると、会場全体が一段と緊張感を増し、司会者の開会宣言に続いて大会実行委員会会長の廣江研氏（主管法人・社会福祉法人こうほうえん会長）の挨拶が始まった。

全国から参集した選手に対して日頃の活動へのねぎらいを述べつつ、「前夜祭は楽しかったですか」と問いかけ、大会の目的と意義を改めて示した。「日頃の実力を発揮すること」「切磋琢磨し、競い合うこと」の意義に触れながらも、それ以上に「他の選手の実技から学ぶこと」「学びを事業所に持ち帰ること」を強調、「介護の重要さとすばらしさ」「介護職の専門性と社会とのつながり」を深める機会にしてほしいと力強く語りかけた。大きな拍手が起こり、選手たちの表情には覚悟と高揚が浮かんでいた。

続いて、実行委員会委員の紹介があり、審査・助言を担う 32 名のアドバイザー一人ひとりが紹介された。会場に集う多様な専門職が、同じ目的に向けて場を支える構図がここで明確になってきた。

選手宣誓では、外国人分野 B 部門で出場するライ・マニタ選手（スーパー・コート京・桂）が壇上に立ち、力強い声で宣誓した。国籍や文化の違いを越えて介護を愛する仲間として集ったこと、日本の介護を学ぶためにネパールから来たこと、利用者の笑顔や思いやる心に国境がないと感じていること、を語り、「介護を通じて地域と世界をつなぐ架け橋になります」と。会場は大きな拍手に包まれ、選手同士が

うなずき合い、互いの健闘を称え合う姿があちこちで見られた。

■実技コンテスト

開会式後、会場は 9 時 30 分の実技開始に向けて慌ただしく動き始めた。多数のスタッフやボランティアが、来場者受付、選手誘導、実技ブース等に配置し、バックヤード運営、音響・記録、アンケート対応など役割を分担し、手際よく準備を進めている。会場には、分野別・部門別に 15 の実技ブースが設けられ、各ブースには選手、高齢者役、2 名のアドバイザー、そして、司会者とタイムキーパーが配置されていた。選手と高齢者役はピンマイクを装着し、その音声はブースごとの大型スピーカーを通じて来場者に届く。実技が「見える」とともに、「聞こえる」形で共有される設営になっている。

午前に実技を行う選手は一堂に集められ、そこから各ブースへ誘導される。午前の選手は控室で待機し、実技が終わるまで他選手の演技を見学できない。競技の公平性を確保するための運営上の工夫である。一方、午後の実技は設定課題が切り替わるため、午後に出場する選手はブース周囲で見学できる。会場や進行に、競技性と学習性を両立させる工夫が見られる。

9 時を過ぎるころから一般来場者も増え、配布されたプログラムを覗き込みながら各ブースの配置を確認する姿が見られた。受付付近で言葉を交わした初老の男性は、「介護コンテストでどんなことをするのか、気になって来た」と語り、開会式が終わったと聞くと「目的や主旨を聞きたかった」と感想を述べた。AJCC が社会に向けて介護の姿を示す場として機能していることを、来場者の言葉が端的に示していた。

9 時 30 分、総合司会者による全体アナウンスを合図に、各ブースで 1 人目の選手の実技が始まった。進行は各ブースとも共通しており、次のようにすすめられた。

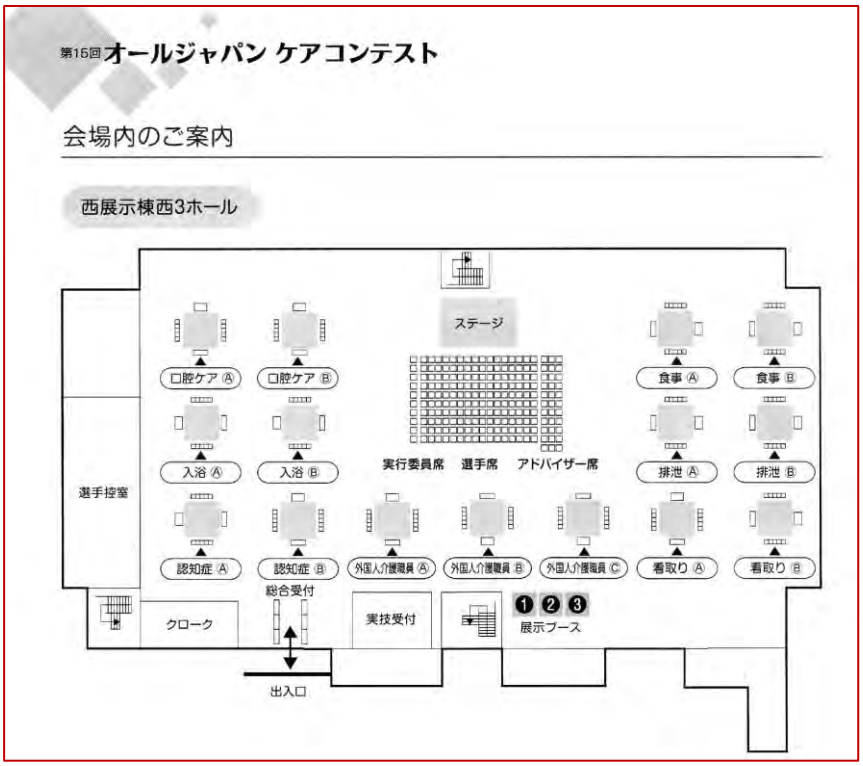
- 司会者により選手の紹介。「実技」の開始である。
- 各ブースに設置してあるタイマーが動き始める。
- 高齢者役への介護（実技）が始まる。実技時間は 10 分間である。
- 制限時間が近づくとタイムキーパーが合図を送る。
- 実技が終わると、司会者が「本人の感想」「高齢者役からのフィードバック」「アドバイザーからのコメント（対話)」の順で進行する。

選手の実技は、設定課題に示された「いま」「ここで」の利用者への介護実践である。利用者の尊厳の保持を前提に、コンテストの評価指標の実現を目指して、根拠（エビデンス）に基づく自立支援の「良質な介護」を創出する活動として行われる。

最初の選手の実技とそのフィードバックの時間は、20 分～25 分サイクルである。以降は、5 分間ほど

の間隔をおいて次の選手の実技が始まる。11 時 20 分～12 時 20 分までの昼食休憩をはさみ、午後の 5 名の実技が終了したのは、14 時 10 分であった。

■AJCC 開催当日　会場図



【会場全体に配置】

① 総合司会
② 音響スタッフチーム
③ 入場口スタッフ、会場外誘導
④ アンケートスタッフ
⑤ 選手誘導スタッフ
⑥ バックヤードスタッフ（荷物置き場、選手控室、お弁当準備　等）
⑦ 開会式・閉会式スタッフ（司会、メダル等授与サポート　等）
⑧ 会場設営、撤収スタッフ
⑨ 記録係、写真撮影スタッフ
⑩ 展示ブーススタッフ（動画投稿放映、出展者対応）

【各ブース　選手等の配置】	【各ブース　備品等の設置】
① 選手（実演者）（1 名） ② 高齢者役（1 名）	① 床（分野により色分け） ② 壁（分野名称の掲示、10 分タイマー）

③　司会者（1 名） ④　アドバイザー（2 名） ⑤　タイムキーパー（1 名） ＊①～④は、ピンマイクの装着 ⑤「1 分前ボード」 （タイマー設定）	③　音響装置。ピンマイク、スタンド付き大型スピーカー、ブース別の音響装置 ④　コンテスト課題用の備品（ベッド、机、椅子、小物等　配置は課題に記載） ⑤　コンテスト課題設定の掲示（スタンド付き） ⑥　見学者用の椅子等

■ブース別アドバイザーミーティング

14 時 40 分から、各ブースでアドバイザーミーティングが始まった。2 名のアドバイザーを中心に、選手が車座になってのフィードバックミーティングである。高齢者役が参加するブースもあり、実技を終えた直後の安堵感と、学びを深めようとする真剣さが同居していた。進行はブースごとに異なるが、共通して、選手一人ひとりが感想を述べ、得た気づきを言葉にしている点が印象的である。選手たちの表情には、達成感、充実感が浮び、学びを噛みしめる姿勢がうかがえる。

アドバイザーは設定課題のポイントを振り返りつつ、多角的な視点から助言を行っていた。そこでは単なる「答え合わせ」ではなく、現場で求められる判断や対応の幅を捉え直す対話が進んでいた。選手からは「第三者の視点で見てもらえる機会が新鮮だった」「他の選手の技術を見て学びが多かった」といった言葉が聞かれ、現場実践へつなげようとする意欲が表れていた。高齢者役から「一緒に働きたいと思った」「自信を持ってほしい」とエールを送る場面もあり、会場には専門性と温かさが交差する空気が漂っていた。

■展示・情報発信ブース

会場の一角には、養成校の学生が投稿した動画作品の展示ブースが設けられていた。今回は 8 校から 35 作品が投稿され、制作プロセスを通じて学生が学び、まとめ上げた成果として映像が上映されていた。

映像からは、技術・技能に加え、コミュニケーションや寄り添いの大切さを捉えようとする姿勢が伝わり、見学者が足を止めて見入る場面が多かった。会場内に、現場の介護職だけでなく次世代の担い手が参加する層の厚さが生まれている。

また、公益社団法人日本介護福祉士会のブースでは、活動紹介のパンフレットや出版物が並び、マスコットキャラクターとともにスタッフが情報発信を行っていた。さらに、介護 DX や現場改革、生産性向上

に取り組む社会福祉法人善光会・株式会社善光会総合研究所のブースが設けられ、「スマート介護士資格」や各種ソフトの紹介が行われていた。会場全体が、実技コンテストだけでなく、介護の現場を支える取り組みや潮流を共有する場としても機能していた。

■表彰式・総評・閉会

14 時 50 分、会場では、期待と緊張感が漂うなか表彰式が始まった。まず動画部門の表彰が行われ、優秀賞の受賞者が登壇した。受賞者が制作過程や受賞への感謝を語り、会場から惜しみない拍手が送られた。続いて、各分野・部門での優秀賞、最優秀賞の発表が行われ、午前・午後のコンテストから受賞者の名前が次々と読み上げられた。受賞者がステージに上がり、賞状とメダルを手にすると、会場は大きな拍手に包まれ、仲間からの祝福の声が上がった。外国人介護職員分野の表彰では、会場の盛り上がりが一段と増し、多様な担い手が互いに称え合う姿が強く印象に残った。

受賞者は、喜びとともに仲間への感謝を語り、介護の仕事への誇りが言葉と表情ににじんでいた。

表彰式後、アドバイザーが各分野・部門の総評を述べた。総評は課題解説にとどまらず、介護の本質に触れながら、選手の真摯な取り組みを賞賛する内容であり、参加選手が深い学びを受けとめる時間となった。創設のころから関わられているＴアドバイザーは、「大会前の準備での話し合い」「職場での介護の振り返り」「緊張の中でもできたこと」「他の選手の実技を見て気づいたこと」を大切にしてほしいと語り、日常実践へつなげていくことを強調していた。

閉会挨拶では、実行委員会委員の及川ゆりこ氏（主管団体・公益社団法人日本介護福祉士会会長）が壇上に立ち、選手および関係者をねぎらい、「選手の皆さん、素晴らしい介護でした。褒められたことを覚えておいて、誇らしく伝えてほしい」とメッセージを送った。会場には感動と感謝の拍手が広がり、選手たちは互いの健闘を称え合い、記念撮影や握手を交わしながら充実した一日を締めくくった。

大会の幕は閉じたが、選手たちの表情は、明日からそれぞれの現場で力を尽くそうとする決意に満ちているようだった。

第3章
プラットフォーム機能の形成と拡がり
～AJCC 創設の背景と継続的な活動の拡充

AJCC（オールジャパンケアコンテスト）は、2010 年の第 1 回開催以降 15 年にわたり継続して実施してきたケアコンテストである。本章では、第 1 回から第 15 回までの開催実績に関するデータをもとに、AJCC がどのような背景のなかで創設し、ケアコンテストのプラットフォーム機能を果たし、拡充してきたかについて整理する。その形成と拡がりの活動は、本調査研究が目的とするアウトカムの基盤条件であり、源泉として位置づけられるものである。

1. AJCC 創設期における社会的背景と課題意識

AJCC が創設された 2010 年前後は、介護保険制度の施行から 10 年が経過するなかで、介護に対する認識や期待が社会のなかで大きくなり、成熟してきた時期であった。要介護認定を受ける高齢者数は増加し、介護は多くの人々の生活を支える不可欠な社会基盤として広がりを見せていた。一方で、介護の仕事そのものに対する社会的評価や認知のあり方については、肯定的とは言い難い状況にあった。

当時、介護の仕事は、身体的・精神的負担の大きさや労働条件の厳しさが強調される形で語られることが多く、マスメディア等においてもネガティブな側面をクローズアップする報道がみられた。学校の進路指導においても、介護の仕事を忌避する傾向が見られ、若者の介護職離れが顕著になっていた。

介護の専門性や実践の価値を体感し、認識できる機会も少なく、介護の社会的理解や適切な職業イメージの形成が難しい。このような状況のなかで、介護の仕事を支える人材の確保や育成、さらには介護の質の向上について、社会全体でどのように支えていくかが、重要な課題として浮上していた。

AJCC は、こうした介護をめぐる社会的課題を背景に、介護実践そのものをケアコンテストという公開に場で示し、専門性の意義や価値・魅力を伝えて行こうという試みとして構想された取り組みである。実技という形式を通じて、現場で培われてきた介護のあり方を仲間や地域社会と共有し、介護の技術・技能の切磋琢磨を図りながら、介護の社会的認識を高める契機として開催するというのが、創設期における基本的な課題意識であったと整理できる。

2. 継続開催を通じたプラットフォーム機能の形成

AJCC は、第 1 回大会以降、継続的な開催を重ねるなかで、単なる一過性のイベントではなく、一定の枠組みと機能を備えた取り組みへと展開してきた。その過程では、主催団体や後援・協賛団体の拡充とと

もに、参加主体や競技分野、開催形態の幅が徐々に広げられてきた。

開催初期においては、主催主体や開催地域は限定的であったが、回を重ねるにつれて主催団体は複数化し、国や地方行政機関による後援、さらには多くの企業・団体による協賛が加わる体制が構築されている。また、開催地も地域開催から大都市圏での開催へと展開し、より多くの関係者が参加・来場できる環境が整えられてきた。

競技分野においても、認知症、食事、入浴、排泄、看取り、口腔ケアといった基礎的分野を中心に構成してきた枠組みに加え、外国人介護職員分野の創設や経験年数による部門設定の工夫など、多様な選手が参加できる仕組みが導入されている。さらに、養成校を対象とした動画投稿の開始や、会場実技と動画投稿を組み合わせた開催形式の導入など、参加形態の多様化が進められてきた点も特徴的である。

これらの動きは、AJCC が多様な主体の関与を受けとめながら、継続的に介護の価値・魅力の創造に機能するプラットフォームとしての基盤を形成してきた過程を示している。

3. 評価・学習の仕組みの整備と拡がり

AJCC におけるプラットフォーム機能の形成においては、評価や学習の仕組みの整備も重要な要素となっている。創設当初から、実技に基づく審査・評価が行われてきたが、継続開催を通じて設定課題や評価基準の整理・明確化が進められてきた。

近年では、学識者や専門家に加えて、介護の専門職として活躍する認定介護福祉士が多数関与する体制が構築され、実技に対する評価やコメントを通じて、介護実践の方向性を明確にする仕組みが整えられている。これにより、AJCC は単に優劣を競う場ではなく、「良質な介護とは何か」を考え、学び合い、創造する機会・場としての性格を強めてきた。

このようなケアコンテストの枠組みは、参加選手個人の技術・技能の向上や学びにとどまらず、派遣事業所や養成校、来場者を含む多様な関係者に共有されることで、介護に対する共通理解と価値・魅力の形成に寄与しているものである。

以上のように、AJCC は、創設期の問題設定を起点として、継続的な開催を通じて、運営基盤、参加主体、評価・学び・創造の仕組みを段階的に整備・拡張してきた。これらの形成と拡がりは、それ自体が成果であるとともに、多様な活動や学び・創造が生まれる前提条件として位置づけられるものである。本調査研究では、これらを AJCC におけるアウトカムの源泉として捉え、次章以降で整理する関係者の活動や成果を理解するための基盤として位置づける。

4. AJCC 開催の歩み

AJCC2025（第 15 回） 	主催：第 15 回オールジャパンケアコンテスト実行委員会 （16 名） 主管法人：こうほうえん 日本介護福祉士会 SONPO ケア・やさしい手・東京ロイヤル・長岡福祉協会 後援：東京都社会福祉協議会 日程：2025 年 10 月３日（金）前夜祭、10 月４日（土）コンテスト 主会場：東京ビックサイト 西3ホール 参加選手数：150 名 動画投稿/養成校：8校（35 名） 活動内容：認知症・食事・入浴・排泄・看取り・口腔ケア・外国人介護職員の 7 分野。A部門（10 年以上）、B部門（10 年未満）設定。外国人介護職員分野は C 部門を設定。 事前レポート、審査・評価を実施。会場実技各分野別に最優秀賞」「優秀賞」。動画投稿各部門別「優秀賞」「奨励賞」 総来場者：1500 名 大会スタッフ：117 名（ボランティア22名） 後援団体：東京都社協他 11 団体、特別後援：高齢者住宅新聞社 協賛企業団体：67 社 ブース協賛団体：日本介護福祉士会、社会福祉法人善光会/善光総合研究所 補助金：厚生労働省老人保健健康増進等事業補助金 東京都介護理解促進事業補助金
AJCC2024（第 14 回） 	主催：第 14 回オールジャパンケアコンテスト実行委員会 （14 名） 主管法人：SONPO ケア・やさしい手・東京ロイヤル・こうほうえん 後援：東京都社会福祉協議会 特別後援：高齢者住宅新聞社 日程：2024年８月５日（月）前夜祭、８月６日（火）コンテスト 主会場：東京ビックサイト 南展示棟南1ホール 参加選手数：140 名 動画投稿/養成校：9 校（38 名） 活動内容：認知症・食事・入浴・排泄・看取り・口腔ケア・外国人介護職員の 7 分野。A部門（6年以上）、B部門（6年未満）設定。事前レポート、審査・評価を実施。会場実技各分野「優秀賞」。動画投稿各分野「優秀賞」「奨励賞」 総来場者：1500 名 大会スタッフ：128 名（ボランティア 13 名） 後援団体：13団体、特別後援：高齢者住宅新聞社 協賛企業団体：93 社 補助金：厚生労働省老人保健健康増進等事業補助金 東京都介護理解促進事業補助金
AJCC2023（第13回） 	主催：第 13 回オールジャパンケアコンテスト実行委員会 （14 名） 主管法人：SONPO ケア・やさしい手・東京ロイヤル・こうほうえん 後援：厚生労働省 日程：2023 年 10 月 14 日（土）前夜祭、10 月 15 日（日）コンテスト 主会場：板橋区立植村記念加賀スポーツセンター 参加選手数：100 名 動画投稿/養成校：9 校 活動内容：認知症・看取り・食事・口腔ケア・入浴・排泄（A 部門/6 分野） 認知症・食事・入浴・排泄（4 分野/B 部門）/外国人介護士部門。 会場実技各分野「優秀賞」「奨励賞」。動画投稿各分野「優秀賞」「奨励賞」 総来場者：650 名 大会スタッフ：100 名（ボランティア 35 名） 後援団体：15 団体 協賛企業団体：134 社 補助金：東京都介護理解促進事業補助金
AJCC2022（第１２回） 	主催：第 12 回オールジャパンケアコンテスト実行委員会（13 名） 主管法人 ：SOMPO ケア・やさしい手・東京ロイヤル・こうほうえん 後援 厚生労働省 日程：2022 年 12 月 10 日（土）コンテスト 主会場：板橋区立小豆沢体育館 参加選手数：125 名 （会場 53 名/動画 72 名） ＊会場実技と動画投稿のハイブリッド開催 記念講演：「科学的に正しい認知症予防」～ウイズコロナ時代の確かな予防～ （鳥取大学医学部保健学科 浦上克也氏） 活動内容：認知症・看取り・口腔ケア・入浴・外国人(5 分野）/会場実技。食事・排泄（2 分野）/動画投稿。会場実技各分野「優秀賞」「奨励賞」。動画投稿各分野「優秀賞」「奨励賞」。 大会DVD作成配布。 総来場者：650 名 大会スタッフ：76 名（ボランティア 15 名） 後援団体：14 団体 協賛企業団体：61 社 補助金：東京都介護理解促進事業補助金

AJCC2021（第 11 回） ・第 11 回 AJCC は新型コロナウィルス感染症対策のため、動画応募方式で開催。 ・設定課題に応じた実技動画を撮影して投稿。 ・課題の分野は「認知症」「食事」「看取り」の3分野。各分野で「入所」「在宅」「在宅」の区分を設ける。分野・区分を選んで実技を行う。（看取りは「入所」と「在宅」のみ）	主催：第 11 回オールジャパンケアコンテスト実行委員会（14 名） 主管法人　：SOMPO ケア・やさしい手・東京ロイヤル・こうほうえん 後援：厚生労働省 日程：2022 年 3 月 20 日（大会報告・結果発表） 参加選手数：79 名（エントリー数） 活動内容：認知症・食事・看取り(3分野)、動画投稿応募により選考　。「特別賞」2　名、「チャレンジ賞」3 名、「奨励賞」5 名、「優秀賞」3 名選定。 後援団体：42 団体 協賛企業団体：123 社 補助金：東京都介護理解促進事業補助金
AJCC2019（第10 回） 	主催：第 10 回オールジャパンケアコンテスト実行委員会（23 名） 共催　鳥取県、第一生命 後援　厚生労働省 日程：2019 年 10 月 19 日（前夜祭）、10 月 20 日（コンテスト） 主会場：国立オリンピック記念　青少年総合センター 参加選手数：130 名 上映会：「ピア～まちをつなぐもの～」 トークショー：山国秀幸氏（ケアニンエグゼクティブ・プロデューサー） 活動内容：認知症・食事・入浴・排泄・看取り・口腔ケア・外国人介護士（7分野）。A部門（5 年以上）B部門（5　年未満）設定。事前レポート、審査・評価を実施。優秀者を選考。大会DVD作成配布。 総来場者数：1,500 名 大会ボランティア：131 名 後援団体：29 団体 協賛企業団体：122 社 補助金：鳥取県介護ｻｰﾋﾞｽの質の向上支援補助金、第一生命
AJCC2018（第９回） 	主催：第 9 回オールジャパンケアコンテスト実行委員会（22 名） 共催：鳥取県、第一生命 後援：厚生労働省 日程：2018 年 10 月 12 日（前夜祭）、10 月 13 日（コンテスト） 主会場：鳥取県米子市　米子ｺﾝﾍﾞﾝｼｮﾝｾﾝﾀｰ 参加選手数：112 名（うち県内 33 名） 上映会：「ケアニン～あなたでよかった～」 トークショー：山国秀幸氏（ケアニン　エグゼクティブ・プロデューサー） 鈴木　真氏（株式会社まこじろう執行取締役） 飯島惠子氏（ゆいの里代表 活動内容：認知症・食事・入浴・排泄・看取り・口腔ケア（6　分野）。A部門（5　年以上）B部門（5 年未満）設定。事前レポート、審査・評価を実施。優秀者を選考。大会DVD作成配布。 来場者総数：2,250 名 大会ボランティア：131 名 後援団体：29 団体 協賛企業団体：122 社 補助金：鳥取県介護ｻｰﾋﾞｽの質の向上支援補助金、第一生命
AJCC2017（第８回） 	主催：第 8 回オールジャパンケアコンテスト実行委員会（22 名） 共催：鳥取県、第一生命 後援：厚生労働省 日程：2017 年 10 月 6 日（前夜祭）、10 月 7 日（コンテスト） 主会場：鳥取県米子市　米子ｺﾝﾍﾞﾝｼｮﾝｾﾝﾀｰ 参加選手数：109 名（うち県内 33 名） 講演：介護サービスにおける ICT（情報通信技術）、AI（人工知能）、ロボット技術の応用と今後について」東祐二氏（（前）厚生労働省老健局　福祉用具・住宅改修官） 活動内容：認知症・食事・入浴・排泄・看取り・口腔ケア（6　分野）。A部門（5　年以上）B部門（5 年未満）設定。事前レポート、審査・評価を実施。優秀者を選考。大会DVD作成配布。 来場者総数：2,010 名 大会ボランティア：154 名 後援団体：28 団体 協賛企業団体：121 社 補助金：鳥取県介護ｻｰﾋﾞｽの質の向上支援補助金、第一生命

AJCC2016（第７回） 	主催：第７回オールジャパンケアコンテスト実行委員会（22 名） 共催：鳥取県、第一生命 後援：厚生労働省 日程：2016年 10 月 7 日（前夜祭）、10 月 8 日（コンテスト） 主会場：鳥取県米子市　米子ｺﾝﾍﾞﾝｼｮﾝｾﾝﾀｰ 参加選手数：117 名　（うち県内 37 名） 講演：「福祉用具・介護ロボットを用いた介護負担軽減の取組」小林　毅氏（厚生労働省老健局高齢者支援課　福祉用具・住宅改修指導官）。「優れたQOLサポーターの育成」平純司氏（新潟医療福祉大学　医療技術学部　義肢装具自立支援学科） ＊ノーリフティング機器＆介護ロボット　デモ開催 活動内容：認知症・食事・入浴・排泄・看取り・口腔ケア（6 分野）。A部門（5 年以上）B部門（5 年未満）設定。事前レポート、審査・評価を実施。優秀者を選考。大会DVD作成配布。 来場者総数：3,236 名 大会ボランティア：223 名 後援団体：28 団体 協賛企業団体：140 社 補助金：鳥取県介護ｻｰﾋﾞｽの質の向上支援補助金、第一生命。
AJCC2015（第６回） 	主催：第６回オールジャパンケアコンテスト実行委員会（20 名） 共催：鳥取県 後援：厚生労働省 日程：2015 年 10 月 9 日（前夜祭）、10 月 10 日（コンテスト） 主会場：鳥取県米子市　米子ｺﾝﾍﾞﾝｼｮﾝｾﾝﾀｰ 参加選手数：120 名　（うち県内 27 名） 講演：浦上克哉氏（鳥取大学医学部教授） 活動内容：認知症・食事・入浴・排泄・看取り・口腔ケア（6 分野）。A部門（5 年以上）B部門（5 年未満）設定。事前レポート、審査・評価を実施。優秀者を選考。大会DVD作成配布。 来場者総数：3,150 名 大会ボランティア：125 名 後援団体：28 団体 協賛企業団体：159 社 補助金：鳥取県介護ｻｰﾋﾞｽの質の向上支援補助金
AJCC2014（第５回） 	主催：第５回オールジャパンケアコンテスト実行委員会（21名） 共催：鳥取県 後援：厚生労働省 日程：2014 年 10 月 17 日（前夜祭）、10 月 18 日（コンテスト） 主会場：鳥取県米子市　米子ｺﾝﾍﾞﾝｼｮﾝｾﾝﾀｰ 参加選手数：119 名　（うち県内 32 名） 講演：東内京一氏（埼玉県和光市保健福祉部長） 活動内容：認知症・食事・入浴・排泄・看取り・口腔ケア（6 分野）。A部門（5 年以上）B部門（5 年未満）設定。事前レポート、審査・評価を実施。優秀者を選考。大会DVD作成配布。 来場者総数：3,010 名 大会ボランティア：135 名 後援団体：28 団体 協賛企業団体：157 社 補助金：鳥取県介護ｻｰﾋﾞｽの質の向上支援補助金
AJCC2013（第４回） 	主催：第４回オールジャパンケアコンテスト実行委員会（20 名） 共催：鳥取県 後援：厚生労働省 日程：2013 年 11 月 11 日（前夜祭）、11 月 12 日（コンテスト） 主会場：鳥取県米子市　米子ｺﾝﾍﾞﾝｼｮﾝｾﾝﾀｰ 参加選手数：120 名　（うち県内 27 名） 講演：上野秀樹氏（社会福祉法人ロザリオ聖母の会）、マリアンネ・ドウエ氏（コリング市（デンマーク）在宅介護課長） 活動内容：認知症・食事・入浴・排泄・看取り・口腔ケア（6 分野）。事前レポート、審査・評価を実施。優秀者を選考。大会DVD作成配布。 来場者総数：2,719 名 大会ボランティア：140 名 後援団体：29 団体 協賛企業団体：159 社 補助金：鳥取県介護ｻｰﾋﾞｽの質の向上支援補助金

AJCC2012（第３回） 	主催：第 3 回オールジャパンケアコンテスト実行委員会（20 名） 共催：鳥取県 後援：厚生労働省 日程：2012 年 10 月 1 日（前夜祭）、10 月 2 日（コンテスト） 主会場：鳥取県米子市　米子ｺﾝﾍﾞﾝｼｮﾝｾﾝﾀｰ 参加選手数：108 名（うち県内 36 名） 講演：石飛幸三氏（世田谷区「芦花ホーム」常勤医） 活動内容：認知症・食事・入浴・排泄・看取り・口腔ケア（6 分野）。事前レポート、審査・評価を実施。優秀者を選考。予選、本選形式導入。大会DVD作成配布。 来場者総数：2,700 名 大会ボランティア：119 名 後援団体：29 団体 協賛企業団体：139 社 補助金：鳥取県「支え愛」体制作り事業費補助金
AJCC2011（第２回） 	主催：社会福祉法人こうほうえん 日程：2011 年 11 月 15 日（前日祭）、11 月 16 日（コンテスト） 主会場：鳥取県境港市　夢みなとタワー 参加選手数：70 名　（うち県内 24 名） 講演：浦上克哉氏（鳥取大学医学部教授） 活動内容：認知症・食事・入浴・排泄・看取り（5 分野）。審査・評価を実施。優秀者を選考。
AJCC2010（第１回）	主催：特定非営利活動法人なごみの里 （柴田久美子：一般社団法人日本看取り士会　会長） 日程：2010 年 11 月 10 日（前夜祭）、11 月 11 日（コンテスト） 主会場：島根県出雲市　出雲体育館 参加選手：58 名 講演：遠藤英俊氏（国立長寿医療センター包括診療部長） 活動内容：認知症・食事・入浴・排泄・ターミナルケア（5 分野）。審査・評価を実施。優秀者を選考。 補助金：日本財団助成

5. 介護に関わる各種コンテストについて（補足）

介護技術の向上や専門性の可視化を目的としたコンテストは、地方自治体、職能団体、教育機関、あるいは国の施策として多角的に展開されている。以下に、主要な事例の概要を整理する。

（1） 都道府県社協・職能団体等による介護技術コンテスト

2025 年開催の主なものとして、静岡県介護技術コンテスト（第 12 回）、かがわ介護王座決定戦（第 12 回）、みえ介護技術コンテスト（第 10 回）、愛知介護技術コンテスト（第 9 回）などがある。

県内の介護職員を対象とし、提示された事例（移乗、移動、排泄、食事等）に対する実技の正確性と安

全性などを評価する。審査員は地域の大学教授や介護福祉士会役員等が務め、地域における標準的な介護技術の普及・啓発に重点が置かれている。優秀者には知事賞や会長賞等が授与される。

福島県では、事業所対抗戦として実施している。多くの県において地域福祉の推進や人材確保施策の一環として継続開催している。

(2) 全国福祉高等学校長会による研究発表大会(実技部門)

福祉を学ぶ高等学校生を対象とするコンテストである。全国福祉高等学校長会が主催するもので、全国大会は各地域の持ち回りで開催している。令和 7 年度は福島県で全国大会を開催した。

各地区ブロック大会(北海道、東北、関東、北信越、東海、近畿、中国、四国、九州)を勝ち抜いた代表が出場する。事例課題に対する実技(7 分間)に加え、その介助の根拠や留意点を説明するアピール(2 分間)の合計点で評価を行う。技術の正確さだけでなく、教育課程に基づいた理論的裏づけが評価の重要指標となっている。

文部科学省、厚生労働省の後援を得て開催しているもので、次世代の介護人材育成の象徴的なコンテストとして位置づけられるものである。

(3) 技能五輪全国大会における「介護」職種

技能五輪は、原則 23 歳以下の青年技能者が対象である。青年技能者の技能レベルを競うことにより、努力目標を与え、技能に身近に触れる機会を提供することなどを通じて、広く国民一般に対して、技能の重要性や必要性をアピールすることを目的にしている。国際技能競技大会(WorldSkills Competition)の基準に準拠した競技形式で開催しているものである。厚生労働省、中央職業能力開発協会(JAVADA)の主催である。

2025 年(第 63 回)大会は、電子技術系の職種に「自律移動ロボット」の職種が新たに加えられ、介護職種はエキシビションとしての開催で 43 職種の競技が行われた。2026 年(第 64 回)大会には介護職種を正式職種として開催する予定である。

国際基準に基づく評価指標のもとで客観的な技術精度を競う点に特徴がある。介護技能に関する評価基準が検討されている。

(4) その他の関連する取り組み

近年、大手介護事業者や社会福祉法人グループ単位での独自の介護技術コンテストが実施されている。人材育成施策としての研究発表会に実技コンテストを導入する動きも見られる。

法人内、事業所内の技術標準化や職員のモチベーションの向上を目的とするものが多く、優秀者を県の大会や全国大会へ派遣するという仕組みをとっているところもある。

また、技術革新や IT 化、介護の生産性向上の推進等との関係で、介護技術だけでなく介護ロボットや ICT の活用を評価対象に含めた、新たな取り組みも一部の自治体で試験的に開始されている。

第4章
主要な関係者の関わり・活動とその成果
～選手及び選手派遣事業所等アンケート・ヒアリングに基づく検証

本章では、AJCC2025（第 15 回）参加の選手及び選手派遣事業所等、主要な関係者について具体的な関わり・活動に焦点を当て、その成果について整理検討する。本調査研究で行った各種アンケート及びヒアリング結果に基づいて検証するものである。

1. 参加選手の関わり・活動とその成果
～実技による介護の「見える化」と「価値・魅力」の共創

参加選手は、ケアコンテストの主役である。本大会（AJCC2025）では、①認知症、②食事、③入浴、④排せつ、⑤看取り、⑥口腔ケア、⑦外国人介護職員の 7 分野について、A 部門（経験 5 年以上）、B 部門（経験 5 年未満）でそれぞれ 10 名、総数 140 名の選手募集を予定していた。しかし、実際に選手登録を開始すると予定枠を大幅に超える人数となり、とくに外国人介護職員分野の選手登録が多くなった。また、今年の選手登録では経験 10 年以上のベテラン介護職員の登録が多くなったということで、外国人職員分野に C 部門 10 名を新たに設けると共に、①～⑥の各専門分野については、経験 10 年以上を A 部門とし、経験 10 年未満を原則 B 部門での開催となった。外国人介護職員分野は経験年数を基準に A～C 部門に区分し、合計 150 名の出場選手承認を行った（出場辞退者 2 名があり、実際の出場選手は 148 名となった）。出場選手を対象とするアンケート及びヒアリングの実施内容は以下の通りである。

■参加選手アンケート及びヒアリング調査

選手アンケート（コンテスト前）調査 （以下、「選手事前アンケート」と言う）	・参加選手 148 名を対象とする Web アンケート。 ・ 9 月 17 日に発信し 10 月 2 日までの回答。 ・有効回答率 64.8%。
選手ヒアリング（コンテスト実技後）調査 （以下、「選手実技後ヒアリング」と言う）	・ケアコンテスト分野・部門各 1 名以上。 ・専門調査員による直接ヒアリング ・10 月 4 日のケアコンテスト当日（実技終了選手を対象） ・43 名に声掛け全員が応諾。有効回答率 100%。
選手アンケート（コンテスト後）調査 （以下、「選手事後アンケート」と言う）	・参加選手 148 名を対象とする Web アンケート。 ・10 月 14 日に発信し 10 月 27 日までの回答。 ・有効回答率 50.0%。

＊自由回答については、主な回答について親和性を基準にカテゴリー区分した結果である。

＊各アンケート及びヒアリングの集計図表では、Web 集計の番号・質問項目をそのまま表記した。
本報告書の巻末に参考資料として掲載したアンケート及びヒアリング項目を参照してほしい。

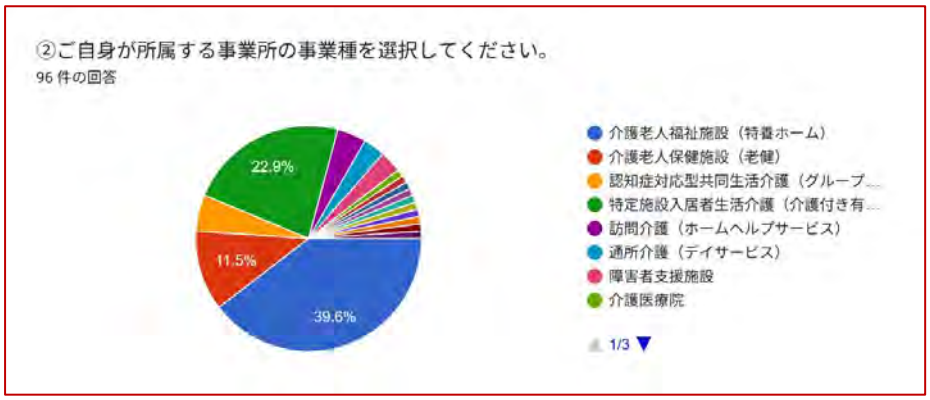
（1） 参加選手の属性及び参加動機

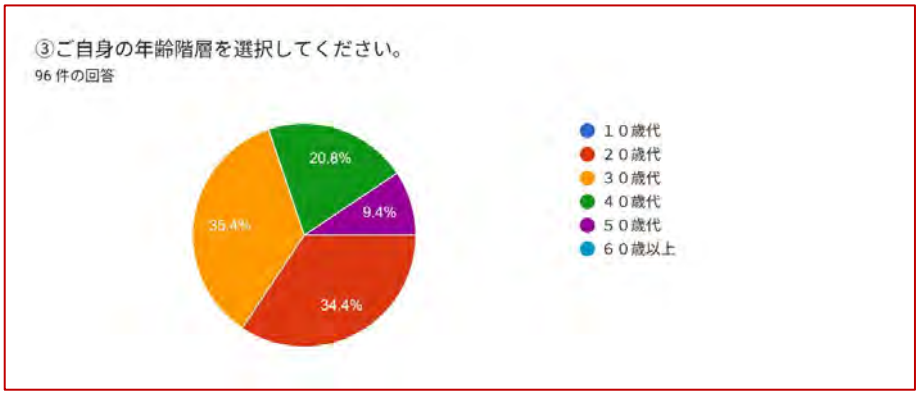
① 所属事業種・年齢・経験年数・立場

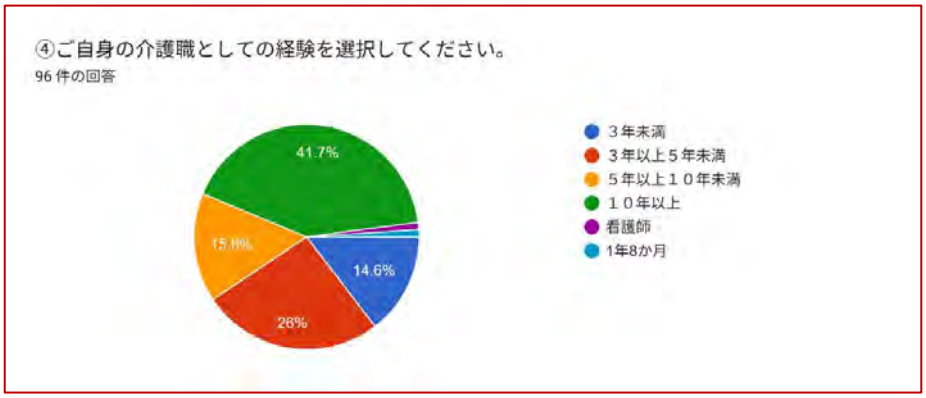
「選手事前アンケート」結果から参加選手属性について、所属事業種、年齢階層、介護職としての経験年数、介護に関する保有資格、組織上の立場職等についてのデータを取得した。

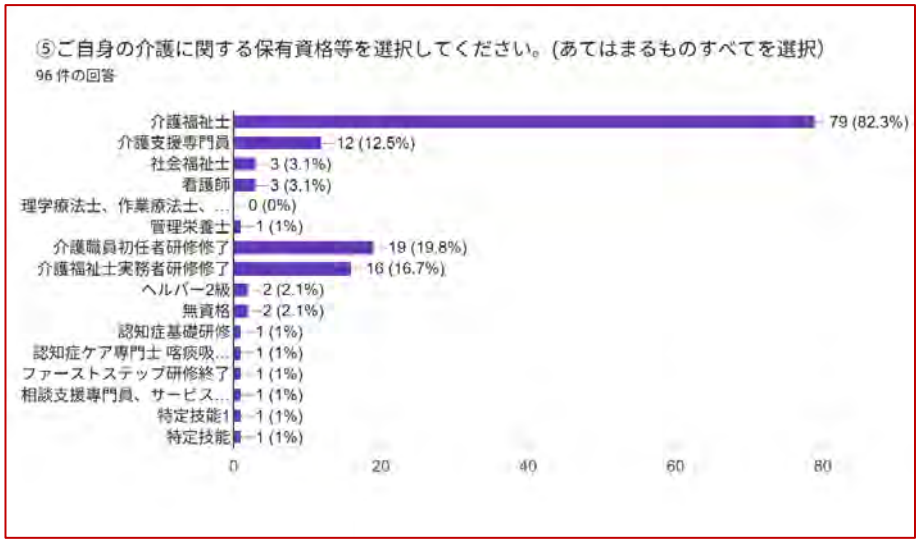
選手の年齢階層は、20 歳代が 34.4%、30 歳代が 35.4%、40 歳代が 20.8%の 3 世代が中心。介護職としての経験年数は、10 年以上が最も多く 41.7%、5 年以上 10 年未満が 15.6%、3 年以上 5 年未満が 26%、3 年未満が 14.6%であった。選手の 82.3%が介護福祉士資格の保有者であった。

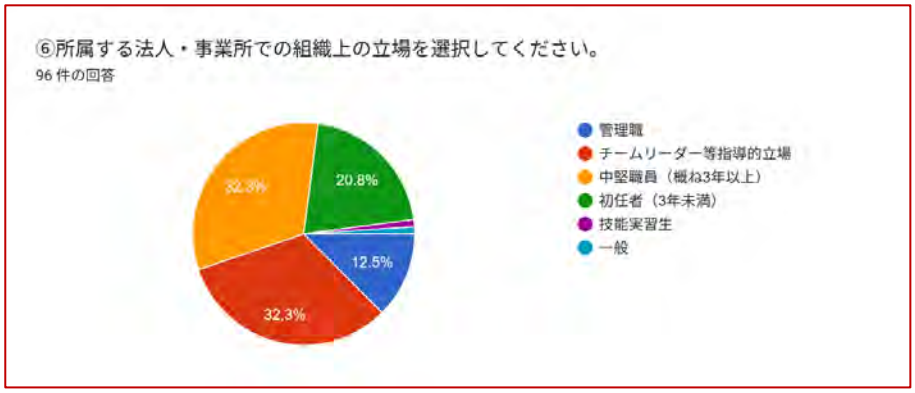
また、選手の所属法人・事業所内での組織上の立場は、「中堅職員（概ね 3 年以上）」及び「チームリーダー等指導的立場」が共に 32.3%、「初任者（3 年未満）」が 20.8%、「管理職」が 12.5%であった。









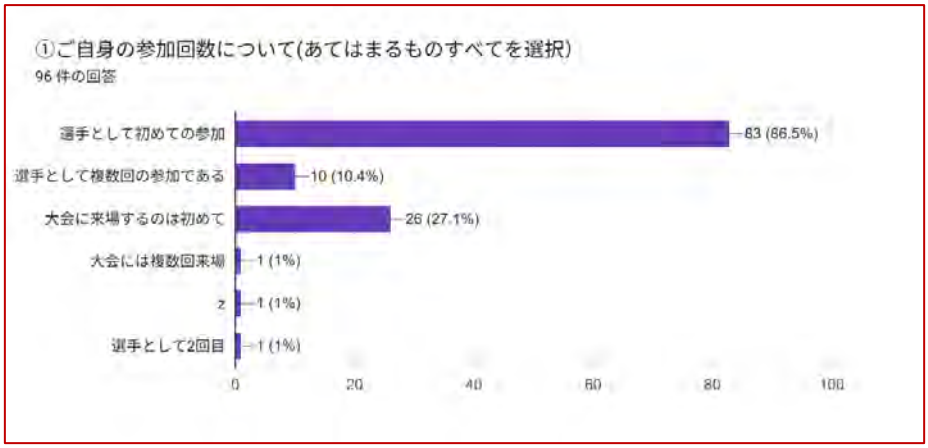


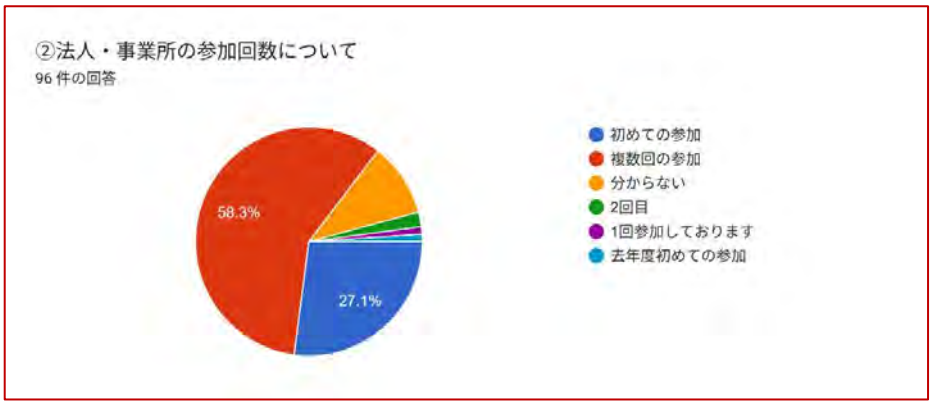
② 参加回数及び参加の動機

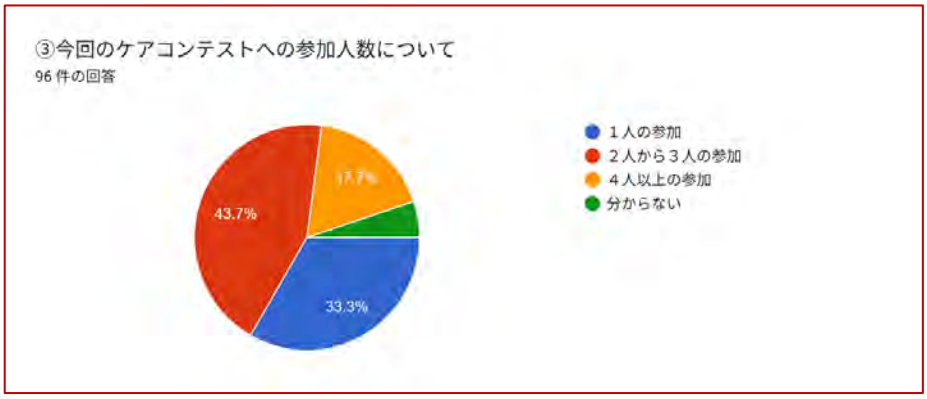
選手の参加回数については､｢選手として初めての参加｣が 86.5%､｢選手として複数回の参加｣が 10.4%であった。｢大会に来場するのが初めて｣の回答が 27.1%であった。

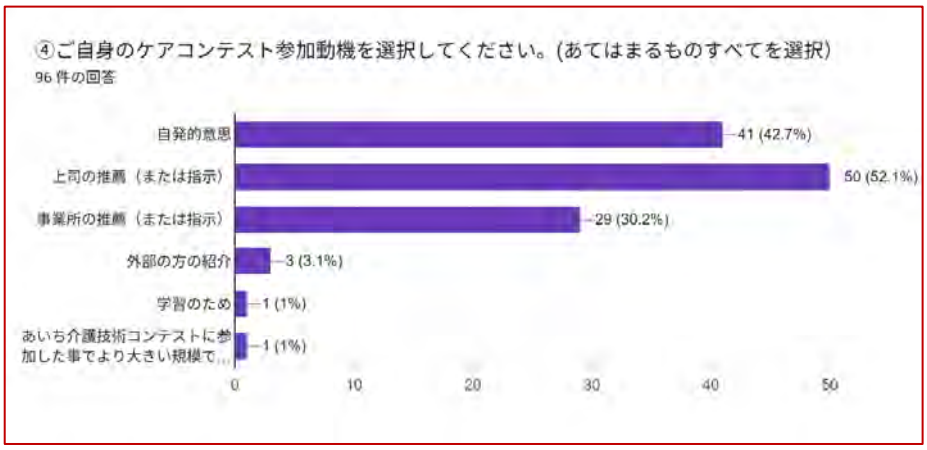
法人・事業所の参加回数については、｢複数回参加している｣との認識が 58.3%、｢初めての参加｣が 27.1%であった。また、本大会（第 15 回）への参加選手数は、｢2～3 人の参加｣が 43.7%、｢4 人以上の参加｣が 17.7%、｢ 1 人の参加｣が 33.3%であった。

大会への参加動機については、｢上司の推薦（または指示)｣が 52.1%でもっとも多く、｢事業所の推薦（または指示)｣が 30.2%であった。複数回答として｢自発的意思｣による参加が 42.7%と高い水準になっている。


①ご自身の参加回数について(あてはまるものすべてを選択)
96 件の回答
選手として初めての参加
選手として複数回の参加である
大会に来場するのは初めて
大会には複数回来場
z
選手として2回目
83 (86.5%)
10 (10.4%)
26 (27.1%)
1 (1%)
1 (1%)
1 (1%)
0
20
40
60
80
100


②法人・事業所の参加回数について
96 件の回答
58.3%
27.1%
初めての参加
複数回の参加
分からない
2回目
1回参加しております
去年度初めての参加


③今回のケアコンテストへの参加人数について
96 件の回答
43.7%
17.7%
33.3%
1人の参加
2人から3人の参加
4人以上の参加
分からない


④ご自身のケアコンテスト参加動機を選択してください。(あてはまるものすべてを選択)
96 件の回答
自発的意思
上司の推薦（または指示）
事業所の推薦（または指示）
外部の方の紹介
学習のため
あいち介護技術コンテストに参加した事でより大きい規模で...
41 (42.7%)
50 (52.1%)
29 (30.2%)
3 (3.1%)
1 (1%)
1 (1%)
0
10
20
30
40
50

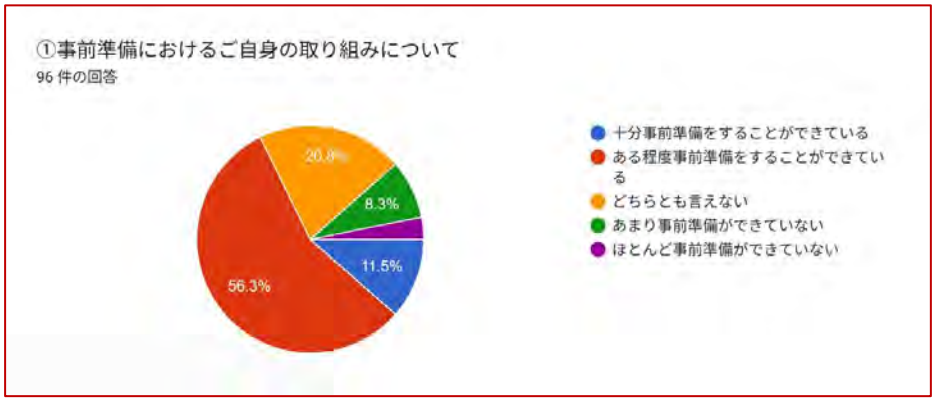
（2） ケアコンテストの事前準備活動とその成果

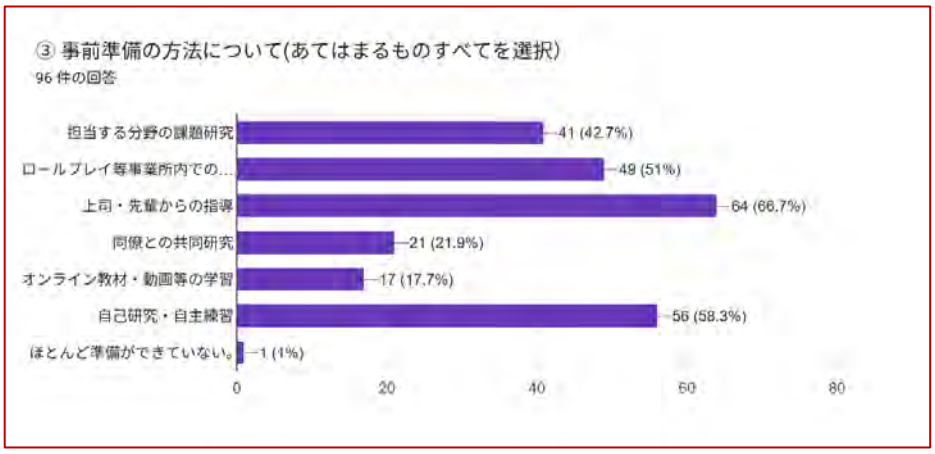
① 上司・先輩による積極的な支援・指導を受けて

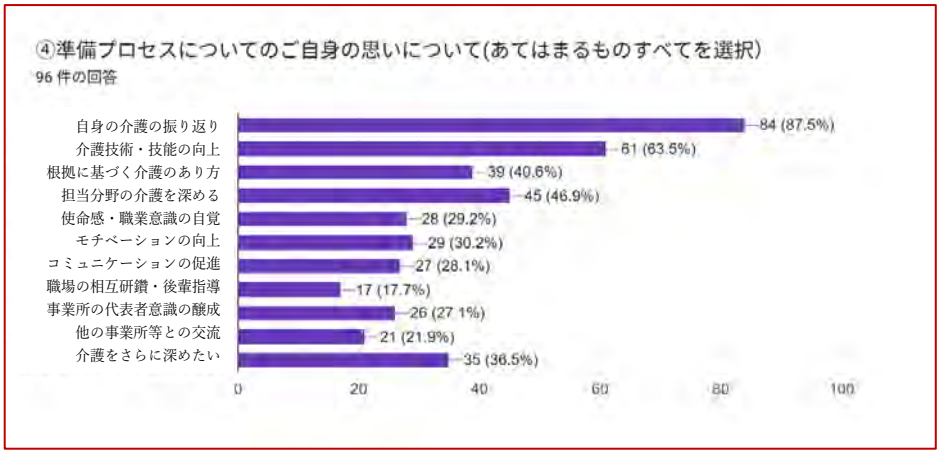
事前準備の活動について「選手事前アンケート」の結果でみると、「十分事前準備をすることができている」が 11.5%、「ある程度事前準備をすることができている」が 56.3%で、職場や職場の上司・同僚から「積極的な支援・指導があった」が 44.8%、「ある程度の支援・指導があった」が 39.6%であった。

また、事前準備の方法としては、「上司・先輩からの指導」「自己研究・自主練習」がそれぞれ 66.7%、58.3%と高い比率となっており、具体的内容として「ロールプレイ等事業所内での練習会」「担当する分野の課題研究」「オンライン教材・動画等の学習」が挙げられている。

事前準備プロセスの成果としては、「自分自身の介護を振り返る機会になった」87.5%、「介護技術・技能の向上になった」63.5%、「担当する分野の介護にあり方について深めることができた」46.9%、「介護の根拠（エビデンス）を考えるようになった」40.6%、「介護ついてさらに深めたいと思うようになった」36.5%、「介護の仕事へのモチベーションが高まった」30.2%などがあげられた。







●ケアコンテストの準備プロセスで感じた体験・エピソードなど

（主な回答）

ⅰ．介護技術・基礎知識の見直しと学び

・介護技術を基礎から見直し、日々のケアの理解が深まった。
・知らなかったことを調べる中で、新しい知識や忘れていた基本を再学習できた。
・介護福祉士テキストや認知症の本、口腔ケアの資料を読み直し、自身の弱点分野を補強した。
・自立支援・ボディメカニクス・口腔ケア・看取り・ACP など専門知識の再認識につながった。
・設定課題の分析を通じ、利用者像を具体的に想像する大切さを理解した。
・「なぜこのケアをするのか」を根拠から考える習慣が身に付いた。
・過去のコンテスト経験を踏まえて、今年は勉強し直し技術向上に努めた。

ⅱ．自身のケアの振り返り・自己成長

・普段のケアを見直し、自身の介助のクセや改善点を客観的に捉えられた。
・声かけ、環境づくり、言葉遣い、トーンなどの基本動作を意識するようになった。
・「利用者本位」であるかどうか、普段の対応を深く振り返る機会となった。
・経験の浅い分野に挑戦することで、自己の学びが深まり成長を感じた。
・口腔ケア・夜間介助・訪問介護など、慣れていない領域への取り組みに自信がついた。
・自分にもっと自信を持つ必要性を感じた。

ⅲ．上司・先輩・同僚との協力とチームワーク

・上司や先輩、同僚、他部署の職員と一緒に練習し、多様な視点の指導を受けられた。
・指摘やアドバイスが的確で、自分では気づけないポイントが明確になった。
・職場全体でサポートしてもらい、「一人ではない」という安心感が得られた。
・他ユニットやリハ科、訪問歯科など、多職種との相談・指導の機会が増えた。
・一緒に参加する後輩との意見交換を通じ、後輩の成長や職場のチーム力を実感した。
・相互練習・ロールプレイを重ねる中で、事業所の結束力が高まった。

ⅳ．ケース分析・課題への向き合いと実践的学習

・利用者役とのロールプレイを通して、場面設定の具体的なイメージが持てた。
・「同じ利用者でも毎回反応が違う」ことを前提に、多様な声かけパターンの必要性を感じた。

・夜間のトイレ介助、看取りなど、状況設定に合わせた配慮を学んだ。
・自分の経験不足分野（訪問介護・口腔ケア等）について、利用者像を想像しながら試行できた。
・自分がターミナルケアを受けるならどう感じるかなど、利用者の立場に立って考えられた。

ⅴ．情報収集・事前レポート作成と準備の苦悩

・事前レポート作成からの分析や計画立案に苦労した。
・読み込むほどに情報が多く、どう進めればよいか混乱した。
・練習不足や時間確保の難しさに対する不安が大きかった。
・人前での練習や発表が苦手で、準備段階でも緊張が大きかった。
・「正解が分からない」という不安を抱えながらも、相談を通してイメージを固めていった。

ⅵ．外部の視点・専門家からの学び

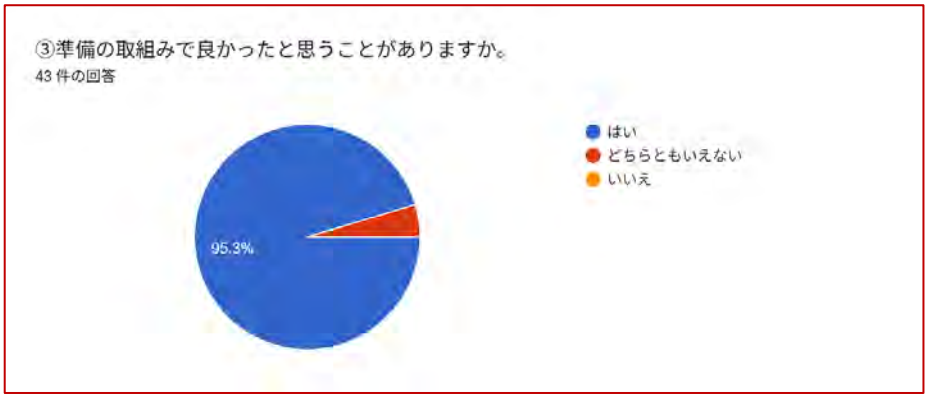
・訪問歯科・口腔衛生士・リハ職などから具体的な指導を受け、専門的視点を学べた。
・他事業者の友人や法人内の職員と経験を共有し、新たな知見を得た。
・看取りのレポート作成を通じて、ご家族や利用者の人生観について深く考える機会となった。

ⅶ．その他

・普段あまり他者に見てもらう機会がないため、今回の経験そのものが貴重だった。
・過去の介護福祉士実技試験を思い出し、初心に戻る機会となった。
・足浴方法の多様性など、細かな技術面での学びが印象に残った。
・これまでの支援場面の情報や気づきを再確認する契機になった。

② 事前準備で良かったと思うこと

「選手実技後ヒアリング」の結果でみると、「事前準備の取り組みで良かったと思うことがあるか」について 95.3%、また、「職場の上司や同僚との関係で普段と違うかかわりが出来たか」について 73.8%の選手は「はい」と回答しており、その具体的成果を言語化している。ケアコンテストへの参加を契機とする事前準備の取り組みのなかで生まれる多様な直接的、間接的効果として注目しておきたい。



●**事前準備の取り組みで良かったこと**（「選手実技後ヒアリング」結果）

（主なヒアリング内容）

ⅰ．職場ぐるみ（上司・同僚・多職種から）の支援・助言が得られた

・上司・主任・昨年参加者などから多くのアドバイスがもらえ、心強かった。
・上司が「普段どおりで良い」と助言してくれたことで自然に臨めた。
・職場の皆が協力してくれ、練習過程で支えてくれたのがありがたかった。
・他部署や普段関わりが薄い上司とも交流できた。
・指示型ではなく、援助する側として寄り添った関わりをしてもらえた。
・厳しいと思っていた人の優しさに気づくことができた。

ⅱ．ロールプレイ・実技練習を重ねられた

・ロールプレイを繰り返し実施できた。
・利用者役になってもらい、実際に練習できた。
・練習する中で、普段の仕事との比較ができた。
・トイレ移乗など具体的な場面を想定して練習できた。
・歩行介助、ストロー・とろみの使い方など具体的場面の練習ができた。
・練習で褒めてもらえたことが自信につながった。

ⅲ．ケア内容の学びと気づきが得られた

・ケアの議論を通して、アセスメントの重要性に気づいた。
・日常ケアの声掛けや態度について多くの学びがあった。
・話す速度や声掛けの仕方に気づけた。
・指摘を受けることで、自分のケアの良い点・改善点が明確になった。
・今までやったことがない視点に気づけたのが良かった。

ⅳ．情報共有・参考資料の活用ができた

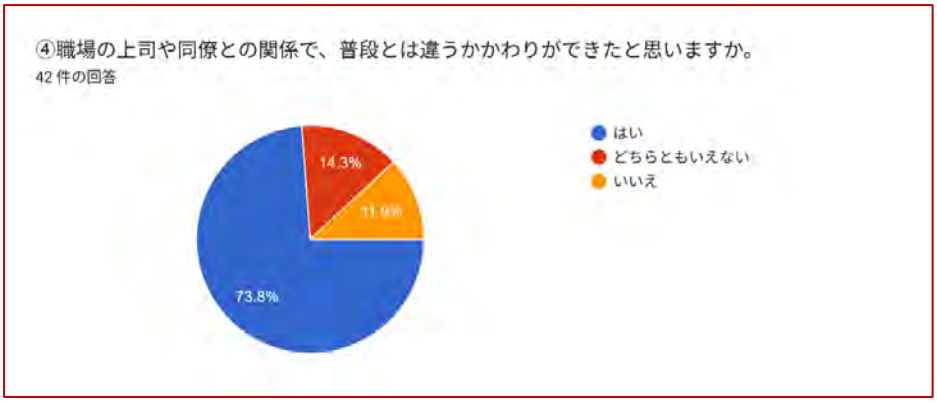
・ケアカルテで職場の情報を共有しながら準備できた。
・ケース検討を通して、本人理解が深まった。
・上司が自分と一緒に口腔ケアの流れを考えてくれた。
・昨年の参加者がリアルな経験を共有してくれ、参考になった。
・イメージトレーニングがしやすく、イメージ形成に役立った。

ⅴ．チームとしての学び・職場の活性化につながった

・他の職員も一緒に考える場となり、チームの学びにつながった。
・多職種の人と交流しながら準備でき、職場の一体感が深まった。
・一緒に考えたり、意見交換する中で、ケアに対する理解が深まった。

ⅵ．その他（個人の気づきや大きな学び）

・人生で一番学び、一番勉強した 。
・技術を学べたことが大きかった。
・ケースに即した工夫が生かせた。



●職場の上司や同僚との関係で、普段とは違うかかわりができたこと（「選手実技後ヒアリング」結果）

（主なヒアリング内容）

ⅰ．コミュニケーション・関係性の深化

・回数を重ねることに話しやすくなった。他の部署の上司に関わってもらえたのは良かった。
・ふだんも相談できるが、今回さらに深まったと思う。
・より関わりが深くなったと思う。
・会話が増えた。
・主任とは新たな関わりができた。
・それぞれの人との関わりが深くなった。
・コミュニケーションが良くとれるようになった。
・そのロールプレイを通じて、上司と関係性が良くなった。

ⅱ．新しい発見・職員理解の促進

・同僚が普段、排泄介助で気をつけている場面を知ることができた。同僚に対して新しい発見があった。
・それぞれの職員の意見や職員の良い面を発見できて、仕事に役立てられた。
・本社の人など普段は会わない人の話が聞けて勉強になった。
・他部署との交流が増えた。
・他の部の管理者との関りが持てたことが良かった。

ⅲ．応援・励まし・サポート

・気にかけて、励ましてくれました。
・応援してもらえていると感じられた。
・皆さんが気にかけてくれたのでうれしかった。
・サポートが励みになった。
・貴重な時間を作ってくれて感謝している。

ⅳ．仕事上の対話・意見交換の活性化

・いろんな話ができました。
・職員間、上司等とのコミュニケーションが高まりました。
・普段はあまり接しない上司とも関りができた。

・それまでと違う関わりが持ててよかった。

ｖ．その他

・普段から多くの関わりがあるので特段変わらない。

・他の大会にも出ていていつも通り。

・いつもと変わらず良い関係。

（3）前夜祭及び大会当日の活動とその成果

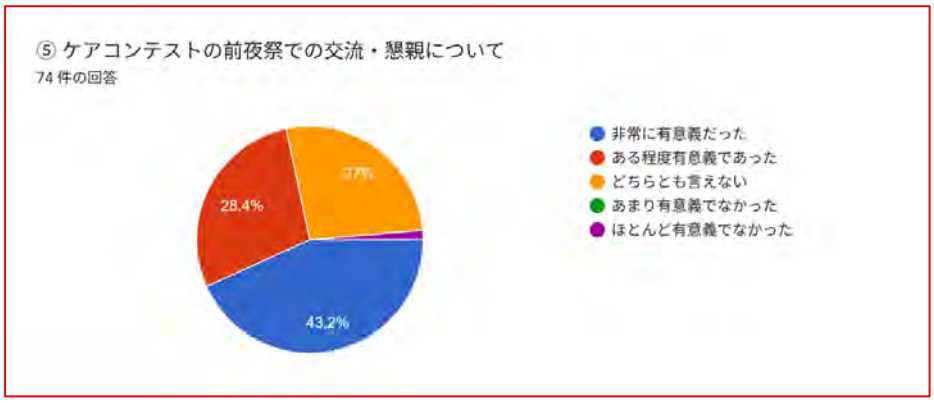
① 前夜祭及び実技コンテストについて（「選手事後アンケート」結果）

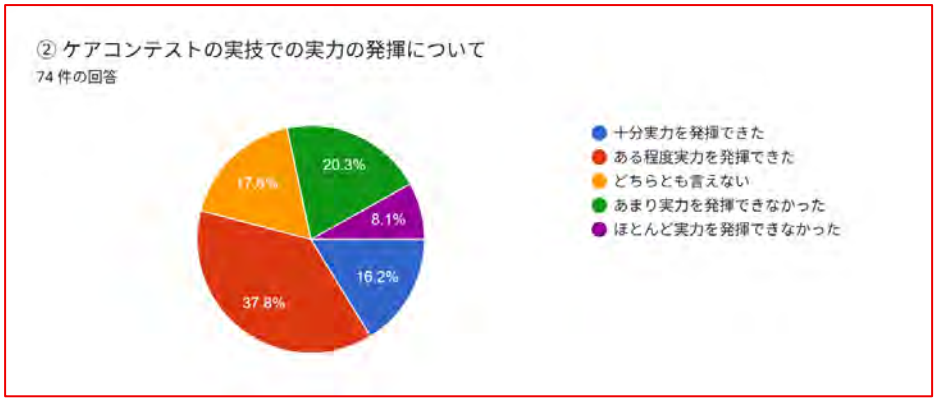
前夜祭は、参加選手の交流の場であると共に、ケアコンテストの「レディネス」（心身の準備状態）を整える場でもある。分野別・部門別のグループで着席し、会食形式で行われる。「選手事後アンケート」結果では、「非常に有意義であった」が 43.2%、「ある程度有意義であった」が 28.4%であった。「どちらとも言えない」が 27%あるのは、シフト勤務の都合等の事情で前夜祭に参加できなかった選手が多いためである。

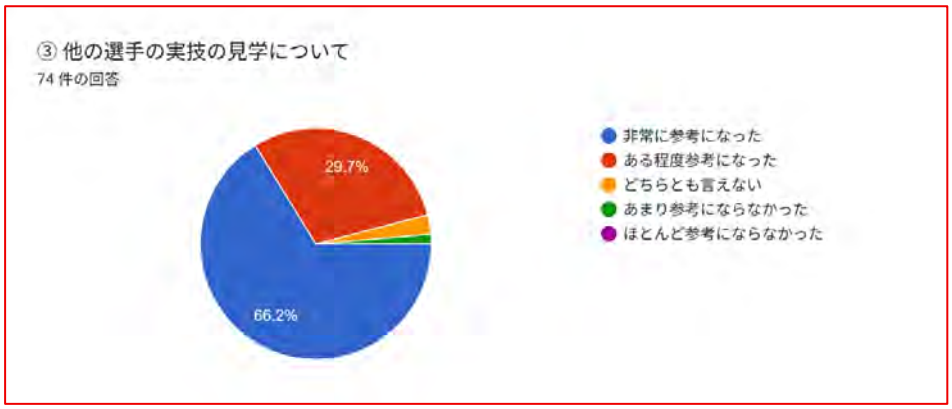
大会当日の実技での実力の発揮については、「十分実力を発揮できた」が 16.2%、「ある程度実力を発揮できた」が 37.8%、「どちらとも言えない」が 17.6%、「あまり実力を発揮できなかった」が 20.3%であった。

他の選手の実技の見学については、「非常に参考になった」が 66.2%、「ある程度参考になった」が 29.7%で、参考になったが 95.9%になる。実技を観察することによる「学習効果」である。AJCC では、各分野・部門とも午前中と午後の実技を異なる設定課題で行うことにしている。審査の公平性を担保するため、選手は自分の実技が終わるまでは選手控室に待機し、他の選手の実技を観察できないというルールになっている。午前・午後も設定課題について別々のものを準備することにより、出場選手であっても少なくとも午前もしくは午後は自由に見学することができるように配慮されているのである。

コンテストとして「競い合い」だけを目的とするものではないという AJCC の特徴である。







●他の選手の実技を観戦して感じたこと（「選手実技後ヒアリング」結果）

（主なヒアリング内容）

ⅰ．他選手の実技は非常に参考になった

・声かけやアプローチの仕方が参考になった。
・他事業所のやり方を学べた。
・排泄や口腔ケアの技術を見て、自分のケアとの共通点・違いを理解できた。
・他の選手の工夫や気づきによって、自分の改善点が見えた。
・いろいろなアプローチがあり、すぐに実践したいと思うものもあった。
・ミスも含めて学べることが多く、参考になった。
・昨年に続き、見学は大いに学びにつながった。
・看取り分野の声かけの重要性を学べた。
・他選手の姿を見て、自分も頑張ろうと思えた。

ⅱ．他選手の実技を見て刺激・励ましを受けた（モチベーション向上）

・他の参加者が頑張る姿に力をもらえた。
・後輩の緊張した姿を見て、同じ立場として励まされた。
・午前の選手は緊張しているようで、気持ちがよくわかった。
・「みんな緊張しているから落ち着かないといけない」と感じた。

ⅲ．前夜祭での交流が学びにつながった（間接的な学び）

・前夜祭で他選手と会話したことが、技術や心構えの学びにつながった。

ⅳ．一部のみ見学でき、部分的に参考になった

・別の分野（排泄など）を少しだけ見て参考になった。

・3 番目で実技だったため、若干見学できた。

・口腔ケアの体操が勉強になった。

ⅴ．その他

・まだ見ていないため、判断できない。

・もっと見学したかった・歩き回りたかった。

・「これから見る予定」「午後にたくさん見たい」など、未見だが学ぶ意欲は高い。

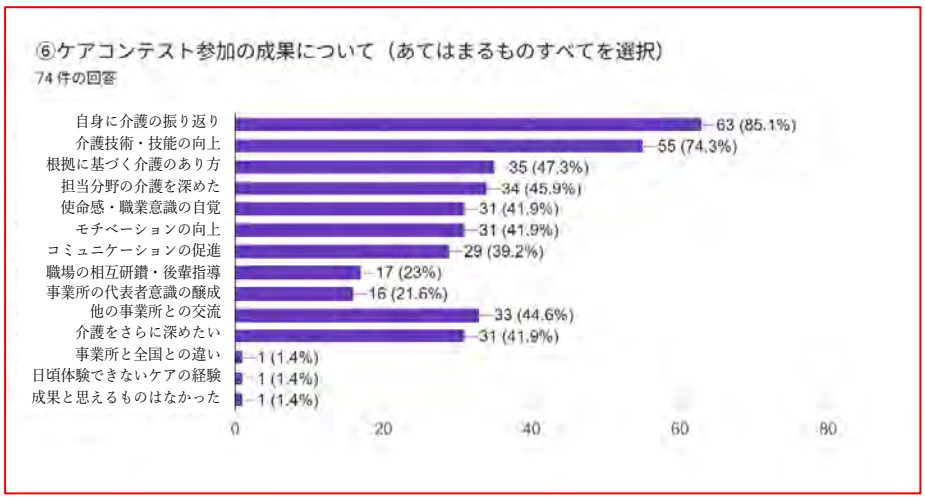
・「午前中の実技のためまだ見られていない」「1 番目で見られなかった」など、時間の都合で見学できなかった。

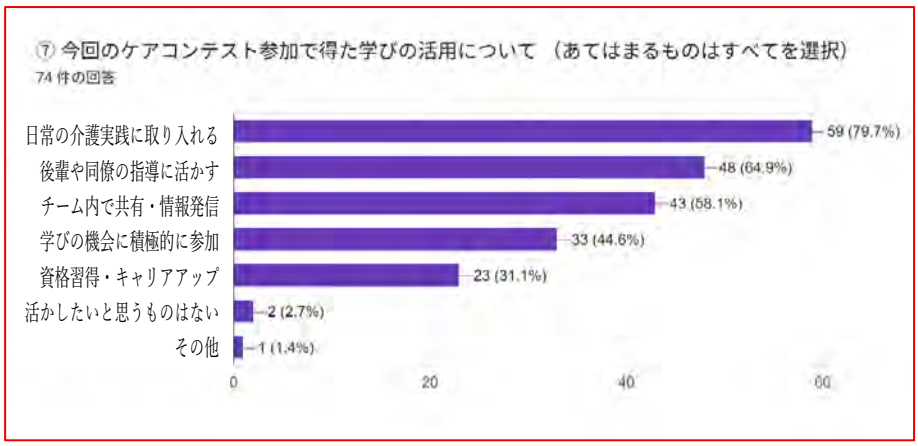
② **ケアコンテスト参加の成果**（「選手事後アンケート」結果）

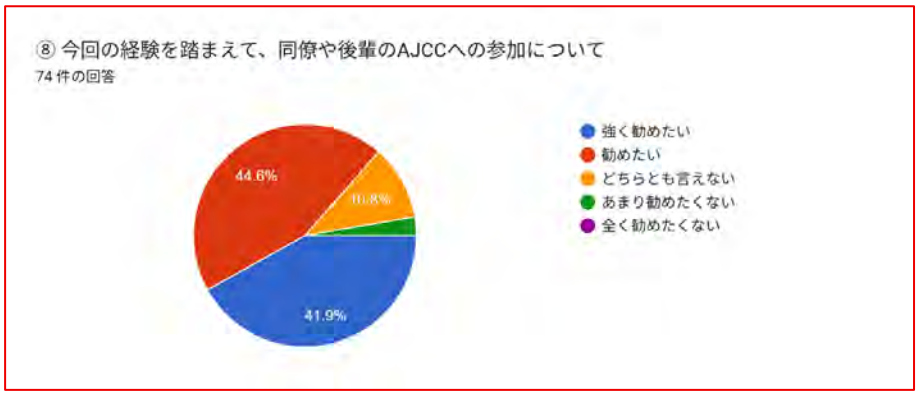
ケアコンテスト参加の成果につて「選手事後アンケート」でみると、「自身の介護を振り返る機会になった」85.1%、「介護技術・技能の向上になった」74.3%、「根拠（エビデンス）に基づく介護のあり方を考えるようになった」47.3%などが認識されている。

また、参加で得た学びの活用については、「日常の介護実践に学んだことを取り入れたい」79.7%、「後輩や同僚への指導・研修に活かしたい」64.9%、「チーム内での共有・情報発信を行いたい」58.1%などである。今回の経験を踏まえて「同僚や後輩に参加させたい」は 86.5%であった。

「選手実技後ヒアリング」では、「大変よかった。貴重な経験だった」「学び・気づきが得られた」「他者の実技・意見・比較が参考になった」「アドバイザーの評価・助言が役立った」「モチベーションにつながった」などの回答があった。「成長の実感」についても、リアルな実感が多く寄せられている。







●**ケアコンテスト参加で良かったこと**（「選手実技後ヒアリング」結果）

（主なヒアリング内容）

ⅰ．大変よかった。貴重な経験だった。

・とても良かった。
・コンテストに参加してよかった。
・緊張したけど良かった。
・初めてだったが良い体験ができた。
・すごく良い経験になった。
・来年もまた出たい。
・この雰囲気を味わえてよかった。
・経験を積むことができて良かった。

ⅱ．学び・気づきが得られた

・自分の課題を克服する機会になった。
・自分の技術を高めるチャンスだった。
・振り返りができて良かった。
・車椅子の扱い方が学べた。
・看取りケアを考える機会になった
・自分が考えていなかった視点に気づけた。

・介護技術を学べる貴重な機会。
・「ケアに正解はない」という基本に戻れた。
・日頃使わない技術を学べた。

ⅲ．他者の実技・意見・比較が参考になった。

・他の職員の介助が見られることが良い。
・他ブースのケアと比較して自分の不足に気づけた。
・他事業所の支援が学べて良かった。

ⅳ．アドバイザー評価・助言が役立った

・アドバイスをもらえるのが嬉しい。
・自分の実技についての評価が得られた。
・自分のケアレベルが分かる。
・昨年に続きアドバイスが参考になった。
・アドバイザーのコメントを現場に活かせる。

ⅴ．モチベーションにつながった

・もっと上手くできると思い悔しさもあるが、挑戦して良かった。
・多くの人に自分の介護を見てもらえる良い機会だった。
・もっと上達したいという意欲がわいた。

ⅵ．その他

・アドバイスが少し物足りず、もっと具体的に聞きたかった。
・自分はもっと上手くできるはずで、少し残念な気持ちもある。

●自己成長の実感について（「選手実技後ヒアリング」結果）

（主なヒアリング内容）

ⅰ．自己成長を強く実感した

・コンテストに向けて勉強すること自体が大きな意味を持ち、成長を感じた。
・皆の前で実技をする経験が成長につながった。
・長年の経験があっても成長していると実感できた。
・緊張感を乗り越えた経験が成長につながった。
・苦手な場にチャレンジし、挑戦自体が成長だった。
・コンテスト本番というより、準備期間の楽しさと学びが成長につながった。
・全国の仲間から刺激を受け、自分の成長を感じた。
・「考える力」の重要性に気づき、個別ケアの質について深い学びを得た。
・声かけや場面対応について、自己成長を実感できた。
・声のトーンや話し方を褒められ、取り組みの成果を実感した。
・昨年より良くなったと感じる。

ⅱ．課題や反省を通じて成長を感じた

・反省点が多かったが、それが成長を促すと感じた。
・アドバイザーから指摘された点を改善しようと思えた。
・できなかったことが明確になり、今後の成長課題が見えた。
・うまくできなかった悔しさが、次に向けての成長意欲につながった。
・未熟さと成長の両方を感じた。

ⅲ．技術・知識の習得が成長につながった

・認知症の方への声かけに関する具体的な知識を得た。
・介護技術・声かけ・落ち着いたケアの重要性を学んだ。
・普段気づけないことをアドバイスでもらい、自分を見直すことができた。
・利用者を思ったケアについて深く見つめ直せた。
・モデルとなるケアや他者の実技から学びを得た。
・“事前練習や準備の過程”が成長につながった。

ⅳ．さらに学びたい・成長したい

・この成長を今後に活かすことが大切だと感じている。
・今からさらに学びを吸収して帰りたい。
・成長できるよう今後も頑張りたい。
・振り返りを通じてモチベーションが高まった。
・スキルアップにつながると確信している。

ⅴ．その他

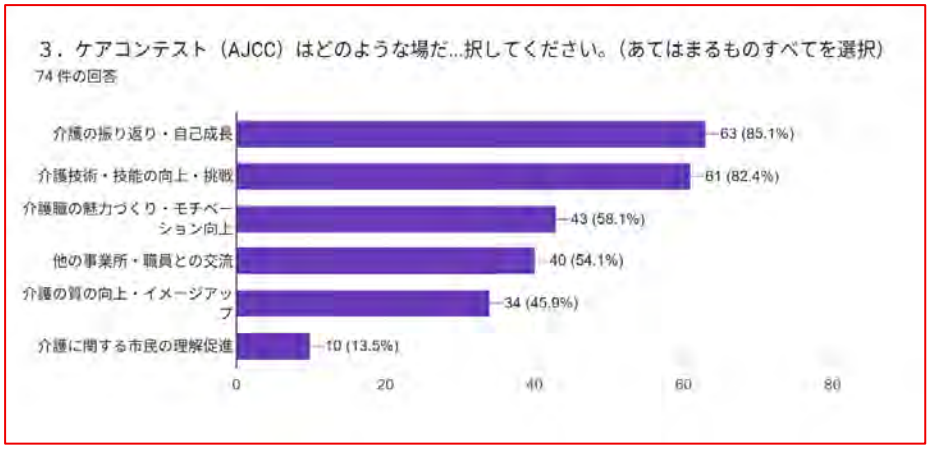
・少しはできたと思うが、明確な実感は薄い。
・自分としてはもっとできたはずで、時間が足りなかったため実感しづらい。

③ ケアコンテスト（AJCC）の意義（「選手事後アンケート」結果）

ケアコンテスト（AJCC）の意義について、選手はどのように受けとめているか。「選手事後アンケート」の結果は、「介護の振り返り・自己成長の成長」85.1%、「介護技術・技能の向上・挑戦」82.4%、「介護職の魅力づくり・モチベーションの向上」58.1%、「他の事業所・職員との交流」54.1%、「介護の質の向上・イメージアップ」45.9%などの回答であった。

なお、この項目については、他の関係者（選手派遣事業所、高齢者役、来場者）を対象とするアンケートで同様の質問を行っている。それぞれの関係者がどのように受けとめ方たかについては、後述（第４章５．来場者の関心と参画）を参考にしてほしい。

「選手事後アンケート」の「ケアコンテスト（AJCC）全体についての感想、希望、改善点など」についてのフリーアンザーでは、「学び・気づき・成長の機会」になったという意見が多い。また、その機会をさらにより良くするための改善提案が寄せられている。



●AJCC についての感想、希望、改善点などについて（「選手実技後ヒアリング」結果）

（主な回答内容）

ⅰ．大会を通じた学び・成長・自己の振り返り

・大会が「有意義な時間」で、自分のケアを見直すきっかけになった。
・他の参加者の技術や声掛けを見て、自分の視点や考え方が広がった。
・緊張しつつも、経験の特別さや学びの深さを実感できた。
・準備不足や知識不足に気づき、今後につなげたい。
・「参加して本当に良かった」「また来年も参加したい」
・多くの人のケアを見て、自事業所に持ち帰りたい気づきや学びが得られた。
・自分の介護に自信が持てた／気づきが得られた。
・全国の方々と交流でき、介護への意欲やモチベーションが高まった。
・事業所代表として参加できたことに誇りを感じた。

ⅱ．交流・他事業所・アドバイザーとの関わりによる刺激と広がり

・他事業所の実技を見ることで、自施設との違いや新たな視点が得られた。
・選手仲間や見学者と「ここが良かった」「どう思う？」など議論できたのが有意義。
・アドバイザーの助言がとても参考になった／優しく寄り添ってくれ安心して取り組めた。
・前夜祭の交流が楽しく、参加者との距離が縮まった。
・自施設職員とも議論が生まれ、「学び合いの場」になった。
・全国の介護士とつながることで、自分のケア観や仕事への誇りが高まった。
・アドバイザーともっと交流したかった。

ⅲ．大会運営・会場環境等に関する要望

・ブースが近く、他の選手の声掛けが聞こえてしまう。
・マイクの音量が低いため声が聞き取りにくい場面があった。
・実技前に物品や介護機器を触れる時間がほしい。
・高齢者役の声や靴・服装が設定に合わない（声が小さい、靴が履かせづらい）。
・来会者や待機者から実技が見え過ぎる（カーテンや囲いでの仕切りが必要）。
・ケア控室から会場が見えてしまう動線の改善が必要ではないか。

・昼食（弁当）の到着が遅く、午後最初の選手はほぼ休憩できなかった。

ⅳ．評価基準・採点方法・フィードバックに関する改善提案

・「何を評価しているのか分かりにくい」「基準が見えづらい」
・自分の点数を本人だけでも知りたい／評価シートの公開を望む。
・優秀賞・順位の決め方が分からず、採点方法を開示して欲しい。
・アドバイザーの助言は有益だったが、納得できる部分と疑問点が混在していた。
・「正解のデモンストレーション」を見せてほしい。
・課題理解が難しい箇所があり、説明の工夫が必要。
・AM・PM で課題が異なるため、評価の公平性に疑問を感じた。

ⅴ．大会形式・課題設定に関する期待

・選手数を増やし、より多くの職員に参加機会を与えてほしい。
・事前課題ではなく、当日課題発表にして臨機応変さや判断力を試す形式を希望。
・複数の部門を横断した課題（他職種連携など）への挑戦があるとよい。
・過去優秀者の模範演技を見られる機会を設けてほしい。

ⅵ．その他

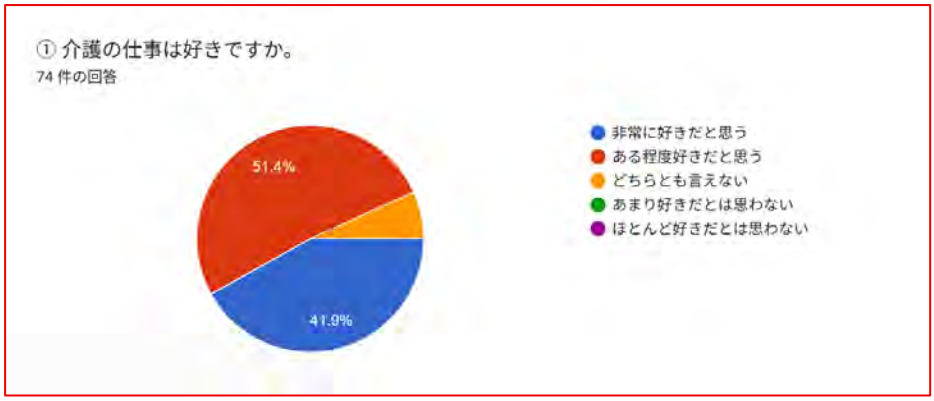
・県予選・地区予選などがありとよいと思う。
・今後も大会を継続してほしい。
・前夜祭のビュッフェがとても良かった。
・他の部門の実技がもっと見たい。
・次回は付き添いとして見学もしたい。

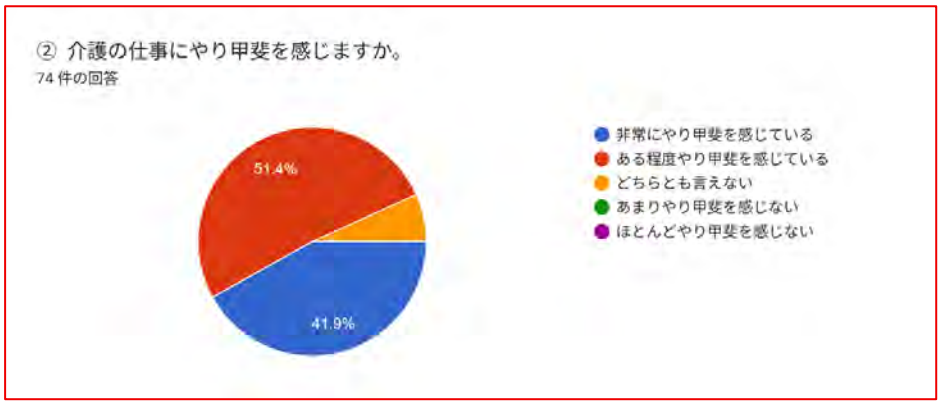
（4）介護の仕事とケアコンテスト（AJCC）

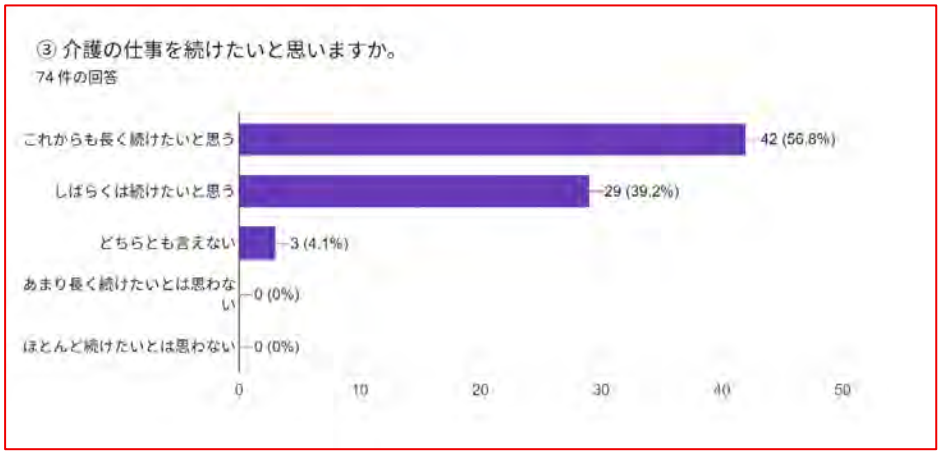
「選手事後アンケート」では、介護の仕事について選手に尋ねた。「介護の仕事が好きか」どうかについては、「非常に好きだ」41.9%、「ある程度好きだ」51.4%で「好きだ」の回答が 93.3%。「やり甲斐を感ずるか」についても全く同率の回答であった。また、「介護の仕事を続けたいと思うか」については、「これからも長く続けたいと思う」56.8%、「しばらくは続けたい」39.2%で「続ける」の回答が96%であった。出場する選手の介護に仕事への思いが表現されている数値である。

「選手実技後ヒアリング」においても、介護の仕事に対する「誇り」や「やりがい」について尋ねている。その回答の一つひとつに介護の「価値・魅力」が表現されている。また、選手が「介護の仕事で大切にしていること」について、5 つのカテゴリーで整理したが、その内容は、各分野・部門の評価指針として示されている評価基準と重なる内容になっていることに注目する必要がある。

最後に、介護の仕事をさらに魅力あるものにするために、選手の思いをフリーアンサーで尋ねた。実技コンテスト直後の選手の思いである。







●介護の仕事に対する「誇り」や「やりがい」について（「選手実技後ヒアリング」結果）

（主なヒアリング内容）

ｉ．利用者からの言葉・反応・関わりによるやりがい

・ありがとうの一言が聞けたときに強く感じる。

・笑顔でありがとうの一声があったとき。

・「ありがとう」と言われることで誇りややりがいをより強く感じた。

・現場で対応していて「元気になれる」と言われたり、「助かる」と言われるととてもうれしい。

・利用者さんの声から小さな発見をすること。

・施設の利用者は外国籍である私を受け入れてくれ、それがやりがいになっている。
・エンドユーザー（利用者）からダイレクトに関われることが嬉しい。
・利用者の人生の中で“今の生活”を大切にできることにやりがいを感じる。

ⅱ．学び・成長への意欲とやりがい

・こんなに介護業界で熱心な方がいると思うと励みになる。学びがつきません。
・「誇り」や「やりがい」を持つことができて、楽しめている。
・そのためにも、もっと成長したいと思います。
・今回参加して、介護の仕事はやりがいがあると改めて感じた。
・もっと頑張る。
・認知症ケアを勉強していきたいと思った。
・看取りケア以外の分野も勉強したいと思った。
・もっと勉強が必要だと思います。

ⅲ．コンテスト参加による誇り・モチベーションの高まり

・皆さんとの交流の中で誇りややりがい、プライドの高さを感じることができた。
・やりがいにつながったと思う。
・コンテストに参加することでモチベーションが上がり、気持ちも高まった。
・施設内で初めてコンテスト代表になったことに誇りを感じる。
・今回の参加を通じて誇りややりがいにつながった。

ⅳ．仕事の本質に関わるやりがい（価値観・哲学）

・嫌なこともあるけれど、その分うれしいことが倍増する。
・利用者と関わり、その人を知っていくことが介護だと思う。
・介護には答えがない。その人を知って向き合うことが大切だと思っている。

ⅴ．周囲の存在・見守りがやりがいにつながる

・みてくれる人がいると緊張するけれど良かったと思う。

●介護の仕事で大切にしていること（「選手実技後ヒアリング」結果）

（主なヒアリング内容）

ⅰ．利用者尊重・その人らしさの尊重

・人として尊重をすること
・その人の人生や対話を大切にしている
・本人の思いを実現すること
・住み慣れたその人らしい生活の継続を大切にしている
・人間を見る。その人を見る
・相手の気持ちを尊重すること
・利用者尊重と安全
・利用者さんにとって幸せは何なのかを常に考えている

・生きたい理由を守る。体が動かなくてもやりたい事を叶える
・自己決定

ⅱ．安全・安心、清潔の確保

・利用者さんにとって安全な介護を心がけている
・忙しくても一人ひとりに合ったしっかりしたケアをする
・安全と清潔を大切にしている
・安心して生活をしてもらえるよう心掛けている

ⅲ．自立支援・意欲向上・生活機能の支援

・自立支援に心がけている
・利用者の意欲向上をめざしている
（食欲がない利用者に少しでも食べてもらう等）
・利用者が幸せな生活ができるよう考えてケアしている

ⅳ．コミュニケーション・声かけ・信頼関係

・声かけを大切にしている
・コミュニケーションを大切にし、自分が利用者だったらどう思うか考えている
・利用者さんにとって気持ちの良い声掛けを心がけている
・いつも利用者の立場に立って話すことを大切にしている
・利用者に共感すること
・介護士と看護師の連携を強くして情報をキャッチしケアに活かす

ⅴ．笑顔、関係性づくり

・お互いが楽しく過ごせる
・利用者とのかかわりを楽しむこと
・体が大きいので威圧感を与えないようにしている
・笑顔だと思います。利用者さんは見てます
・笑顔。利用者から「優しいですね」と言われるのが嬉しい
・他者とのかかわりを大切にしている
・利用者さんが気持ちよく過ごせることを意識している
・人生の最後のステージだと思い、常に笑顔でいる
・笑顔を引き出すことを意識している
・高齢者の人々の力になること
・初心の気持ちを忘れないこと

● 介護の仕事をさらに魅力あるものにするためになどのようなことが必要か。
（「選手事後アンケート」結果）

（主な回答内容）

ⅰ．賃金・処遇改善と職業としての地位向上

・給料アップ、福祉士の資格をもっと地位の高いものにする、日本人の若い人材が入りやすい施設が増えること。
・高額賃金。介護は賃金が低いというイメージが世間に強く、実際にそう感じる。身体への負担も大きく、いつまで体が持つかわからない。だからこそ賃金を上げてほしい。
・社会的イメージ・地位の向上、賃金の向上。
・世間的に「賃金が低い」というイメージが払拭されていない。業務内容から見ても賃金は低いと感じる。高収入が得られるイメージが定着すれば、興味をもつ人も増えるのではないか。
・給料の底上げが必要。まず来てもらわないと話が始まらない。
・処遇改善を継続的に進めてほしい。
・スキルアップして介護支援専門員や生活相談員へ移行しても給料が下がる現状がある。キャリアアップで賃金が下がる仕組みを改善しなければ定着につながらない。

ⅱ．介護の魅力・実態の発信とイメージアップ

・もっと世間に介護の仕事の実態を知ってもらう必要がある。
・介護の仕事は“かっこいい”というイメージを広めたい。
・一般の方が介護の仕事を見る機会を増やす必要がある。
・看護との職域の差を少なくし、これまでの「3K」の悪いイメージを魅力のある「3K」に発信していくことが大切。
・今回のような場（AJCC）がもっと増えれば、介護の仕事を多くの人に知ってもらえると思う。
・ネガティブなイメージ（給料、労力、ライフワークバランス）が大きい。大変さを前提に、どのように乗り越えているか、人との関わりのあたたかみや喜びを SNS 等で伝えることが必要。
・十分魅力があるが、伝えるのが難しく感じる。
・施設内にとどまらず、いろいろな場所で介護について発信していく。
・介護の仕事は「人と人とのつながり」を感じられる魅力ある仕事であることを知ってもらいたい。

ⅲ．技術向上・専門性の強化と評価の機会の拡大

・現場職員の介護技術の向上。
・成功体験がしづらく、評価されづらい。自分の介護を評価・確認できる機会が増えると良い。
・介護の質の向上と生産性を上げることが必要。
・介護技術の向上により、イメージも改善され、職員が増え、より良い介護ができると思う。
・基本的な介護技術を身につけ、ご利用者としっかり向き合うこと。
・介護についての知識や技術の研修などに参加し、向上を図ること。
・介護福祉士の資格について、もっとできることが増え「取りたい資格」になればよい。喀痰吸引等のカリキュラム変更前取得者も取りやすくしてほしい。

ⅳ．学び・交流・発信の機会づくり

・AJCC に参加し、現場だけでは学びに限界があると感じた。他の方の技術を見ることで得られることは多い。学べる場に参加できることが大事。
・他の職員との交流の場がもう少しあれば良い。
・AJCC のような大会がもっとあれば良いと思う。
・介護交流の機会が増えれば、やりがいにつながる。

・イベントや地域の人、他事業所との交流などで魅力を発信し、お客様も巻き込みながら共感・楽しさを広げることが必要。
・職場以外の場所でも、感じたことや学んだことを発信していくこと。
・学校や地域への派遣（授業協力・魅力発見セミナーなど）を増やし、オープンな活動を広げていくべき。

ⅴ．働きやすい職場づくり・やりがいの醸成

・やりがいを感じられる環境が必要。利用者の笑顔だけでなく、支える側も笑顔でいられる職場にしたい。
・介護士自身が生き生きと働くことが大切。
・介護を楽しく感じられなければ魅力は伝わらない。まず自分が楽しいと思える働きかたをすること。
・職員配置基準を増やす必要がある。
・優しい声掛け、笑顔、コミュニケーションといった基本的な支援のあり方を大切にすること。
・利用者への尊重の姿勢を大切にすること。

ⅵ．介護職の価値・専門性に対する社会的理解の促進

・介護の仕事について、実際に働く人とそうでない人でイメージの差がある。収入の面だけでなく、キャリアアップしやすい仕事であることなど、魅力を伝えていく必要がある。
・人の命を尊重し、その人の人生に触れられる仕事であることを知ってもらうことが重要。
・介護のあり方そのものについて、社会に理解を広げる活動が必要。
・地域の方や家族に介護への理解を得ること、周囲の思いやりの気持ちを広げていくこと。

ⅶ．その他

・日本語がもっと良くなること（外国籍介護職の視点）。
・感謝の気持ちを大切にすること。
・介護士として信頼される職員になれるよう、明るさを活かして成長したいという個人の抱負。
・介護の本来の楽しさを現場で伝えていくことの重要性。

（5） 外国人介護職員分野の選手特性

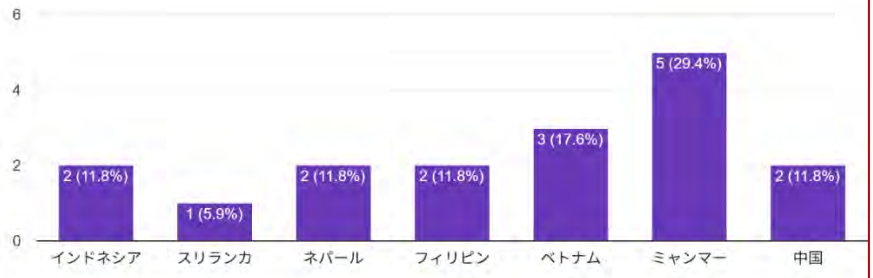
本年度第 15 回開催で外国人職員分野のエントリーが多く、結果としてＡ・Ｂ・Ｃの３つの部門での開催となった。「選手実技後ヒアリング」では、他の専門分野の部門よりヒアリング対象者を増やし、全体で 43 名のうち 17 名の外国人介護分野の選手ヒアリングを行った。本節ではその結果をまとめた。

ヒアリング内容の多くは、他の専門分野の選手と同様であるが、当分野については、最後に 5 項目を追加ヒアリングを行った。

最初の 3 項目は、国籍、在留資格、日本語検定能力の属性についてである。次に、「AJCC への参加が日本での介護の仕事を続けたいという気持ちに影響したか」及び「異なる国籍や背景をもつ選手・関係者との交流は有意義か」について尋ねたが、前者については全員が「はい」と答え、後者の問いについては 94.1%が「はい」の回答であった。その理由については、記載の通りである。

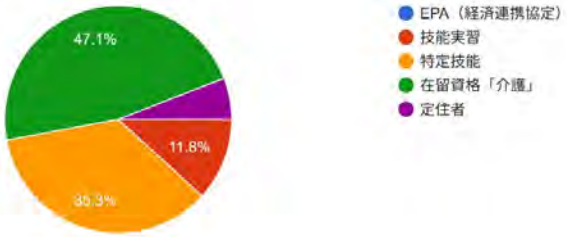
①ご出身の国（国籍）を教えてください。

17 件の回答



②日本での在留資格を教えてください。

17 件の回答

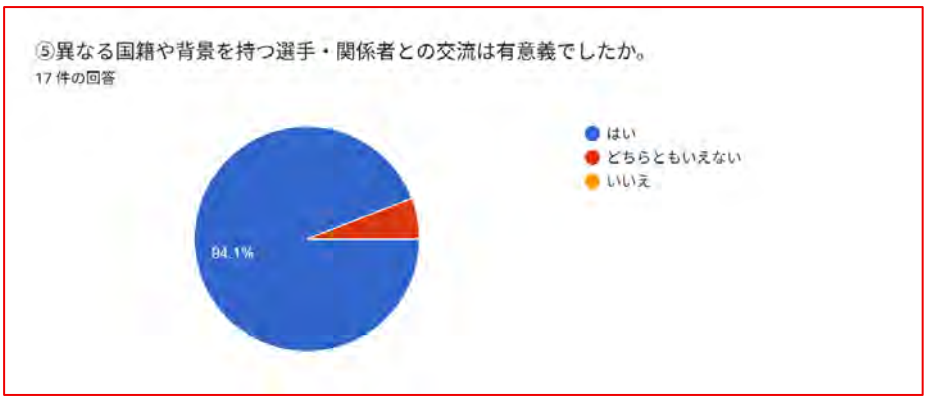


③日本語はとても上手ですが、ご自身の日本語（検定）能力はどのレベルですか。

17 件の回答

④AJCCへの参加経験が、日本で介護の仕事を続けたいという気持ちに影響しましたか。

17 件の回答



●日本で介護の仕事を続けたいという気持ちへの影響（「選手実技後ヒアリング」結果）

（主なヒアリング内容）
・日本で続けていきたいと思った。
・もっと上手になりたい。
・日本で介護の仕事を続けたいと思っている。
・もっともっと技術を勉強したいと思います。
・日本語が好きなので、コンテストに参加して、これからも日本で介護の仕事を続けたいと改めて感じた。
・利用者とのやりとりが、やり甲斐となっている。やさしさがある利用者が多いので、いろいろな支援ができる。
・スリランカにいた時から看護師で勉強をしている。安全で人にやさしい、大好きな日本という国で、学びを深めていきたい。
・初めからあったが強まった。

●選手等関係者との交流について（「選手事後アンケート」結果）

（主なヒアリング内容）
・いろいろな情報交換ができたのが良かった。
・待機室で会話をすることができました。困りごとを共有できてよかったです。
・外国籍の選手との交流はとても有意義だった。
・ここで知り合った人が何人かいます。
・交流が持てたのが、よかった。
・スリランカ以外の外国籍の人と交流をすることができた。
・ベトナムやミャンマーの方と意見交換ができた
・異なる国籍の選手や関係者との交流はとても良かった。
・たくさんの人に会えた。
・あまり積極的に関われませんでした。

2. 選手派遣事業所の関わり・活動とその成果

～介護のベスト・プラクティスを求めて

本大会（AJCC2025）の選手派遣法人は、69 法人、北海道から鹿児島までの各地域からの参加となり、過去最大の規模となった。参加団体の内訳では、社会福祉法人 47、株式会社 12、医療法人 7 、社会医療法人、公益社団法人、一般財団邦法人各 1 の構成であった。

参加法人・事業所が、どのような考え方でケアコンテスト（AJCC）に参加しているか、派遣選手の選考、選手に対する支援・指導、コンテスト後の活動とその成果等についての具体的に検証する。

選手派遣事業所を対象とするアンケート及びヒアリングは以下の通りである。

■選手派遣法人・事業所アンケート及びヒアリング調査

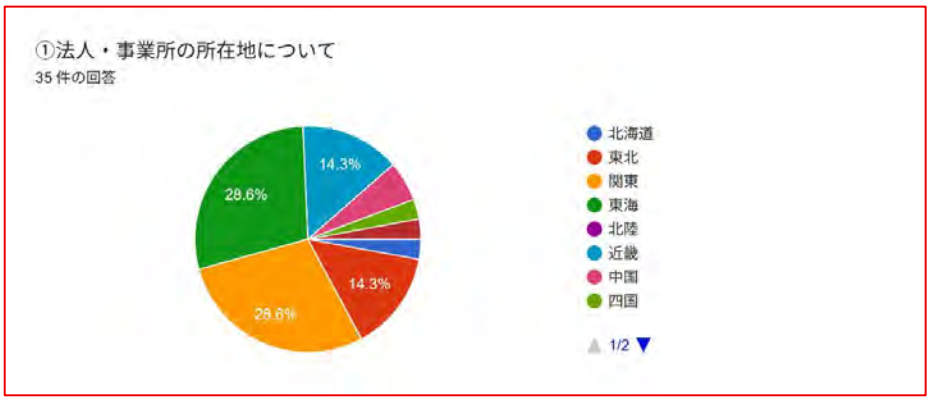
選手派遣事業所アンケート （以下、「選手派遣事業所アンケート」と言う）	・選手派遣事業所を対象とする Web アンケート。 ・10 月 17 日に発信し 10 月 2 7 日までの回答。 ・35 の事業素所から回答を得た。
選手派遣事業所ヒアリング **（以下、「選手派遣事業所ヒアリング」と言う）**	・選手派遣事事業所を対象とする面接ヒアリング。 ・10 月 20 日から 11 月 19 日に実施。 ・ 8 事業所のヒアリングを行った。 （一部、リモートによるヒアリング）

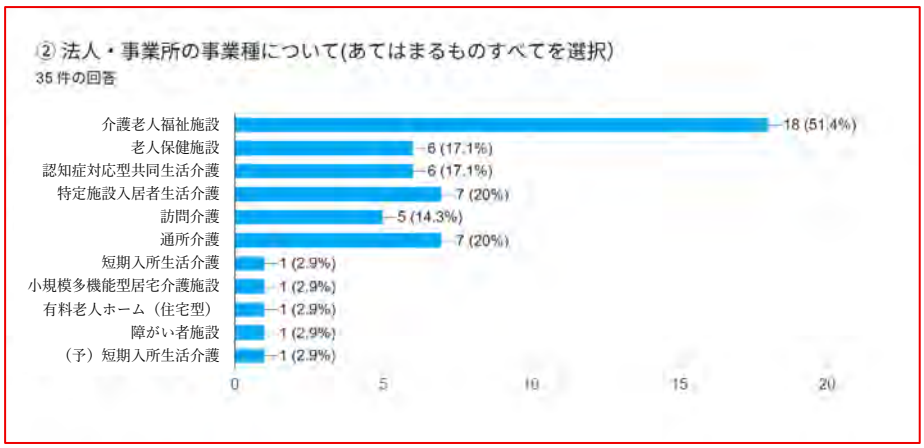
＊自由回答については、主な回答について親和性を基準にカテゴリー区分した結果である。

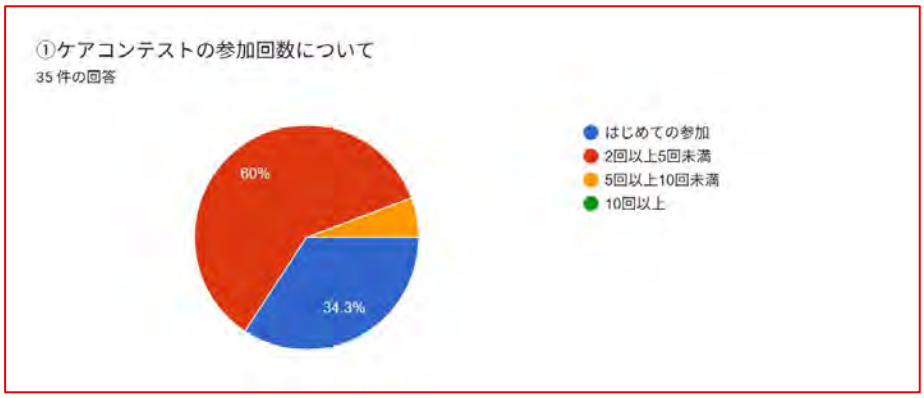
＊各アンケート及びヒアリングの集計図表では、Web 集計の番号・質問項目をそのまま表記した。
本報告書の巻末に参考資料として掲載したアンケート及びヒアリング用紙を参照してほしい。

（1） 法人・事業所の属性

「選手派遣事業所アンケート」では、事業所の所在地域、事業種、参加回数についてデータを取得した。所在地では関東、東海がそれぞれ 28.6%、次いで東北、近畿がそれぞれ 14.3%であった。事業所種別は、介護老人福祉施設が 51.4%ともっとも多く、特定施設入居者生活介護 20%、通所介護 20%。参加回数については、「2 回以上 5 回未満」の事業所が 60%、初めて参加の事業所が 34.3%であった。







（2） 派遣選手の選考基準

派遣選手の選考基準については、自由記述で回答を求めた。その結果をみると、最も多く確認されたのは、本人の希望や挑戦意欲を重視する姿勢である。希望者の立候補や「挑戦したい」という前向きな意思を尊重する記述が多く、コンテスト参加を職員の自己成長の機会として位置づける法人・事業所が一定数存在していることが分かる。

次に、介護技術・勤務態度・経験・資格等の専門性を評価基準とする記述が目立つ。日頃の介護技術、業務成績、社会性、資格の有無、既定能力の達成状況など、専門職としての実務力を重視した選抜が行われている。選手として派遣する以上、一定水準以上の技術・態度・知識を確保することを法人として求めていることが伺える。

第３に、法人内あるいは外部のケアコンテスト等を経て全国大会としての AJCC へ派遣するというケースも多い。その他、経験年数や組織内での立場や役割を基準にしているところもあるが、全体として職員の育成・成長支援の観点で派遣選手選考を行っていることがうかがえる。

●法人･事業所としての派遣選手選定の基準について、（「選手派遣事業所アンケート」結果）

（主な回答）

ｉ．本人の希望・挑戦意欲・成長意欲

・希望者、本人より立候補、参加意思のある職員

・コンテスト参加に意欲がある者、高い熱意と成長意欲を持つ者
・本人の挑戦する気持ち、チャレンジ意欲が高い職員

ⅱ．介護技術・経験・資格・勤務態度等の専門性・実務力

・経験・資格・介護技術
・日頃の勤務態度、介護技術、社会性
・業務成績が良好な者
・既定の能力に達している者
・経験十分な職員
・施設として恥ずかしくないレベルの職員
・普段の介護技術などを勘案し選定
・実績も優れている者
・介護福祉士

ⅲ．法人内・事業所内での推薦・選考プロセス

・職員からの推薦もしくは立候補
・法人の推薦
・部署での選考による選出
・法人内コンテスト入賞者
・法人内でのコンテスト予選通過者
・法人内ケアコンテストの最優秀賞受賞者
・グループ内コンテスト上位者

ⅳ．育成目的・成長支援としての選抜

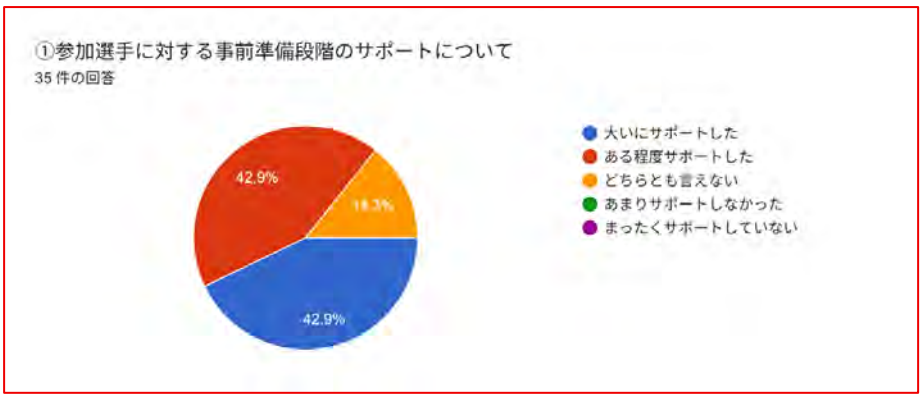
・今後の成長の１つとして選んだ
・普段自信がない様子の職員に自信をつけてほしい
・職員育成の観点からの選抜
・これから期待する職員
・主導となって動いてほしい
・福祉サービスの向上を目指して

ⅴ．経験年数や役割・組織内ポジション

・ベテラン～中堅職員を想定
・若手から中堅で将来性が見込める人材
・事業所内の指導的立場の者

（3） 参加選手に対する法人･事業所としての支援

参加選手に対する法人・事業所としてのサポートについては、「大いにサポートしている」「ある程度サポートしている」が共に 42.9%となっており、「どちらとも言えない」が 14.3%であった。事前の練習環境の整備や組織ぐるみでの指導・支援が顕著である。(「選手派遣事業所アンケート」結果)。



●法人･事業所の具体的なサポート内容について（「選手派遣事業所アンケート」結果）

（主な回答）

ⅰ．練習環境の整備・練習時間の確保

・練習時間の確保、シフト調整
・練習相手の確保、リーダー等が一緒に何度も練習
・法人内での介護技術練習、実技練習の実施
・シミュレーションやロールプレイの実施
・シチュエーションを想定したデモンストレーション
・模擬試験の実施
・前年度のコンテスト見学による事前学習
・過去動画での予習・復習

ⅱ．技術指導・課題分析・介護実践内容のサポート

・法人内での他職種による指導・訓練
・課題をチームで検討してシミュレーション
・事前課題の確認・指導
・実技内容の確認・指導
・課題を細かく分析して練習
・介護部門の主任・リーダー、出場経験者による指導
・事例を一緒に読み込む支援
・声かけ・支援方法・所作などの指導

ⅲ．運営・事務的サポート

・参加企画、申込、手続き一式
・事務局と本人の間のやり取り
・コンテスト概要や当日の課題の説明
・レポートの確認・提出相談
・動画作成のサポート

ⅳ．経済的支援（費用負担）

・交通費・宿泊費の補助または全額負担

・参加費等、参加に関わるすべての費用負担
・大会出場を出張扱い
・渡航支援（外国籍職員）

v．伴走型サポート・心理的支援

・当日の引率・同行
・励まし・精神的サポート
・不明点の相談対応
・チームで支える体制づくり
・施設全体で応援する声かけ

vi．その他

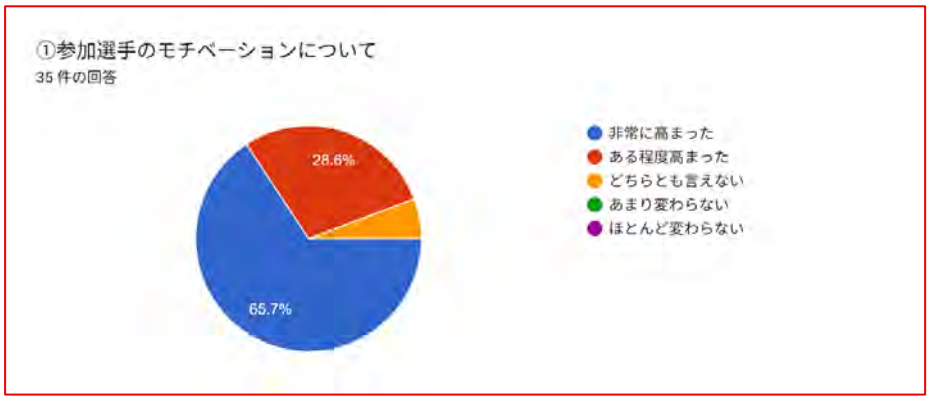
・前年のコンテスト見学による参加意欲の醸成
・選抜に向けた実務研修・個別指導
・参加の企画段階からの全体支援
・昨年度データの提供（外国籍選手対応）

（4） 参加プロセスを通じて得られた成果と期待

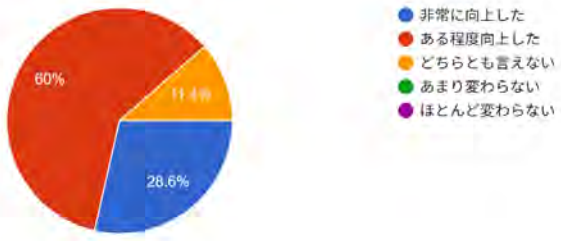
参加プロセスを通じて得られた成果について、どのようにとらえているか。「選手派遣事業所アンケートでは」いくつかの項目を尋ねた。各項目について、「非常に」と「ある程度」の合計で見ると「参加選手のモチベーションが高まった」が 94.3%、「参加選手の介護技術・技能の向上」88.6%、「他の職員への波及」85.7%、「法人・事業所として新たな視点や知見が得られた」94.3%といずれも高い成果が認められている。「法人・事業所としての満足度」は、91.5%であった。

そのうえで法人・事業所としての AJCC の期待については、「介護の振り返り・自己成長」「介護職の魅力づくり・モチベーションの向上」がいずれ 91.4%と高く、次に「介護技術・技能の向上・挑戦」85.7%、「介護の質の向上・イメージアップ」68.6%となっている。

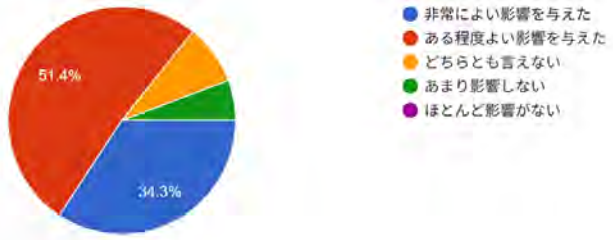
次回のケアコンテスト（AJCC）参加については、「大いに参加したいと思う」65.7%、「ある程度参加したいと思う」25.7%で、参加の意向にある法人・事業所が 9 割を超えている。



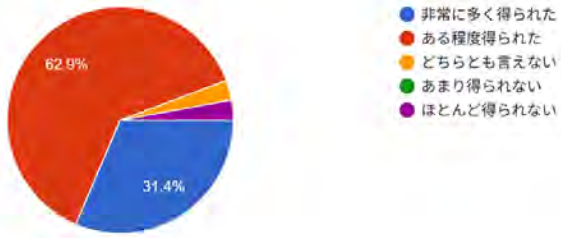
②参加選手の介護技術・技能について
35 件の回答



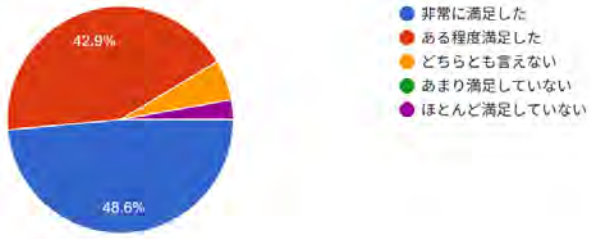
③他の職員への影響（波及効果）について
35 件の回答

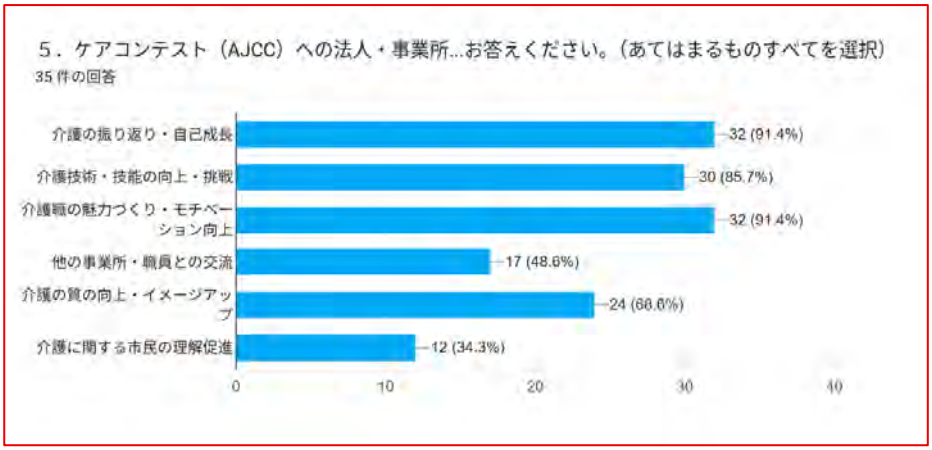


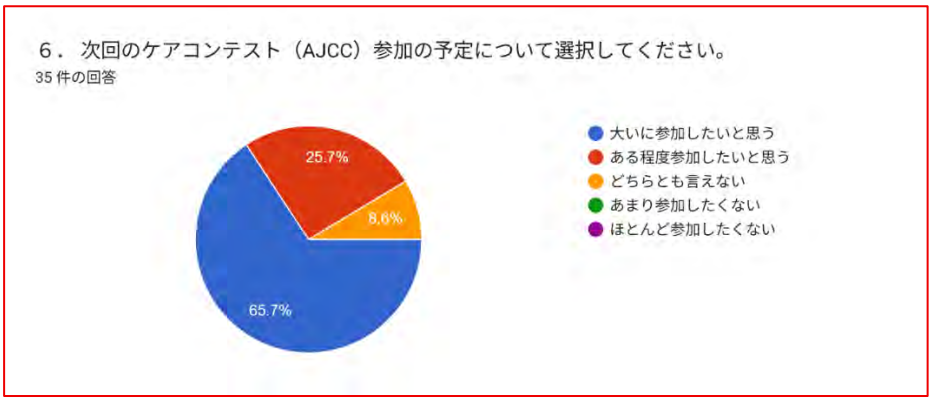
④法人・事業所として新たな視点や知見について
35 件の回答



⑤法人・事業所としての満足度について
35 件の回答







（5）ケアコンテスト（AJCC）への希望、改善点など

選手派遣事業所アンケートにおける「ケアコンテスト（AJCC）への希望・改善点」について自由回答の結果である。AJCC は高い評価を受ける一方で、教育的価値、運営の透明性、アクセス性、教育的価値の向上、多様性への配慮等について、さらに強化・改善のニーズが示された。

●ケアコンテスト（AJCC）への希望・改善点（「選手派遣事業所アンケート」結果）

（主な回答）

ｉ．大会運営・進行に関する改善・要望点

・前日の受付が大変。当日受付を検討してほしい。
・採点項目・評価内訳を明確にしてほしい（上位者との得点差も含む）。
・看取り分野は 10 分では難しい。
・課題情報が少なく想定が難しい。
・演技後のコメントは良いが、学べる機会の不平等性がある（出番が遅い選手は他者の演技を見られない）。
・個別フィードバックの実施を希望。
・事例の対応ポイントを全体で教えてほしい。
・モデル（高齢者役）の力量差への懸念。

・設定の介護度にギャップがあるように思う。
・高齢者役の不適切な発言への注意・配慮を求める。
・大会進行は回を追うごとに良くなっているとの評価あり。

ⅱ．会場・開催地・アクセスに関する意見

・開催地を固定しないでほしい。
・地方開催も実施してほしい。
・会場が近くて嬉しい。
・東京開催は励みになるが、遠方の選手にはハードルが高い。
・宿泊費の都合上、木～金曜日の開催が望ましい。

ⅲ．学びや交流機会の拡充に関する要望

・演技動画を後日選手が見られるようにしてほしい。
・出場者同士や審査員との対話の機会を増やしてほしい。
・事例を通じて普段のケアの迷いや違和感を話し合いたい。
・前夜祭にクロス・スタディを取り入れてほしい。
・見学のみでも大きな刺激になる。

ⅳ．費用・経済的負担に関する意見

・大会参加費を下げてほしい（スポンサー・広告収入の導入希望）。
・宿泊・交通の負担が大きい。

ⅴ．評価・表彰・リスペクトに関する要望

・最優秀賞の導入は評価
・外国人選手の名前は丁寧に読み上げてほしい。
・選手への敬意の徹底。
・モデルと評価者の認識差をなくしてほしい。

ⅵ．その他

・毎年よい機会を提供してくれて感謝している。
・参加職員のモチベーション向上につながっている
・運営への労いと高い評価

＜選手派遣事業所ヒアリング結果＞

本項は、選手派遣事業所を対象に実施したヒアリング結果である。各事業所における AJCC 参加の考え方、取り組みの実態およびその成果と要望について整理する。

選手派遣事業所は、法人理念や人材育成方針の違いを背景に、コンテストを専門性の検証機会として位置づける事例、組織的な育成プロセスの一環として活用する事例、職員の主体的挑戦を促す「学びの場」として捉える事例など、多様な関わり方を示している。

事例1　事業所内コンテストから法人内及び県大会を経て優秀者を派遣

事業所名　有料老人ホーム　グリーンヒル　法人名　社会福祉法人　あけあい会

所在地　三重県津市

法人の理念　愛情と誠意を基調とした福祉サービスに努める

●活動の概要

当法人では 2014 年から毎年「理事長杯ケアワーカーコンテスト」を継続開催し、日々の実践で磨いた技術と専門性を競い合い、職員のモチベーション向上と模範となる介護像の可視化に取り組んでいる。

2016 年から三重県介護福祉士会主催の「介護技術コンテスト」が開催されるようになり、法人内大会を県大会の予選会に位置づけ、優秀者を派遣するようになった。

2023 年からは全国大会 AJCC へ参加し、今年で 3 年目。2025 年度は法人から 5 名が各事業所による代表選考を経て法人本部の支援体制のもとで事前トレーニングを行い、出場した。

●事業所としての参加の意義

AJCC への参加を「全国レベルで他法人の介護技術を学び、自らの介護技術を検証する機会」と位置づけ、法人の介護水準の基準化・明確化、人材育成と士気高揚の仕組みとして機能させている。コンテストは自己満足に終わらず、外部評価を受けることにより、よりよいケアの探求を継続する組織文化形成に寄与している。

●活動の成果

本年度は、法人から派遣した 5 名のうち 2 名が分野別最優秀賞、1 名が奨励賞を受賞した。当事業所派遣の U 選手は、法人内の最優秀者として AJCC2025 食事 B 部門に挑戦、最優秀賞を受賞した。

参加選手は結果の有無に関わらず、ロールプレイ・動画研究・先輩の助言を通じて技術向上や自己理解の深化を実感しており、達成感が得られたとの声が聞かれる。また、参加を契機に職場全体が「よりよいケア」を模索し、フィードバックを共有する風土が生まれている。

●期待される成果と中長期の影響

法人内→県→全国へと挑戦ステップが明確化されたことにより、若手の成長ルートとしての明確な動機づけが形成され、定着促進・キャリア意識の醸成に繋がる可能性がある。法人としてのケアの均質化および外部発信力の向上にも波及すると期待している。

●要望・改善点

コンテストの形式上、やむを得ないことではあるが、自分の実技終了まで他選手の実技が見学できないのは学びの機会喪失であり、改善を望みたい。また、東京ビッグサイト開催の意義が大きい一方、地方参加者の宿泊確保が困難であり、事務局による宿泊先紹介等の支援があるとよい。

事例2　AJCC の知名度と権威がさらに高まり、多くの介護職が目指してほしい

事業所名　有料老人ホーム トラストガーデン本郷　　法人名　株式会社ハイメディック

所在地　東京都文京区

リゾートトラストグループアイデンティティ「ご一緒します。いい人生」

●活動の概要

当事業所では、2023 年度から AJCC の周知・参加を本格化した。2022 年度に別事業所で初参加を経験

した管理職が異動し、当事業所での大会参加を主導した。今年度は 4 名（経験者 2 名・新人 2 名）が自発的希望を踏まえ法人内より選抜された。

日常業務のルーティンの中で、大会参加を明確な目標に設定し、職員のモチベーション向上と成長実感を得る機会として位置づけている。準備過程では「基本の徹底」を最重視し、本社歯科衛生士・言語聴覚士、主任・相談員など多職種がチームを組み、指導・フィードバック・改善を繰り返し実施した。

当日は本社･人事部門等約 10 名が応援に同行し､法人全体への共有や採用活動での活用も視野に入れ、記録を残した。

●事業所としての参加の意義

AJCC 参加は、内部基準に留まりがちな介護現場のケアを「社会的に認められる外部基準」で見直す機会となっている。参加者・事業所双方が、専門職としての意識を再確認し、他法人のケアや視点に触れることで人的ネットワーク形成にもつながるものである。また、参加は強制ではなく意欲を尊重する仕組みにより、キャリア段階に応じた成長機会の提供と位置づけることができる。

●活動の成果

参加職員は、自身の強み・弱みを客観的に把握し、日々の業務を見直す「リフレッシュの機会」になったと評価している。コンテストを通じて浮き彫りとなる弱点は「個人の課題」ではなく「組織全体の改善ニーズ」と捉え、多くの職員が共有し、指導しやすいケア改善の視点へと転換している。また、現場からは「介護福祉士の実技試験のように、施設内で定期的な技術確認機会を設けたい」とのボトムアップ提案も生まれるなど、組織学習の循環が芽生えている。

●期待される成果と中長期の影響

AJCC は、介護が高度な知識と技術を必要とする専門職であることを社会に発信する舞台となり得る。本大会の権威がさらに高まることで、介護職の社会的評価向上、処遇改善、人材確保にも寄与する可能性がある。本事業所では、AJCC をきっかけに、職員が「業界全体の目標となる大会を目指す」という象徴的意義を見出し、キャリア意識の醸成と長期的な定着意欲につながると期待している。

●要望・改善点

現行では介護技術（HOW）が主たる評価視点である一方､「なぜそのケアを選択したか（WHY)」の説明機会が設けられると、知識とアセスメント力まで評価が深まり、視聴者の学びにも資するのではないか思う。今後、本大会の知名度と権威がさらに向上し、多くの介護職員が目標とし、誇りを持て参加する場となることを期待したい。

事例3　法人内のケア･アドバイザーが選手として挑戦した

事業所名　介護老人福祉施設 ケアホーム板橋　　法人名　社会福祉法人 平成記念会

所在地　東京都板橋区

法人理念 「絶対に見捨てない」｢その人らしさを大切にする」｢既存の枠組みに捕われない」

●活動の概要

当施設では 2023 年に 2 名が AJCC へ参加し、開催時期の影響により昨年度は不参加となったが、本年は再び 2 名の派遣を決定した。選手はいずれも法人・施設内で指導的立場にある職員で、将来的に後進指導ができる人材育成を視野に位置づけている。参加選手は施設長が指名し、「仕事としての取り組み」に位置づけ、東京都内開催であるため前夜祭は不参加とした。今回参加した選手の N 氏は「ケアアドバ

イザー」として、施設内 50%・法人内他施設 50%の割合で教育的役割を担う立場にある。

●事業所としての参加の意義

ケアアドバイザーのような育成担当者が選手として挑戦することで、日常の介護指導における説得力とエビデンスが蓄積される点が最大の意義である。実技を人前で行う機会は通常ほとんどなく、他施設・他法人のケア実践に触れることは視野拡大の機会になる。また、設定課題と評価基準に基づく演習は、介護プロセスを再構造化し、後輩指導の教材としても活用できる点で評価している。

●活動の成果

本年度参加した 2 名いずれも表彰を受けた。N 氏は看取り A 部門で初参加となり、緊張の中での挑戦となったが、開始前に他法人施設長から声をかけられ落ち着きを取り戻せたこと、高齢者役との事前の交流により安心して臨めたことが印象的であったと語っている。実技終了後は他選手のケアを見学することができ、大きな学びとなった。さらに、利用者役やアドバイザーからのフィードバックは、ケアアドバイザーとして日常的に後輩指導に活かせる多くの気づきを得る機会となった。

●期待される成果と中長期の影響

AJCC 参加が継続されることで、法人全体の指導職の力量向上が期待される。特にケアアドバイザーのような育成担当者が挑戦することは、組織内教育機能の強化に直結し、ケアの質向上のサイクルを加速させる役割を果たすことになる。また、選手自身は、次は高齢者役・アドバイザー役として大会に関わりたいという意向を持っており、その体験が本人の専門性深化と組織への還元につながるものと思う。

●要望・改善点

前夜祭に参加できない場合でも、オンラインでの説明会参加等により、大会趣旨や他選手の意気込みを共有できる機会があると、コンテスト参加のレディネスづくりになるのでありがたい。

事例4　AJCC への参加により職員のモチベーションが高まっている

事業所名　介護老人福祉施設 金沢美浜ホーム　　法人名　社会福祉法人 倖和会

所在地　横浜市金沢区

法人理念　こよなくやさしく、思いやりを深めた介護

●活動の概要

当施設では、以前より AJCC の存在を認識しており、昨年度に初めて見学したことを契機に、今年度から参加を決定した。参加の背景には、日々の業務の中で「感謝を受ける」ことはあっても、職員自身がワクワクするような刺激やモチベーション向上の機会を創りたいという思いがあった。

参加選手の募集は、強制ではなく、「行きたい」という職員に丁寧に説明し、自発的意欲を尊重する進め方を採用した。今年度は副施設長が職員数名を引率し、応援に同行した。応援参加も自主性を重視。

●事業所としての参加の意義

AJCC 参加は、単なる競技参加ではなく、組織に主体性と挑戦文化を生み出す仕掛けとして機能するものと思う。初年度はリーダー的立場の職員を中心の派遣になったが、応援参加した一般職員から「来年は私が出たい」という声が上がるなど、職員自身がキャリアと成長機会を自ら掴みに行く意識形成につながっている。

●活動の成果

準備段階では、コンテストの 1 か月ほど前からレポート作成を開始し、副施設長による助言を経て、

勤務後の居残り練習などを行い、職員同士のコミュニケーションが深まった。前日には仲間が声をかけて士気を高め、当日は静かに見守る形で集中環境を整えた。参加者の一人は、先輩職員と介護について語り合う機会が増え、もう一人は翌年度の参加者支援へ回る意向を示すなど、今回の経験が、相互研鑽の組織風土づくりにも繋がっているように思う。また、設定課題のケース検討では、他部門のケースも参考に組織学習が行われ、実技の振り返りでは、成長意欲につながる「悔しさ」も含め成果として捉えられる。

さらに、選手のみならず、見学で訪れた職員も刺激を受け、介護の多様性に触れたことで、仕事への意欲の高まりが伺える。AJCC 参加は、学び合いの関係性が生まれる新たな風土形成の契機となっている。

●期待される成果と中長期の影響

自発性を尊重した参加方針により、キャリア形成の自律性が高まり、長期的には定着促進や次世代リーダー育成につながることが期待される。今後は競技参加経験者が支援側に回る循環が形成されることで、事業所内の教育・育成機能が強化され、さらにケアの質向上のサイクルが加速することになる。

●要望・改善点

大会での動画撮影に関する SNS 発信禁止の趣旨は理解している一方で、法人内学習用として限定公開形式で共有できる仕組みがあると、学びの最大化につながる。検討して欲しい。

事例5　AJCC は、介護の楽しさを感じることができる「場」である

事業所名　そんぽの家 GH 海老名　　法人名　SOMPO ケア株式会社

所在地　神奈川県海老名市

法人理念　SOMPO ケアは、多くの高齢者の方やそのご家族および全従業員に対して「人間尊重」を経営の基本とし、安心・安全・健康に資する最高品質の介護サービスの提供ならびに働き甲斐と働きやすい職場づくりを行い、「世界に誇れる豊かな長寿国日本」の実現に貢献します。

●活動の概要

当事業所では、法人本部からメールで通知されるコンテスト参加案内を受け、参加の可否を事業所単位で判断している。参加募集は全職員に対して行い、出場は本人の希望を最優先としている。参加分野の選択も選手自身に委ねており、主体性を尊重する運営方針をとっている。

準備段階では、施設長が主に相手役を務め、ロールプレイの場をつくり、他スタッフにも見てもらいながら練習を進めた。当日は 2 名の職員が応援で参加し、選手の挑戦を見守った。

●事業所としての参加の意義

法人としては、介護技術向上の取り組みを従前から重要視しており、ケアコンテスト参加自体に特別感はない。AJCC は、「介護の楽しさ」を感じられる貴重な外部の“場”であると捉えられている。日常の介護実践を第三者の視点で評価して貰い、フォードバックされるので意義は大きい。選手自身「不足点や伸びしろに気づくことが楽しい」と語っており、職員の成長意欲を刺激する機会となっている。

●活動の成果

コンテスト準備における対話やロールプレイは、自然に職員間の協力関係を生み出すことに繋がっている。また、選手だけでなく応援として会場に同行した職員が、アドバイザーの助言や他選手のケアを見学することで「コミュニケーションの違い」や「自施設では気づかない視点」を共有し合う場となり、学びの波及も見られる。選手からは「自分にはまだできることがある」と前向きな気づきが生まれ、成長への意欲が高まっている。

●期待される成果と中長期の影響

AJCC は、利用者の幸せに寄与するケアの探究へとつながる可能性を示している。今後、参加者が次の世代を誘い、支援側に回ることで、事業所内に継続的な学びと挑戦の循環が形成されることが期待される。主体性を尊重する組織風土のなかで、長期的には職員の自律的キャリア形成や職場定着にも影響してくる。

●要望・改善点

希望した分野で参加できなかったのは残念である。また、アドバイザーコメントで、語調が厳しく感じられる面があり、配慮が望まれる。評価について、採点表の共有や口頭でのコメントだけでなく、書面でのフィードバックがあると、学びを記録し、振り返りに活用できるのではないかと思う。

事例6　専門性を追求し、評価するという特有の成長機会と強い動機づけ

事業所名　介護老人福祉施設　みやぎ台南生宛　法人名　社会福祉法人　南生会

所在地　千葉県船橋市

法人理念　「人間尊重・プライド尊重・プライバシー尊重を守ります」「利用者様の自立支援を基本に、安心・安全・感動のある日々を提供します」「地域福祉に寄与します」

●活動の概要

当事業所は昨年度から AJCC へ参加し、今年度は 2 回目の挑戦。参加目的として、腕試しや他選手からの学び、そして業界全体を盛り上げるという視点が挙げられる。出場選手の選出は「立候補」ではなく、介護リーダー5 名に推薦を求める形式とし、その年に最も優秀で「仕事ぶりをぜひ見せたい」と思える職員を選ぶという方針でやっている。これは、選手選出の段階から組織として職員の優秀性を認めるプロセスとなり、評価文化の形成にも寄与することになる。

準備段階では、過去大会動画視聴による動機づけ、技術練習、さらに本番と同環境での予行演習を行い、徹底した準備体制を取っている。当日は窓口担当者と応援者を含む 3 名が同行し、組織的にサポートしている。大会後には、出場選手による全職員向けフィードバック会を開催し、さらに法人内の事例発表会で取り組み内容を発信する予定である。

●事業所としての参加の意義

参加は育成戦略の一環として位置づけられ、採用時に重視する「仕事への関心」と「理念適合性」を軸とした人材が、外部で専門性を発揮し、評価される重要な成長機会となっている。専門的介護技術を外部から客観的に評価してもらう機会は業界的に乏しい。AJCC の存在自体が職員にとって高い意味を持つものとして位置づけることができる。

●活動の成果

選手本人は結果に悔しさを残したものの、同行参加した職員からは「普段と同じ良い仕事ぶりであった」と評価され、主観と客観の差への気づきが新たな成長意欲につながっている。大会参加は、応援職員にも多くの「気づき」をもたらし、職場全体の学習が活性化に繋がる。また、法人や事業所としては、日常のケアの質が外部で証明される機会となった。

●期待される成果と中長期の影響

参加により「専門性を追求し、評価する」経験が組織文化として広がり、専門技術を尊重する風土が強化される。長期的には、職員一人ひとりのスキル向上が加速し、組織内の教育循環により、ケアの質向上

に繋がることが期待される。業界・社会レベルでは、介護技術の専門性を可視化し、介護職の魅力発信・人材誘引につながる点も高く評価できる。

●要望・改善点

大会時間が長く、参加者・観覧者の負担が大きいため、半日×2 セット形式など時間短縮も検討してはどうか。外国人選手の技術レベルが他と遜色ないことから「外国人介護」分野の独立化は不要ではないかとも思う。「賞を取るまで出場し続けたい」と継続参加意欲が示されており、参加枠の拡大と継続参加が可能な制度設計を期待したい。

事例7　グローバル・リーダー（外国人役職者）の育成を目指して

事業所名　スーパー・コート プレミアム宇治　　法人名　株式会社スーパー・コート

所在地　京都府宇治市

法人理念「安全で清潔、イキイキした生活」

私たちは、常に安全で清潔、イキイキした生活を提供すると共にご家族の気持ちで親身になってお世話をいたします。

●活動の概要

当社では 15 年前から外国人介護職員の採用を進めており、将来のグローバルな役職者の育成を長期的な方針として掲げている。AJCC への参加は数年前から継続しており、昨年度は外国人介護部門に出場した。参加の主目的として、視野の拡大、キャリアアップ意欲の喚起、現場力向上への還元が挙げられる。

選手選考では、モチベーションが高く、理念理解・実践力があること、リーダー候補として組織の見本になり得る職員であることを基準としている。選抜後は本社から本人・事業所に正式連絡があり、施設長が個別面談を行い、準備方針を共有する。

●事前準備と支援体制

選手は、本社が運営する社内研修機関「イキイキ介護スクール」に集まり、講師と二人三脚で実技研修・レポート指導を受ける。事業所としても、施設長がレポート確認や相談対応を行い、バックアップ体制をとっている。当日のサポートは、本社職員が同行し、安心して挑戦できる環境が整えられている。

●活動の成果

大会では、受賞した選手がすぐ事業所へ連絡をくれるなど、達成感と誇りが共有された。選手本人は、準備を進める中で不安から自信へと変化し、学びを実感したようである。また、事業所内では特別な調整は行われていないものの、同僚から選手への励ましが生まれ、応援文化が成熟してきている。コンテストへの挑戦は、本人にとって仕事のレベルを確認し、次の成長課題を見出す機会となっている。

●期待される成果と中長期の影響

企業としての期待は、「志を持つ外国人介護職員をリーダーへ育てる」ことがある。AJCC での学びと経験を組織へ持ち帰り、現場改善へ波及させることで、外国籍人材が成長・指導側へ回る循環が形成される可能性がある。将来的には、参加者がロールモデルとして後輩の挑戦意欲を高め、外国籍職員のキャリア形成支援にもつながると考えられる。

●要望・改善点

実技での場面設定の図面が事前共有されると準備の質が高まるのではないかと思う。また、受賞時のメダル・賞状に加えて副賞があると、参加意欲がさらに高まるものと思う。

事例8　コンテストを人材育成のよい機会・場として位置づけ、活用

事業所名　介護老人施設 リバーパレス青梅　　法人名　社会福祉法人 真光会

所在地　東京都青梅市

法人理念 「正しさ」より「楽しさ」の実現（年度方針）

●活動の概要

当法人は 2017 年、AJCC が米子で開催されていた時期から参加しており、知人の紹介をきっかけに選手派遣を開始した。現在まで継続参加しており、東京開催以降は派遣人数が増え、施設として約 15 名、法人では 20 名以上が出場している。当初は「日頃のケアを発揮してほしい」という意義づけだったが、近年は意図的に役割を変え、A 部門は「日常ケアの振り返り」、B 部門は「ケアの実践力向上」と目的を分け、教育施策として位置づけ、実施している。

選手募集は自選・他薦いずれも受け入れ、法人としてケアコンテスト参加を強制はせず、「自ら挑戦する職員」を尊重する文化を維持している。本年も、6 名が手を挙げたが法人枠制限で 5 名を選出するなど、主体性を基盤にした選考方針が特徴である。

●事業所としての参加の意義

AJCC 参加を「人材育成の有効な場」として公式に位置づけ、組織戦略に組み込み始めた点が大きな特徴である。実技コンテストの取り組みは「寄り添いを大切にするケア」という法人理念にも合致し、職員がケアを可視化し言語化する契機となっている。

●活動の成果

選手決定後は「ケアコンテストリーダー」を選任し、係長級の指導のもとでレポート添削・ケース検討・ロールプレイをチームで行う仕組みが定着してきた。準備は複数施設でリモート連携しながら実施し、エビデンスに基づくケア実践研究の機会にもなっている。前夜祭には参加者全員を派遣し、異なる地域の選手との交流も大切にしている。当日は施設長が同行し、終了後は慰労会や振り返り会を実施することで、経験の定着にも繋がるよう対応している。

今年度はリーダー役の T 氏が入賞し、職場では「尊敬の眼差し」で見られる存在となり、外部評価が職場文化へ波及している。他の選手も悔しさを糧に「来年再挑戦したい」と語っており、挑戦意欲の循環が始まっている。また、看取り部門で参加した K 氏は、ご家族からの評価を得たことで自己効力感が高まったと言っている。

●期待される成果と中長期の影響

継続参加により、選手だけでなく送り出す職員や管理者にも意義が共有され、組織全体がケアの質向上を学び合う文化へ移行しつつある。今後は、挑戦経験がキャリア成長の基盤となり、職員の定着や人材力の強化にも波及する可能性がある。また「介護の魅力づくり」「担い手の人間力の向上」に寄与する社会的意義が期待される。

●要望・改善点

今後も継続参加ができる枠の確保を期待したい。

3. 動画投稿選手及び養成校の関わり･活動をその成果

～実技を通じて実践力の習得をめざす

本大会（AJCC2025）で動画投稿に参加した養成校は 8 校であった。大学・専門学校が各 2 校、高等学校が 4 校である。動画投稿本数は 35 本であった。大学・専門学校部門と高等学校部門に分けて審査を行い、各部門から最優秀賞、各参加養成校から奨励賞を決定している。動画投稿養成校及び選手に対するアンケート及びヒアリングは、以下の通りである。

■動画投稿選手及び養成校に関わるアンケート及びヒアリング調査

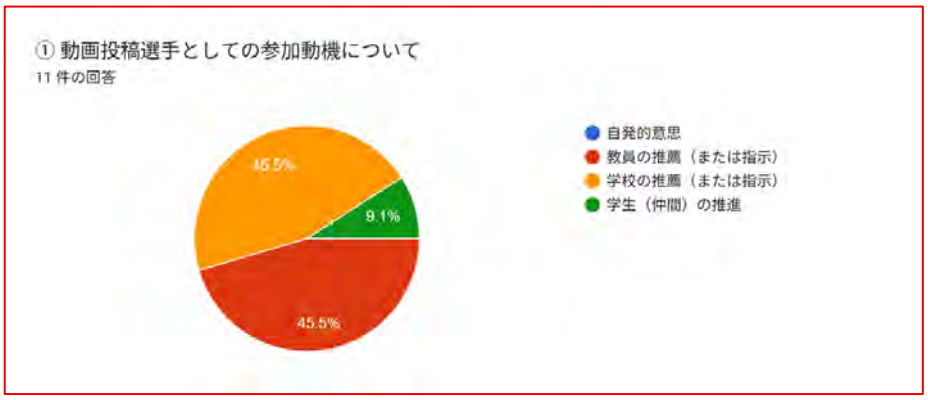
動画投稿参加選手アンケート （以下、「動画投稿選手アンケート」と言う）	・動画投稿養参加選手を対象とするアンケート。 ・10 月 14 日に発信し、10 月 27 日までの回答とした。 ・有効回答率 31.4%
動画投稿養成校ヒアリング （以下､「動画投稿養成校ヒアリング」と言う）	・動画投稿 8 養成校を対象とするヒアリング。 ・10 月２０日から 12 月 10 日にリモートで実施。 ・有効回答率 100%

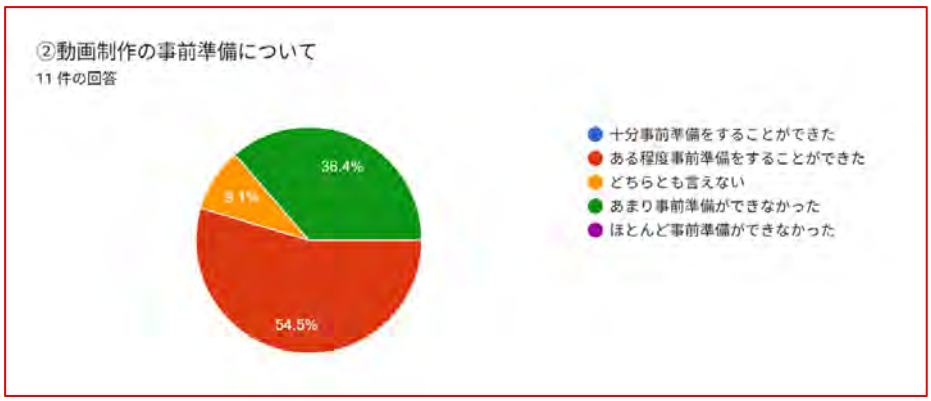
＊自由回答については、主な回答について親和性を基準にカテゴリー区分した結果である。

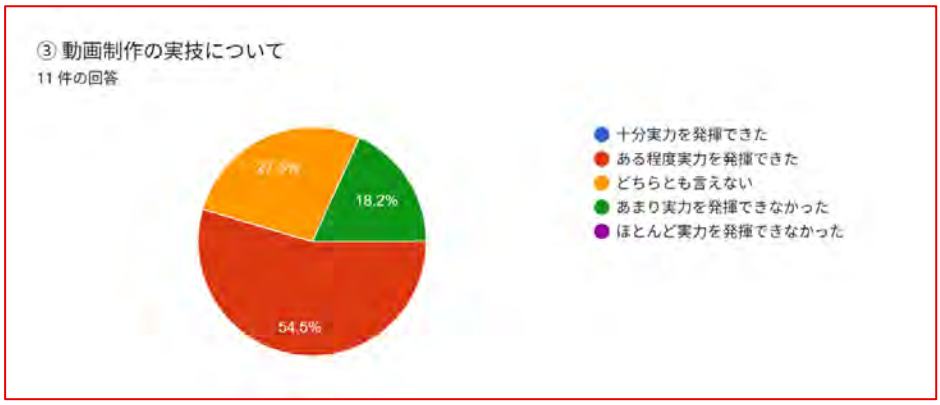
＊各アンケート及びヒアリングの集計図表では、Web 集計の番号・質問項目をそのまま表記した。
本報告書の巻末に参考資料として掲載したアンケート及びヒアリング用紙を参照してほしい。

（1） 動画投稿参加選手の活動

「動画投稿選手アンケート」の結果でみると、動画投稿参加の動機については教員もしくは学校の推薦または指示が多い。また、動画制作の準備、実力の発揮については、「ある程度できた」の回答が共に 54.5%となっている。「十分事前準備をすることができた」「十分実力を発揮できた」はいずれもゼロ%で、「あまり事前準備ができなかった」36.4%、「あまり実力を発揮できなかった」18.2%となっている。



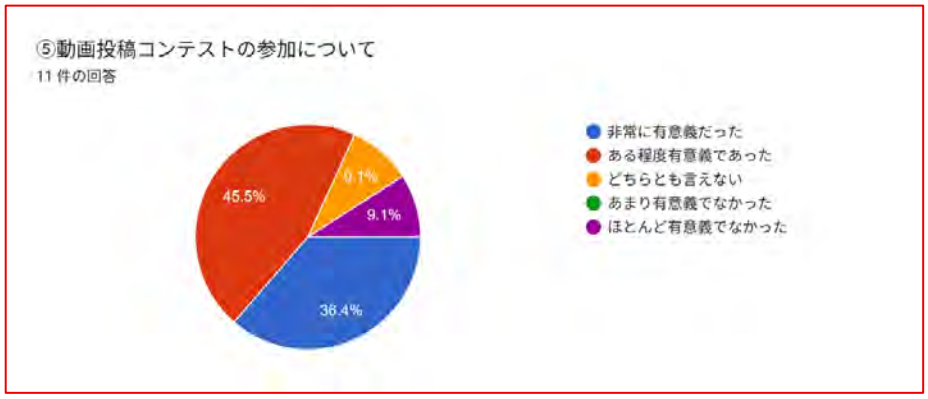




（2） 動画投稿の成果

動画投稿コンテストの参加については、「非常に有意義だった」36.4%、「ある程度有意義だった」45.5%であった。参加の具体的成果については、「介護の実践力を身につけることができた」63.6% 、「根拠（エビデンス）に基づく介護のあり方を考えるようになった」54.5%、「介護についてさらに深めたいと思うようになった」45.5%などが上位の回答となった。また、実務経験者による「実技コンテスト」については、「機会があれば実技コンテストを見学したいと思う」が 45.5%であった。

「動画投稿コンテストについての感想、希望、改善点」について、アンケートの回答母数は少ないが、積極的な意見が出されている。



●動画投稿コンテストについての感想、希望、改善点など（「動画投稿選手アンケート」）

（9 件の回答）

・このコンテストに出させていただいてとても貴重な経験になったと思っています。改善点としては動画を撮る時の角度は自由に撮れば良いと思います。

・テーマが決まっていたのでそれについて、知ることが出来ました。

・途中で何回も間違えて取り直すことが多々ありましたが、無事に撮影を終えることが出来て良かったと思います。緊張してしまうと焦ってしまうので緊張を持ちつつ接していきたいと思います。アピール時にカンペを読み過ぎてしまったので見ないように心がけていきたいです。

・楽しかった。

・とても緊張しました。後から動画を見た先生に改善点などを教えていただき、今回の動画撮影だけでたくさんのことを学ぶことができました。

・生徒同士で行うのは知識の足りなさやぎこちなさより介護や症状の本質的なものと異なっているかもしれないと思った。

・頭の中では分かっていると言っても、実際にやらないと気づけないことがあると改めて学びました。非常に良い経験でした。ありがとうございました。

・最優秀賞の動画の共有や、排泄部門、食事部門での正解の事例を見せて欲しいです。

・何が悪かったのか良かったのか振り返りたいと思います。

＜動画投稿養成校ヒアリング結果＞

ここでは、動画投稿コンテストに参加した養成校 8 校の活動とその成果を整理する。各養成校は、学校種別や教育方針の違いを背景に、動画投稿コンテストを授業の一環として位置づける事例、自主的な学修活動として展開する事例など、多様な関わり方を示している。

事例 1　奨励賞受賞を大学のホームページに掲載し、介護の魅力を発信

養成校名：東北福祉大学　総合福祉学部　社会福祉学科

所在地：宮城県仙台市

学校の理念：東北福祉大学は、『行学一如（ぎょうがくいちにょ）』を建学の精神に掲げ、その教育のその教育の理念は『自利・利他円満』の哲学を基調とし、人間力、社会力をもつ人材を世に送り出しています。

●活動の概要

東北福祉大学総合福祉学部社会福祉学科では、2024 年から AJCC の動画投稿コンテストに参加している。介護分野を担当する教員がコンテストの趣旨に着目し、学生の学びを外部に可視化する機会として参加を推進してきた。参加にあたっては、介護系学生の 3 年生・4 年生全体に周知したうえで、自主的に参加を希望する学生のみを対象としている。

コンテストへの関わり方は、選手に限らず、モデル役や撮影担当など複数の役割を設定し、学生が自らの関心や状況に応じて関与できる形をとっている。選手が他の学生に声をかけて参加が広がるケースも見られ、学生同士の自発的な協働によって取組みが進められている点が特徴である。

●参加の意義

- **介護に取り組む学生の努力を可視化する機会：**介護分野は、学生の努力や成長が外部から見えにくい領域であり、コンテスト参加はその取り組みを社会に示す貴重な機会になっている。
- **主体的に学ぶ姿勢の醸成：**課題に対して「どうすればよいか」を学生自身が考え、根拠に基づく介護を探究する経験が、介護理解の深化につながっている。

●活動のプロセス

- **学生同士の議論を重視した進行：**課題提示後は学生同士の話し合いを基本とし、教員は必要に応じて助言する立場をとっている。学生は楽しみながら議論を重ね、その過程で理解を深めている。
- **表現方法の検討を通じた学び：**排泄介助の課題では、指定された撮影方法では意図した介護が十分に伝わらないという課題が生じ、教員も加わり撮影方法やカメラワークを検討した。
- **参加後の振り返りの場づくり：**動画投稿後も教員が学生同士の話し合いの場を設け、受賞時には学生全体で成果を共有し、互いに称え合う機会を大切にしている。

●期待される成果

- **介護に対する考え方の質的変化：**参加学生は、介護技術を「誰に・なぜ・どのように用いるか」という視点で捉えるようになり、実技授業においても主体的な発言や提案が増加している。
- **学年・学生間への波及効果：**経験者の意見に他の学生が耳を傾けるようになり、学生同士のコメントや対話の質が向上するなど、学科全体への好影響が生まれている。
- **挑戦経験によるモチベーション向上：**モデル役を経験した学生が翌年度は選手としての参加を希望

するなど、継続的な挑戦意欲が育まれている。

●要望・改善点

・**評価の見える化への要望：**採点表は提供されているものの、順位や最高点など、結果の背景がより分かる形で示されることを学生は求めている。

・**評価コメントの明確化：**実技後コメントについて、「何を評価したのか」「どの点を汲み取ったのか」をより明確に示すことで、学生が自身の介護をさらに表現しやすくなると考える。

・**撮影条件の具体化：**評価の公平性の観点から、撮影方法やアングルについて、より具体的な指示が示されることを期待したい。

事例 2　2 年次生の授業の一環に位置づけ、クラス全員で動画制作に取り組む

養成校名：吉川福祉専門学校（わたなべ学園）　介護福祉科

所在地：埼玉県　吉川市

学校の理念：広く深い知識理論、専門性の高い実践技術をしっかりと身につけ、人権意識、倫理観を持つ人間性豊かな介護福祉士を育てる。

●活動の概要

吉川福祉専門学校介護福祉科は、介護福祉士養成を目的とする専門学校として、学科創設から 16 年の実績を有している。AJCC の動画投稿コンテストには 3 年前から参加しており、初年度は希望学生による任意参加であったが、2 年目以降は 2 年次生の授業の一環として位置づけ、クラス全員で動画制作に取り組む体制へと発展させてきた。

本取り組みは、1 年次に学ぶ生活支援技術の基礎を土台とし、動画制作のプロセスを通じて、より実践的な介護技術へと高めることを狙いとしている。授業の到達目標として「介護の根拠を伝えられるようになること」を掲げ、体験・実践・振り返りを重ねる機会として AJCC を活用している。

●参加の意義

・**体験と言語化を通じた理解の深化：**言葉による説明だけでは理解が進みにくい学生に対し、まず身体で体験し、その体験を言語化する学習プロセスを重視している。

・**ケースに基づく実践的学習の場：**AJCC の動画投稿は設定課題に基づく取り組みであり、具体的なケースを想定して介護のあり方を考え、実際に実践する学習機会として有効である。

・**外部評価を受ける意義：**外部の専門家からフィードバックを受けられる点は、学生にとって貴重であり、「根拠を伝える介護」を身につけるうえで大きな意味をもっている。

●活動のプロセス

・**小グループによる共同研究と動画制作：**2 年次生を対象に、3～4 人の小グループで設定課題に取り組み、共同で検討・制作を行った。

・**学生主体の役割分担と制作：ど**のようなケアを行うかについて小グループで話し合い、役割分担を決めたうえで制作に臨んだ。教員は制作過程での指導や指示はほとんど行っていない。

・**実習期間を活用した制作計画：**夏休みの実習の合間に 1 週間の制作期間を設定し、現場体験と学内学習をつなぐ形で動画制作を進めた。

・**投稿作品の選定も学生主体：**クラス内で作品を視聴し、どの動画を AJCC に投稿するかについても学生自身に判断させ、できるだけ学生の意向を尊重して投稿した。

●期待される成果

・**エビデンスに基づく実践技術の定着：**授業の目的である「根拠に基づくケアの実践」に照らし、動画制作は効果的な学習手法となっている。

・**習意欲・モチベーションの向上：**コンテストへの参加により学生の意欲は高く、入賞を目標に主体的に取り組む姿勢が見られる。

・**外部評価による自己効力感の醸成：**AJCC アドバイザーからのフィードバックは学生にとって有益であり、高評価を受けることで自信の形成にもつながっている。

●要望・改善点

・**高齢者役設定の明確化への要望：**動画制作では高齢者役の動きが重要となるが、学生が担うとリアリティが不足しがちである。設定課題とは別に、高齢者役の条件や対応動作について、より具体的な指示があると有益である。

事例 3　テーマ：高校生介護技術コンテストと合わせて、実践力向上を目指す
養成校名：熊本県立芦北高校
所在地：熊本県
学校の理念：校訓：創造・勤勉・敬愛
福祉科：新しい幸せのデザイン　地域に貢献　実習　合格率

●活動の概要

熊本県立芦北高校福祉科は、「新しい幸せ」をデザインすることをコンセプトに、「福祉の心で活躍するスペシャリスト」の養成に取り組んでいる。1 年次で介護職員初任者研修資格を全員が取得し、2 年次以降は医療的ケアを含む専門分野の学習を進め、3 年次には専門的知識・技術を身につけたうえで校内外での活動へと発展させる教育方針をとっている。

こうした段階的な専門職養成の一環として、同校では高校生介護技術コンテストと併せ、実践能力向上を目的としたプログラムとして、令和 6 年度から AJCC の動画投稿コンテストへの参加を決定した。

●参加の意義

・**複数の大会を連動させた実践力強化：**高校生介護技術コンテスト（県大会・九州ブロック大会）への挑戦と併せて AJCC に参加することで、実践力向上に向けた学習機会を多層的に確保している。

・**課題設定を通じた多角的な学び：**AJCC の課題は、さまざまな視点から介護を考えることができる内容であり、生徒が利用者のニーズや意向を踏まえた支援を検討する契機となっている。

・**入賞経験による学習意欲の向上：**初年度の取組みで最優秀作品として表彰されたことが、生徒の高いモチベーションにつながっている。

●活動のプロセス

・**チーム編成による動画制作：**2 年生 24 人を対象に 3～4 人で 7 チームを編成し、各チームが 1 本ずつ動画を制作した。課題提示から前期課程終業式までの限られた期間であったが、生徒は集中的に制作に取り組んだ。

・**投稿作品の選定：**制作した 7 本の動画は授業内で全て視聴し、その中から 5 本を選定して AJCC に投稿した。完成した動画は 1 年生の授業でも活用し、先輩の取り組みを通じて介護への学びを喚起している。

・**教員にとっての学びの機会：**動画制作は教員にとっても初めての経験であり、介護実習の在り方について改めて考える機会となった。

●期待される成果

・**実践力・創造力の意識化：**国家試験合格に必要な知識・技術に加え、より良いケアを実現するための実践力や創造力の重要性を生徒が意識するようになっている。

・**生徒と教員の協働による教育効果：**動画制作を通じた生徒と教員の協働は、専門職養成における教育の新たなあり方を示す経験となっている。

・**教育資源としての蓄積：**2 年連続で投稿を行えたことは学校として大きな成果であり、学内における教育的経験値の蓄積につながっている。

●要望・改善点

・**取組機会のさらなる充実への期待：**福祉介護人材育成にとって、こうした機会と場は極めて重要であり、今後さらに充実することを期待している。

・**課題提示時期に関する要望：**動画制作後に夏休み期間の実習へと円滑につなげるため、事前課題の送付時期をもう少し早めてほしいとの要望がある。

事例 4　3 年次生全員参加の予選会で選手を決定し、チームで自主制作

養成校名：佐賀県立神埼清明高等学校

所在地：佐賀県

学校の理念：＜清明＞　清く明るい豊かな心を育て、将来に対して大きな希望を持つ人材を育成する。

＜創造＞　学び修めた知識・技術や経験を基に、思考と実践で新しいものを創り出す、積極・進取・挑戦の精神のもと、時代に対応した人材を育成する。

＜精励＞　何事にも一生懸命、真摯な態度で励む人材を育成する。

●活動の概要

佐賀県立神埼清明高等学校では、AJCC の動画投稿コンテストを、介護技術力の向上と学習の深化を目的とした教育活動として位置づけている。コンテストで「勝つこと」を目的とはせず、他者の介護をよく観察し、自らの技術や考え方を相対的に確認する学びの機会と捉えている点が特徴である。

参加対象は 3 年次生全員であり、全員参加の予選会を実施したうえで選手を決定している。選ばれた生徒を中心に 5 名程度のチームを編成し、高齢者役や撮影などの役割分担を行いながら、設定課題に基づく介護についてチームで研究し、自主的に動画制作を進めている。

●参加の意義

・**相対的評価を通じた自己理解の促進：**他校や他チームの介護を見ることで、自身の技術や考え方を客観的に捉える機会となっている。

・**協働的学習の重視：**他者と共に考え、検討を重ねるプロセスそのものに学習効果があると捉えており、チームでの協働を重視している。

・**介護に対する誇りの醸成：**これまで社会的に評価されにくかった介護技術が可視化されることで、介護に誇りをもって取り組む意識の醸成につながっている。

●活動のプロセス

・**3 年次生全員参加による予選会の実施：**全員が参加する予選会を通じて選手を決定し、選抜の過程自

体を学習機会としている。

・**チーム編成と役割分担：**選手決定後は、5 名程度でチームを組み、高齢者役、撮影等の役割を分担しながら制作を進めた。

・**生徒主体の制作と教員の見守り：**動画制作において教員は基本的に関与せず、生徒が自ら考え、答えにたどり着くことを重視している。必要に応じて相談に応じる姿勢をとっている。

・**リサーチを含む試行錯誤の過程：**座り方一つについても複数案を検討し、分からない点は実際の介護施設に問い合わせるなど、主体的なリサーチを行っている。

●期待される成果

・**多角的に考える力の育成：**時間をかけて検討し、試行錯誤を重ねてまとめ、発表する一連のプロセスを通じて、多角的な視点が育まれている。

・**他者の実践から学ぶ姿勢の定着：**他校の動画を見ることで刺激や歓びを感じ、自身の学びを深める循環が生まれている。

・**介護の本質への理解深化：**短時間で介護技術を示すことよりも、利用者理解や環境理解を含めて考え抜くことの重要性が意識化されている。

●要望・改善点

・**コンテスト形式への問題提起：**短時間で利用者理解を行い介護を実施する課題設定は、介護の本質と異なる側面があると感じており、時間をかけて考えた成果を共有する形式も検討してほしいとしている。

・**評価基準の客観化への要望：**介護をどのような基準で評価するのかについて、主観に依らない客観的な評価基準の研究・整備を求めている。

事例 5　介護技術の探究をすることで介護の楽しさ、難しさを知り、将来に活きる

養成校名：香川県立高松南高校　福祉科

所在地：香川県　高松市

学校の理念：（HP）個性みなぎる生徒一人ひとりを大切にしながら、その希望や適性等にきめ細かく応じる教育を展開しています。（福祉科は、近年における社会の高齢化等に対応して介護人材を養成するなどの必要から、平成 22 年4月、新たに設置された学科）

●活動の概要

香川県立高松南高校福祉科では、第 13 回大会から AJCC の動画投稿コンテストに継続して参加している。参加の目的は、選手となった生徒のモチベーション向上と介護技術の向上である。出場者は、高校 2 年生の中から意欲のある生徒を対象に選定しており、意欲を示した生徒は原則として全員参加させる方針をとっている。

積極的に応募する生徒は多くないため、教員が大会の趣旨を説明するとともに声掛けを行い、参加を促している。大会参加が決定した生徒は、夏休み期間中に登校して練習を行い、4 人で課題に基づく検討と撮影準備を進めた。練習には教員も加わり、撮影時の機材設置などについても教員がサポートしている。また、動画投稿前には、設定課題を授業内で事例検討として扱い、参加しない生徒にとっても学びの機会となるよう工夫している。

●参加の意義

・**意欲ある生徒の成長機会の確保：**出場意欲を尊重し、挑戦の機会を保障することで、生徒の主体的な学びを促している。

・**早期段階での実践的経験：**高校 2 年生の段階で、課題に基づく介護技術の探究と外部評価を経験できる点は、大きな意義がある。

・**学科全体への学習効果の波及：**大会課題を授業で扱うことで、参加生徒以外にも学びの効果が広がっている。

●活動のプロセス

・**意欲重視の参加者選定：**選抜基準は設けず、参加意欲を重視して出場者を決定している。

・**夏休み期間を活用した集中的取組み：**夏休みに登校して練習を行い、4 人 1 組で課題研究と動画制作を進めた。

・**教員による伴走型支援：**練習や撮影準備に教員が関わり、技術面・環境面で生徒を支えている。

・**授業への展開：**動画投稿前に授業内で事例検討として扱い、学科全体の学習資源として活用した。

●期待される成果

・**具体的フィードバックによる学習効果：**コンテスト結果に対する具体的な講評により、良かった点や改善点が明確になり、学習効果が高まっている。

・**次段階へのステップアップ：**3 年生で参加する高校生介護技術コンテストに向けた準備としても有効であり、生徒の成長や意欲向上につながっている。

・**将来を見据えた職業観の形成：**介護技術の探究を通じて、介護の楽しさと難しさを実感した経験が、将来現場で働く際の基盤となることが期待される。

●要望・改善点

・**実技参加・交流機会への期待：**今後は、高校生がコンテスト会場での試技に参加する機会や、現場職員が大会を見学・交流できる場があると、より大きな刺激になると考えている。

事例 6　介護福祉士資格取得の実技試験に変わるものとして有益である

養成校名：鳥取県立境港総合技術高等学校　福祉学科福祉科　介護類型

所在地：鳥取県　境港市

学校の理念：友愛・創造・自律

（福祉科の目標）福祉に関する専門的な知識・技術を身につけるとともに、介護福祉士・介護職員初任者研修等の資格取得やボランティア活動に取り組み、幅広く地域福祉に貢献できる人材を育成する。

●活動の概要

鳥取県立境港総合技術高等学校福祉科は、県内唯一の福祉系高等学校として、介護人材の育成に取り組んでいる。AJCC とは以前から関わりがあり、大会運営のタイムキーパー等のボランティアとして参加してきたが、動画投稿コンテストへの参加は 4 年前から開始した。

本校では、動画制作を 3 年次生の授業の一環に位置づけ、全生徒が制作に関わる体制をとっている。今年度は 3 年次生全員が動画を制作し、その中から 5 名の生徒の作品を AJCC に投稿した。投稿にあたっては、卒業後に介護現場への就職を希望している生徒の作品を優先している。動画制作は 2～3 人の共同制作を基本とし、教員の関与は最小限にとどめ、生徒の創意工夫を重視して進められている。

●参加の意義

・**実技評価の機会としての位置づけ：**介護福祉士資格取得試験において実技試験が廃止された状況の中で、AJCC の実技コンテストは、実技力を確認・評価する貴重な機会であると捉えている。

・**介護専門職養成における学習意義：**実技を伴うコンテスト形式は、介護福祉士養成において重要な教育的価値を持つと認識している。

・**体験を通じた職業理解の深化：**制作過程でケアの実際を体験することにより、介護職のやりがいや魅力を実感する機会となっている。

●活動のプロセス

・**生徒主体の検討と制作：**設定課題の検討や表現方法については、生徒が主体となって創意工夫を行っている。

・**学校による環境整備：**撮影に必要な設備・備品は学校が整備し、授業時間内で比較的短時間に撮影を行っている。

・**多忙な時期での並行実施：**3 年生介護実習後、実習報告会準備や福祉高校介護技術コンテスト（中国地区大会）準備と並行して取り組んだ。

●期待される成果

・**実技体験による学習意欲の向上：**多くの生徒が実技コンテストを見る機会を持たない中で、動画制作を通じて実技を体験することは大きな意義があり、授業へのモチベーション向上につながっている。

・**職業意識の形成：**介護職の仕事のやりがいや魅力を実感することで、将来の進路選択への意識が高まっている。

・**評価コメントによる成長促進：**応募作品に対する評価コメントが、生徒の自己理解や学習意欲の向上に寄与している。

●要望・改善点

・**実技理解を深める機会の充実：**リアルな大会見学や実技コンテストの参考動画など、実技を具体的にイメージできる機会を増やしてほしい。

・**課題内容の多様化：**動画投稿コンテストの設定課題を増やし、より多様な実技を経験できるようにしてほしい。

・**スケジュールと手続きへの配慮：**動画投稿の締切が施設実習後の多忙な時期と重なっているため、余裕のある日程設定や投稿手続きの簡略化を望んでいる。

・**フィードバックの表現への配慮：**評価コメントの中には厳しく分かりにくいものもあり、生徒のモチベーション低下につながらないよう配慮が求められる。

事例 7 「分かる」「できる」を超えたトータルなケアの実現力の向上

養成校名：同朋大学　社会福祉学部

所在地：名古屋市

学校の理念：「同朋和敬」（共なるいのちを生きる）

●活動の概要

同朋大学社会福祉学部では、令和 5 年から AJCC の動画投稿コンテストに参加しており、今年度で 3 年目を迎えている。本学では AJCC を、介護技術や技能を競うコンテストではなく、利用者理解を基盤と

した「ケアそのもの」を評価するケアコンテストとして位置づけている。

分野別に設定された課題には、利用者の ADL や認知の状態等が示されており、学生は公開されている評価基準を踏まえたうえで、利用者にとって最適なケアをどのように実践として表現するかを考察することが求められる。このように、「分かる」「できる」といった知識や技能を超え、トータルなケアの実現力が問われる点に、本コンテストの教育的意義を見出し、学生の主体的参加を奨励している。

●参加の意義

- **ケアの本質を問う学習機会：**AJCC は介護技術士を養成する場ではなく、介護福祉士としてケアをさらに極め、共創する場であると捉えている。
- **実践力・実現力を育む教育的価値：**知識や技能の習得にとどまらず、利用者にとって意味のあるケアを実現する力を養う点に大きな意義がある。
- **大学教育における専門性の深化：**介護の専門性を大学で学ぶ学生にとって、創造的にケアを考える経験は極めて重要である。

●活動のプロセス

- **自主的意思を尊重した参加形態：**動画投稿コンテストへの参加はカリキュラム化せず、学生の自主的意思による参加を原則としている。
- **学校による周知と調整：**授業等でコンテストの意義を周知し、参加希望者の取りまとめは学部として行っている。
- **学生主体の研究・制作活動：**設定課題の読み込み、シナリオ作成、動画撮影までを学生の自主的研究活動として位置づけ、共同研究の形で取り組んでいる。
- **高齢者役を含めた学習経験：**高齢者役も学生が担い、役割を演じる体験を通じて、介護を受ける側の気持ちへの理解を深めている。

●期待される成果

- **多面的な学びと気づきの創出：**実技を行う学生だけでなく、高齢者役を担う学生にとっても、ケアのあり方を考える多くの学びが得られている。
- **実践能力の可視化：**動画コンテストへの参加は、本学学生の介護実践能力を社会に示す機会となっている。
- **創造的思考を伴うケア実践力の向上：**動画制作プロセスを通じて、試行錯誤を重ねながらケアの実践力を高めることができている。

●要望・改善点

- **社会的評価のさらなる向上への期待：**参加や受賞の実績が、介護専門職の社会的評価につながるよう、履歴書に記載できる形での認知拡大を期待している。
- **審査区分のさらなる細分化：**高等学校と大学・専門学校の区分が設けられた点は評価しており、今後は大学と専門学校の区分も検討してほしい。
- **参加校間の交流機会の創出：**動画投稿コンテスト参加校同士が交流できる場や機会が設けられると、より有意義な学びにつながると考える。

事例 8　コンテストという形式で生まれる緊張感が、真剣に学ぶ一つのきっかけ

養成校名：田原福祉グローバル専門学校

所在地：愛知県　田原市

学校の理念：地域に貢献できる人間性豊かな介護福祉士の養成

本校は、生命の尊重と人間の尊厳を基本に、個々の多様な福祉ニーズに深い認識とすぐれた技術をもって、総合的に応えることのできる人間性豊かな福祉実践専門家の育成に努力する。

●活動の概要

田原福祉グローバル専門学校では、第 13 回大会から AJCC の動画投稿コンテストに参加している。参加の背景には、系列法人である社会福祉法人福寿園が従前から AJCC に関わってきた経緯があり、コンテスト参加が学生の学びにつながるとの考えに基づいて自然な形で取組みが始まった。

参加対象は 2 年次生に限定しており、2 年次進級後に周知しているが、先輩から話を聞いている学生も多く、学園祭や地域行事を通じた縦のつながりが参加を促している。選手は事務長と指導教員による推薦を基本に選考され、短期間の準備期間の中でも、学生主体で取組みを進め、教員は見守りと声掛けを中心とした関わりにとどめている。

●参加の意義

- **緊張感を伴う学習機会の創出：**コンテストという形式がもたらす適度な緊張感が、学生が介護に真剣に向き合うきっかけとなっている。
- **実践的学習時間の確保：**授業や試験対策の制約の中で、介護について考え、試行錯誤する時間を意図的に増やす機会となっている。

●活動のプロセス

- **教員推薦による選手選考：**授業や実習での態度を踏まえ、コンテストに挑戦できるマインドを重視して選考を行っている。
- **短期間・学生主体の取組み：**準備期間は 1 週間から 10 日程度と短いが、進め方は学生に任せ、教員は必要最小限の支援にとどめている。
- **選手以外の学生への学習展開：**動画投稿後には取組内容を報告し、設定課題に類似した事例検討を行うことで、選手以外の学生にも学びを広げている。

●期待される成果

- **学生の態度変化：**介護現場でアルバイトをしている学生において、声掛けが丁寧になり回数も増えるなど、行動面での変化が見られている。
- **実習評価への好影響：**介護実習先からも、接し方がやさしくなったとの評価を受けており、学習成果が現場に波及している。
- **多様なケアへの気づき：**他校の動画を学生と教員で視聴・意見交換することで、介護には一通りではないことを実感する機会となっている。

●要望・改善点

- **撮影方法に関する改善要望：**指定された撮影アングルでは必要な場面が十分に捉えられない不安があり、改善を望みたい。
- **課題設定の工夫への評価と期待：**設定課題が 2 つになったことで、学生が独自に考えやすくなった

点は評価しており、今後も継続的な検討を期待している。

・**利用者役設定の充実：**利用者に関する知識や条件がより明確になることで、支援を考える幅が広がると考えている。

4. アドバイザー及び高齢者役の関わり・活動とその成果

～評価指標に基づき、「良質な介護」を方向づけ、引き出す

本節では、ケアコンテスト（AJCC）において重要で多様な役割を担うアドバイザー及び高齢者役の関わり・活動とその成果について検討し、整理する。本大会（AJCC2025）では、統括アドバイザーの新津ふみ子氏（特定非営利活動法人メイアイヘルプユー代表理事）のもとでケアコンテストの 7 分野・15 部門において各 2 名のアドバイザー、動画投稿部門に 4 名のアドバイザーが関わり、活動している。動画投稿部門の一部アドバイザーが実技コンテストのアドバイザーを兼務しており、全体で 32 名であった。

一方、高齢者役は、実技コンテストにおいて、設置課題のなかで選手が行う実技の相手役であるが、本大会（AJCC2025）では、7 部門 15 部門で各 1 名～2 名が担当し、全体で 22 名であった。

本節に関わるアンケート及びヒアリングの実施内容は以下の通りである。

■アドバイザー及び高齢者役に関わるアンケート及びヒアリング調査

選手アンケート（コンテスト後）調査 （以下、「選手事後アンケート」と言う）	・参加選手 148 名を対象とする Web アンケート。 ・10 月 14 日に発信し 10 月 27 日までの回答。 ・有効回答率 50.0%。
選手ヒアリング（コンテスト実技後）調査 （以下、「選手実技後ヒアリング」と言う）	・ケアコンテスト分野・部門各 1 名以上。 ・専門調査員による直接ヒアリング ・10 月 4 日のケアコンテスト当日（実技終了選手を対象） ・43 名に声掛け全員が応諾。有効回答率 100%。
高齢者役アンケート調査 （以下、「高齢者役アンケート」と言う）	・高齢者 20 名を対象とする Web アンケート。 ・10 月 14 日に発信し 10 月 27 日までの回答。 ・有効回答率 72.7%。

＊自由回答については、主な回答について親和性を基準にカテゴリー区分した結果である。

＊各アンケート及びヒアリングの集計図表では、Web 集計の番号・質問項目をそのまま表記した。
本報告書の巻末に参考資料として掲載したアンケート及びヒアリング用紙を参照してほしい。

（1） アドバイザーが策定する設定課題と評価指標

アドバイザーは、実技や動画コンテストの設定課題の策定、評価指標の構築に責任を担い、実技コンテストにおいて「審査員」及び「助言者」としての役割を果たしている。重要な役割である。

本大会（AJCC2025）では、実技コンテストの 7 分野、午前・午後の設定課題及び評価項目、動画投稿 2 分野の設定課題及び評価項目を策定し、選手に事前送付している。本節では、実技コンテストの「排泄分野（午前）」「認知症（午前）」「外国人介護職員（午後）」、動画投稿コンテストの「食事部門」の設置課題及び評価項目について掲載している。評価基準は、「良質な介護」を誘引する指標となるものである。

●アドバイザーが策定する設定課題・評価指標

2025AJCC設定課題　　分野：排泄

分野	排泄_午前

1・高齢者役設定データ

鈴木さん　（男性　８０歳　要介護４　障害高齢者日常生活自立度B2　認知症高齢者日常生活自立度ⅡB）は特別養護老人ホームで生活をしています。脳梗塞後遺症による左上下肢の麻痺、睡眠障害とめまいがあります。
鈴木さんはとても神経質な方で、特に排便に強いこだわりがあります。毎日規則的に排便がないと１日中イライラされます。鈴木さんは、昼間はトイレを使用します。たまに便失禁してしまうこともあるので、本人の希望でポータブルトイレを使用することもあります。

２・課題

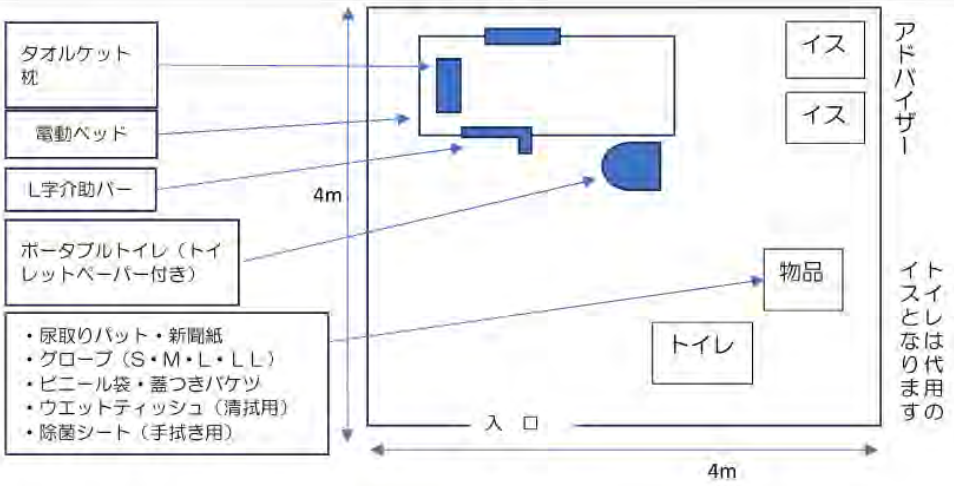
モーニングケア後、居室のベッドで休んでいます。今日はまだ排便がないと少しいら立っており、下剤が欲しいとコールがありました。
その後便意をもよおしたとコールがありました。排泄ケアを行い、ベッドに端座位になるまでの支援を行ってください。

3. 追加情報

※ベッドサイドにポータブルトイレが設置されています。
※嘱託医から、「排便に対してこだわりがあるので、希望時は嘱託医処方の薬を飲ませても良いです」と言われています。
※動作がゆっくりで、立ち上がり、方向転換、ズボンの上げ下げに介助が必要です。
※尿意・便意曖昧です。（リハビリパンツとパット使用しています。）

	4. 評価項目	時間
①	高齢者の意向や意思を尊重していた	10分
②	利用者の特性に応じたコミュニケーションを実施していた	
③	健康状態に配慮した安全な介助が行なわれていた	
④	自立支援に配慮した介助が行なわれていた	
⑤	衛生面への配慮をした	
⑥	不必要な露出を避け、プライバシーに配慮した介助ができた	
⑦	終始気兼ねなく頼める雰囲気になっていた	

5. 配置



2025AJCC設定課題　　分野：看取り

分野	看取り_午前

1･高齢者役設定データ

佐伯様　女性　92歳　要介護3　入居して2週間
既往歴：変形性質関節症、腰椎圧迫骨折、慢性心不全
生活歴：結婚して子供3人を設けた。その子供たちも独立し世帯を構えている。子供が自立した後、夫婦2人で暮らす期間が長かった。その配偶者も亡くなり、単身生活が10年になる。なお、長男は本人の家から車で15分ぐらいのところに居住し、相互の関係は良好。
現状：在宅生活は、小規模多機能型居宅介護サービスの利用で、長男に物理的な介護負担はかけずに来ていた。独立心の強い人で、自力でできることはできるだけやってみるという性格。その結果、移動時に屋内での転倒を複数回経験する。これが契機となり、自ら特養入所を決断する。

2・課題

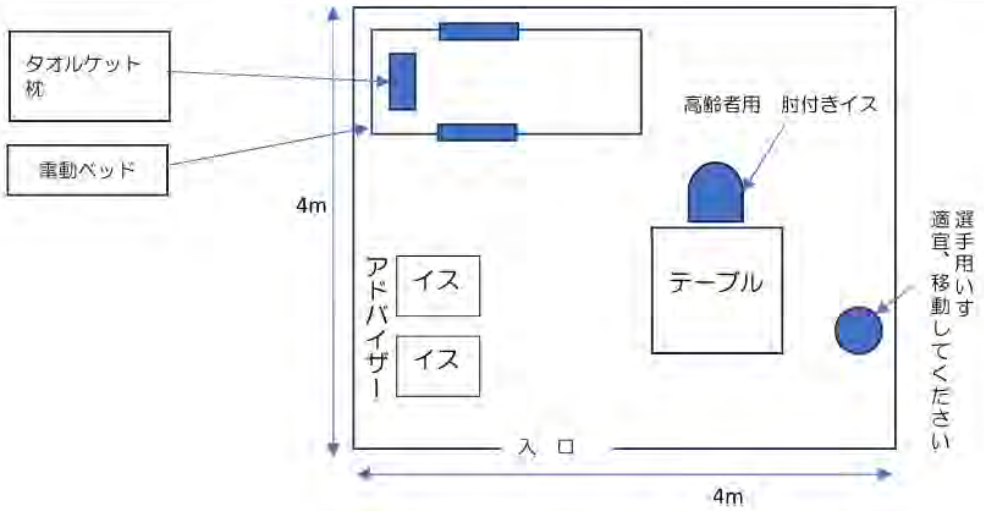
本人から今後の生き方、過ごし方についての意向を、ACPの考え方を取りいれて聴取してください：本人の気落ちの共有、今日をどのように過ごしたい、明日はどうしたい。やっておきたいこと等。

3. 追加情報

※特養入居前まで在宅で単身生活をしていた
※聴取の場面は、横になっている本人に声をかけて起きてもらい、テーブルの椅子に座ってもらい、落ち着ける場面設定の中で話を進める。

	4. 評価項目	時間
①	安楽の状態の確認が出来ていたか	10分
②	本人の想いを聞くことができた	
③	本人の想いを受け止める対応をした	
④	③で出された思いを実現できるような働きかけをしていた	
⑤	本人が「やっておきたいこと」「大切にしていること」を表出することができた	
⑥	今の生活において気力、意欲が持てるような働きかけをしていたか	
⑦	話に耳を傾け、ゆったりした態度で接していたか	

5. 配置



2025AJCC設定課題　　分野：外国人介護士

分野	外国人_午後

1・高齢者役設定データ

佐藤さん　85歳　要介護2　体重減が気になる(155ｃｍ　35kg)
障害高齢者の日常生活自立度Ｂ1　認知症高齢者の日常生活自立度Ⅱａ
10年程、夫の介護をしていた佐藤さんは、2年前に夫を亡くし、以降、気力の低下から何事にも取り組むことなくベッド上で過ごすことが多くなりました。在宅診療医は廃用症候群と診断。下肢機能の低下から歩行状態が不安定で、認知機能の低下も顕著です。日々の食事の興味も薄れて、進んで食事や水分を口に運ぶことはなくなりました。歯科衛生士や理学療法士、ホームヘルパーが定期的に訪問し、機能訓練や口腔ケアが行われています。食事・水分の摂取に関して、幾分成果を挙げつつあります。

2・課題

おやつの時間が近いので、ホームヘルパーさんはお風呂上がりの佐藤さんを車いすで居間に移動し、おやつと水分摂取の介助をしてください。

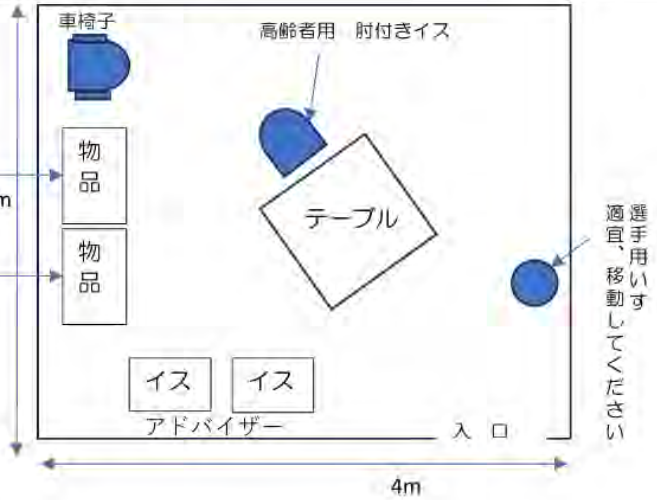
3. 追加情報

※会話はゆっくりなら可能です。
※ここ数か月、食べ物も水分も自分から手にすることはありません。
※ご自分で座位姿勢を直すことはできますが完全ではありません。

	4. 評価項目	時間
①	意向や意思を尊重していた	10分
②	安全な食環境づくりをしていた	
③	安全なおやつの提供ができていた	
④	自立支援への配慮で、協力を得ながら介助が行なわれていた	
⑤	これから行う介助の説明と同意、声かけの位置が適切にできていた	
⑥	おやつを取る前のコミュケ-ションが行われていた	
⑦	佐藤さんの満足が得られた	

5. 配置

・おやつ(カステラ、水ようかん)
・トレイ（盆）
・2Ｌペットボトル緑茶
・森永乳業エンジョイすっきりクリミールジュレ
・ハンドタオル
・フェイスタオル
・スプーン
・ストロー
・スプーンを入れる容器
・コップ
・自助食器
・手指消毒液
・アルコール抗菌シート
・オシボリ
・ティッシュ
・クッション



2025AJCC設定課題　分野：動画撮影投稿

分野	動画撮影投稿(食事)

1・高齢者役設定データ
山本さん　90歳　要介護2　障害高齢者日常生活自立度A2　認知症日常生活自立度Ⅱb　レビー小体型認知症と診断 環境が変化する時、食事中に、幻視が見られる。「虫が気になるの」「虫は嫌」「虫を外に出して」等という。週３回のデイサービス利用。 福祉用具は使用せず、歩行している。パーキンソン症状あり、最近は突進歩行とすり足歩行になっている。食事は利き手の右手を使う。 会話は言葉のみで声かけされても、直ぐに理解が難しい時がある。昔からゆっくりとよく噛んで食事する。はし、スプーン等、使用できます。 甘いものが昔から好き。虫が気になると、食事に集中できない。食事介助されると嫌がります。最近、水分や食事の摂取量が低下傾向。
2・課題
最近、手持ち無沙汰で居室で寝ることが多く会話が少ないです。おやつの時間になりましたので、居室からホールに誘導してください。 その際、認知症の高齢者への対応や残存能力の活用、衛生面にも配慮してください。

	3．評価項目	時間
①	高齢者の状態を理解し、本人の意向や意思を尊重していた	7分
②	高齢者の心身の状況に応じて、おやつが安全に食べられる環境づくりをしていた	
③	高齢者の心身の状況に応じて安全なおやつの提供ができていた	
④	自立支援への観点として高齢者の協力を得ながらケアが行なわれていた	
⑤	これから行なうケアの説明、声かけの位置が適切に行なわれていた	
⑥	高齢者の気持ちを理解し、おいしくおやつができる雰囲気になるよう、コミュケ-ションが行われていた	
⑦	高齢者の安心感と満足が得られた	
⑧	実技者の実技に対してのコメント（実技についての留意点などの振り返りをご説明ください）	3分以内

4．準備品目	
おやつ	和菓子系（お饅頭・水ようかん等）　洋菓子系（ゼリー・プリン等）なんでもよいです。
選択水分	お茶・水・ゼリー茶・紅茶・コーヒー　なんでもよいです。
準備品目	容器・スプーン・エプロン・タオル・足置き台など　対象者をアセスメントして準備する。なんでもよいです。

5．配置

開始時、高齢者着座位置

高齢者状況

※レビー小体型認知症に伴い、幻視があります。

※課題の対象者をしっかりと利用者役は演じてください。

※おやつ前の口腔ケア体操、リハビリテーションは
　既に終了しています。

※食事中、口の中に溜め込み、時折咽ることがあります。

※歩行速度はゆっくり、突進歩行、すり足歩行が特徴。

・カメラは、椅子への移乗、食事介助の一連の動作が確認出来るようにしてください。
・各事業所設備仕様により撮影アングルについては調整ください。
・食事介助者の椅子の位置は任意で設定ください。
・準備品目の食事内容については、実際の食事に限らず、食器類だけでの対応でも可能です。
・準備品目等の配置については、各事業所で行われる任意の設定としてください。

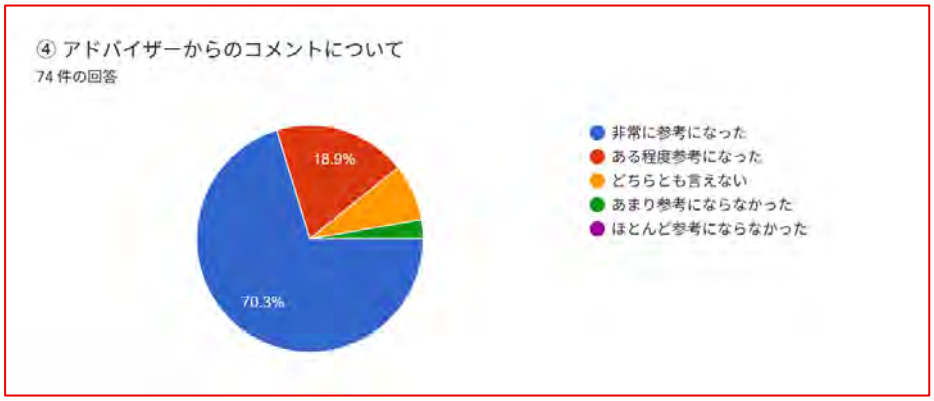
設定課題及び評価指標は、各分野別にアドバイザーが協議し、決定している。選手は、事前に送付される出場分野（午前もしくは午後）の設定課題及び評価基準に基づいて事前準備を行うことになる。評価の指標は、分野別に異なる表現ではあるが、利用者の尊厳の保持、意向の尊重、安全・安心を押さえ、ニーズ及び意向に則して根拠（エビデンス）に基づく介護の実践を求める内容になっている。このことは、コンテストの場において選手が、評価基準が示す「良質な介護」を創造するという活動を誘引する役割を果たしているとみることができる。設定課題の研究は、利用者理解につながるものであり、実技は「良質な介護」をめざす活動であるということができる。

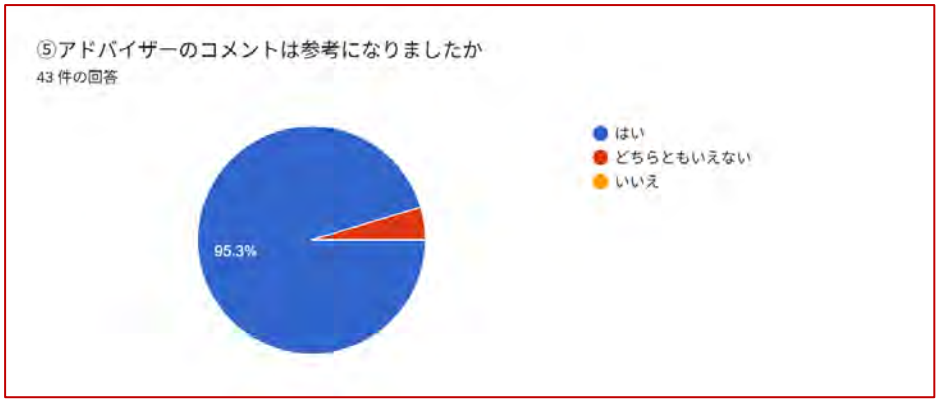
また、アドバイザーは、評価指標に基づく選手の実技を公平に評価し、選手一人ひとりには、実技の「良さ（改善点）とその根拠」をフィードバックすることになる。極めて重要な役割を果たしていることになる。従って、AJCC のアドバイザーは、介護に関する学識研究者や日本介護福祉士会の認定介護福祉士等がその役割を担っている。

（2） アドバイザーコメントについて

実技コンテストでのアドバイザーコメントについて「選手事後アンケート」結果でみると、「非常に参考になった」が 70.3%、「ある程度参考になった」18.9%であった。「選手ヒアリング」結果では、43 名のヒアリング対象の 95.3%の選手が「参考になった」の回答であった。

「選手実技後ヒアリング」では、多くの選手が「良い点の具体的指摘や肯定的評価が励みになった」「改善点の指摘が分かり易く、実務に役立つと感じた」「新たな視点・気づきが得られた」「今後のケアに活かしたい」など具体的な理由を述べており、ケアコンテストにおけるアドバイザーによる評価とアドバイザーコメントが、重要な意味をもっていることが分かる。





●アドバイスコメントについての選手の受けとめ（「選手実技後ヒアリング」結果）

（主なヒアリング内容）

ⅰ．良い点の具体的指摘や肯定的評価が励みになった

・自分のケアの方向性を理解し、良い点を言葉で示してもらえて自信につながった。

・利用者への選択肢の提示や説明、コミュニケーションを褒められ、日頃の支援が間違っていなかったと感じられた。

・「丁寧だ」と言われて励みになった。

・「このコメントが欲しくてきた」と言えるほど参考になり、認めてもらえたことが嬉しかった。

・良い場面（本人の趣味に触れる会話など）を具体的に評価してもらい、やりがいにつながった。

ⅱ．改善点の指摘が分かり易く、実務に役立つと感じた

・ベッドや車椅子の高さ調整、立位介助時の立ち位置など、技術的ポイントが明確で参考になった。

・早口・声かけのタイミング・“待つ姿勢”の重要性など、コミュニケーション面の改善点が理解できた。

・手袋の着用忘れなど、具体的なミスを指摘され、今後に生かせると感じた。

・利用者の心身理解や ACP の流れについて助言があり、大きな学びとなった。

ⅲ．新たな視点・気づきを得られた

・「疲れてないですか？」ではなく「気持ち良いですか？」など、ポジティブな声かけの重要性を初めて知った。

・失認・失行のある方には過度な声かけを控えるという視点が「目からうろこ」だった。

・利用者の言葉への深い理解・共感の示し方を改めて学ぶ機会になった。

・利用者の病気理解や、その人の“生き方・亡くなり方”まで見据える視点を学べた。

・もともとコミュニケーションが苦手で、傾聴に時間をかけすぎたことを指摘され、反省した。

・利用者役への共感や関わり方に関するコメントが印象に残った。

ⅳ．コメントを今後のケアに活かしたい

・「今後はアドバイスを意識して支援したい」と感じた。

・実技中に“しまった”と思った点を的確に指摘され、改善に取り組みたいと思った。

・日頃の支援の振り返りに役立ち、実務でも活用したい。

・コメントを参考に、より丁寧で利用者に寄り添うケアを目指したい。

ｖ．参考にはなったが、より具体的説明が欲しかった

・おうむ返しの対応について「共感的ではない」と言われたが、どうすれば良かったのか具体例が欲しかった。

・「息子さんが来る」という言葉への否定を受け、理由がわからず混乱した。

・設備や福祉用具が普段と異なり、助言を十分に生かしにくかった。

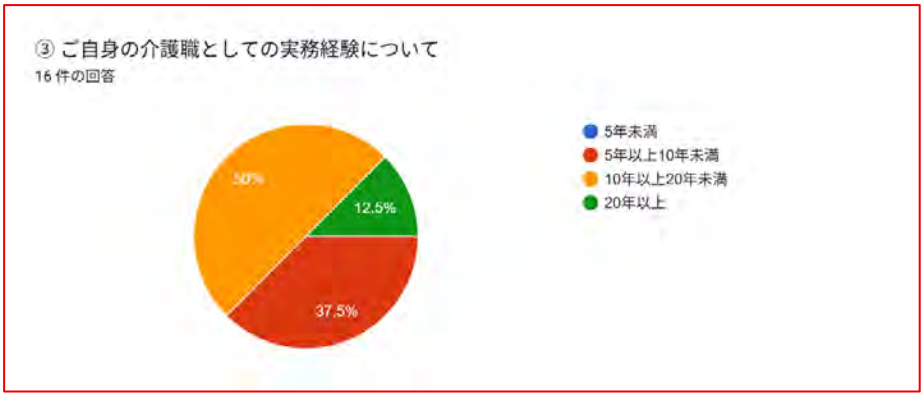
・もっと具体的な解説や模範例があると理解しやすかったと感じた。

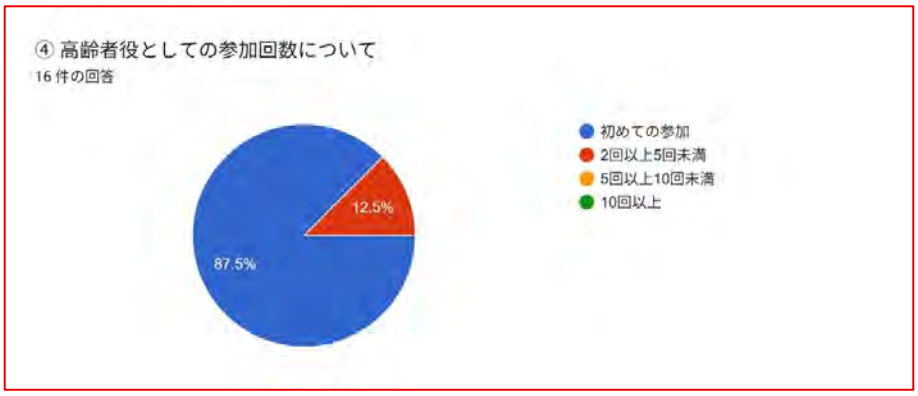
（3） 高齢者役の関わり･活動とその成果

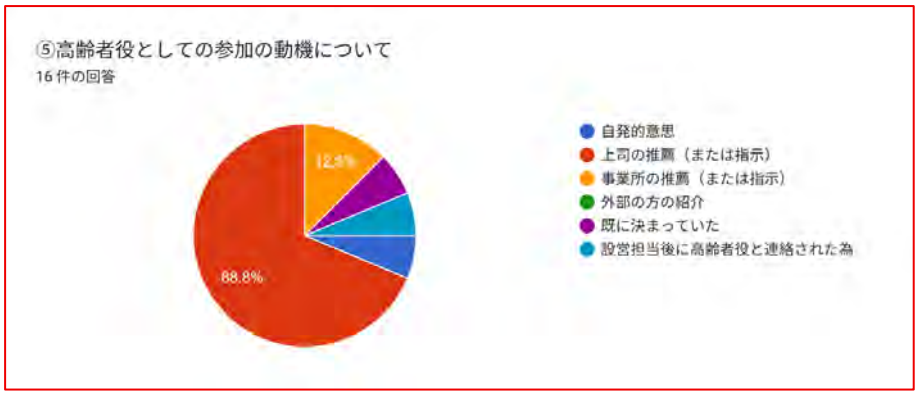
① 高齢者役の属性

本調査研究では、ケアコンテストにおける高齢者役の役割の重要性に着眼し、「高齢者役アンケート」を実施した。高齢者役は、選手の実技の相手役（利用者役）であり、設定課題が示す「いま」「ここで」の個別ケアとして「良質な介護」を共に実現するという極めて重要な役割を担っている。

アンケートの結果から、高齢者役の属性を見ると、介護職の実務経験については、「20 年以上」12.5%、「10 年以上 20 年未満」50%、「5 年以上 10 年未満」37.5%で、介護経験豊富な方々であった。高齢者役としての参加回数は、「初めての参加」87.5%、「2 回以上 5 回未満」12.5%で、参加の動機については、「上司の推薦（または指示）」68.8%、「事業所の推進（または指示）」12.5%であった。



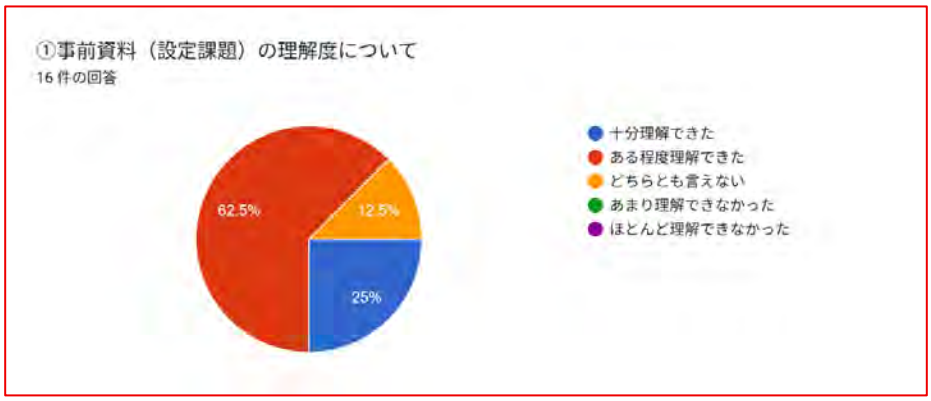


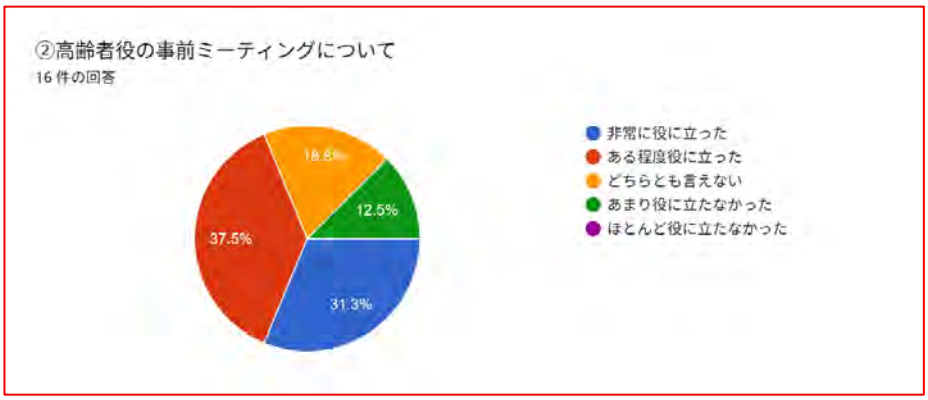


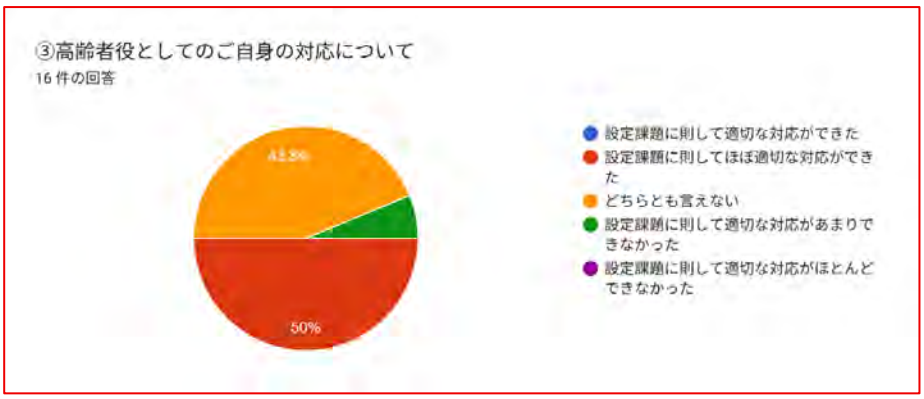
② 高齢者役としての活動とその成果

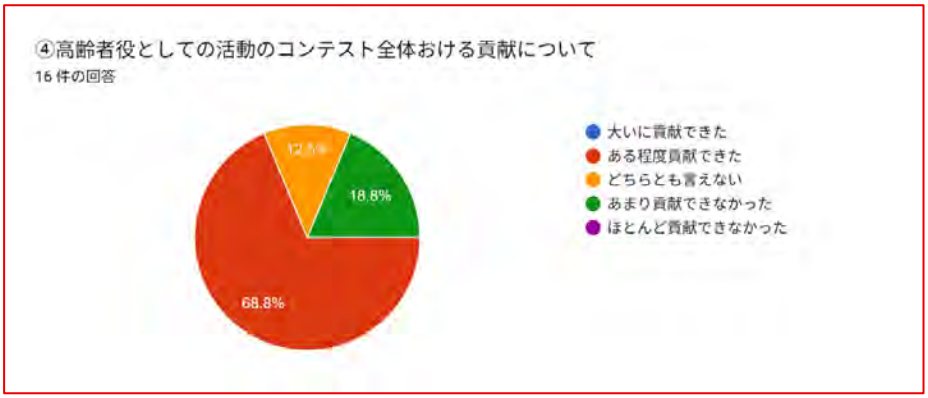
高齢者役の活動について、事前資料（設定課題）の理解度については、「十分理解できた」25%、「ある程度理解できた」62.5%の回答。アドバイザーとの事前ミーティングについては、「非常に役に立った」31.3%、「ある程度役に立った」37.5%で、「どちらとも言えない」18.8%、「あまり役に立たなかった」が12.5%であった。

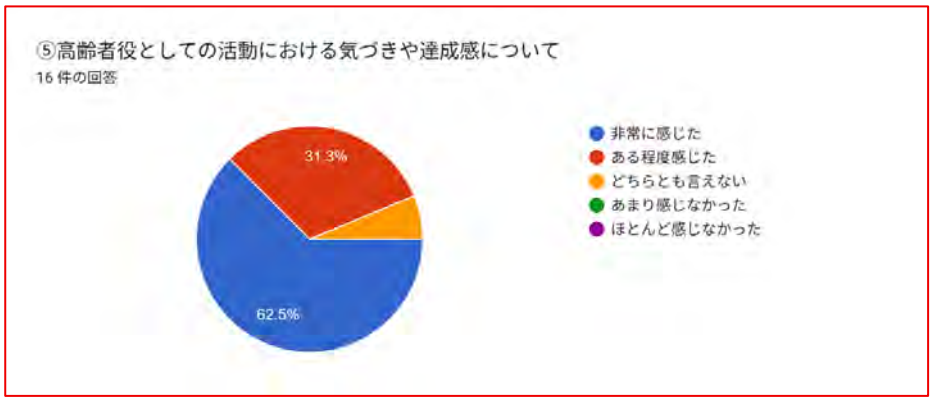
そのうえで、高齢者役としての自身の対応については、「設定課題に則してほぼ適切な対応ができた」が 50%、「どちらとも言えない」43.8%、コンテスト全体に「ある程度貢献できた」68.8%、「どちらとも言えない」12.5%、「あまり貢献できなかった」が 18.8%であった。高齢者役として活動における気づき・達成感は「非常に感じた」62.5%、「ある程度感じた」31.3%であった。











●高齢者役を務めた中で印象に残った体験やエピソード（「高齢者アンケート」結果）

（主な回答）

ｉ．介護される側の視点から得られた気づき・学び

・声掛けや関わり方の違い一つで、受け手としての印象が大きく変わることを実感した。高齢者役としてケアを受けることで、「こうしてほしい」「こうしたらもっと良い」と感じる点が明確になり、今後の研修や実践に生かせると感じた。

・選手の介助を受けながら、「もっとこうすれば良いのに」と気づくことがあり、自分ならどのように対応するかを考える時間になった。

・実際にケアを受けることで、口腔内の神経の敏感さを強く感じ、普段のケアの配慮の重要性を再認識した。

・排泄介助を実際に受け、ズボンやおむつを下ろされる感覚を体験したことで、高齢者の目線で受けるケアをよりリアルにイメージできた。

ⅱ．介護者（選手）の姿から得られた感動や学び

・選手が懸命にニーズを引き出そうとする姿に、ほほえましさや応援したい気持ちが湧いた。「高齢者も日々こんな気持ちで介護者を見ているのかもしれない」と感じ、新しい視点を得た。

・5 名の選手を担当したが、人柄もよく、コミュニケーション技法が高く、個性豊かな関わりに多くの学びを得た。

・選手の経験に基づくコミュニケーション、排泄介助技術を通して、施設での対応の質を肌で感じることができた。

ⅲ．高齢者役としての責任の重さ・役割意識

・高齢者役として参加するに当たり、設定に合わせて「年表」を作るなど、人物像づくりに力を入れた。家族への思い、生活歴、今抱えている不安などを自分に叩き込み、一貫した高齢者像で選手と関わった。

・自分の対応一つで選手の結果が変わる可能性がある。大きな責任を感じながら役割を務めた。

ⅳ．その他

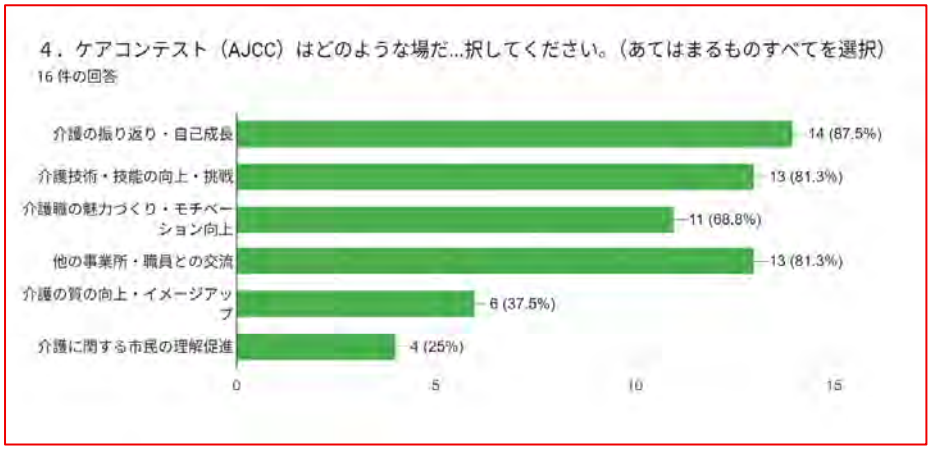
・各選手の個性豊かなコミュニケーションに接し、高齢者役の立場から多様性と学びの深さを感じた。

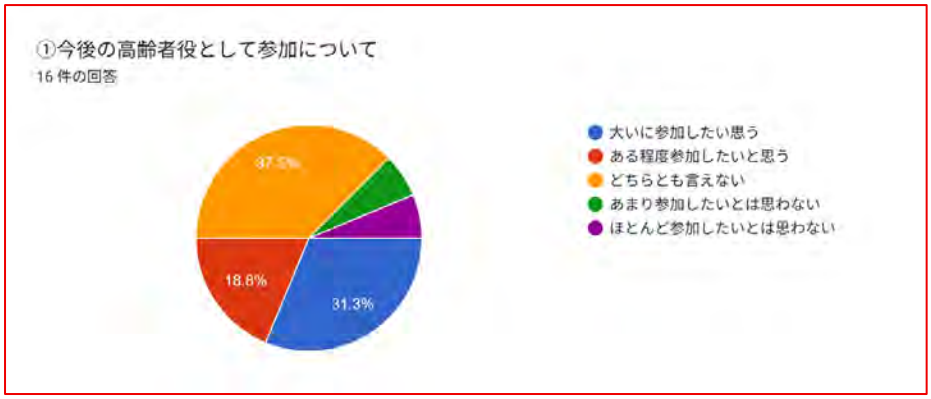
（4） 高齢者役としての参加とこれから

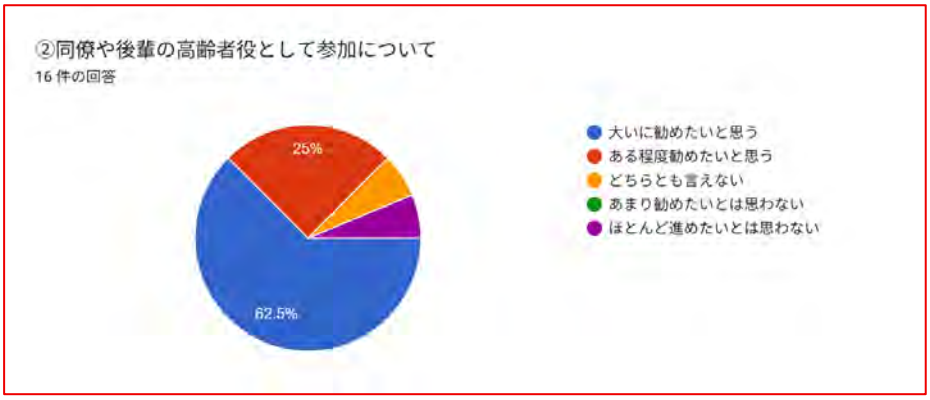
① AJCC の意義について

高齢者役として AJCC の意義については、「介護の振り返り・自己成長」87.5%、「介護技術・技能の向上・挑戦」「他の事業所・職員との交流」81.1%、「介護職の魅力づくり・モチベーションの向上」68.8%であった。

今後高齢者役としての参加について、「積極的に参加」は、「自身について」が 31.3%、「同僚や後輩について」は 62.5%であった。（「高齢者役アンケート」結果）



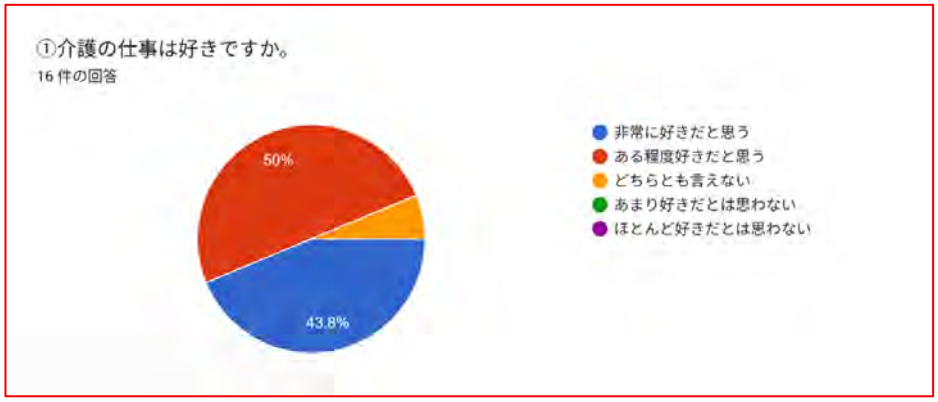


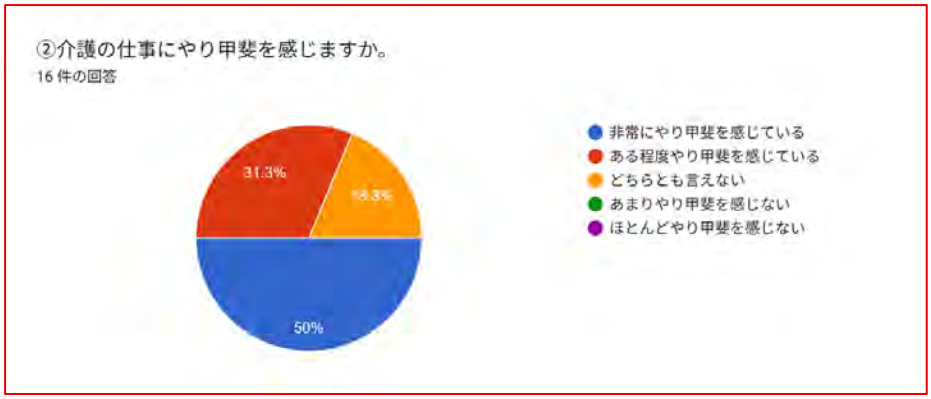


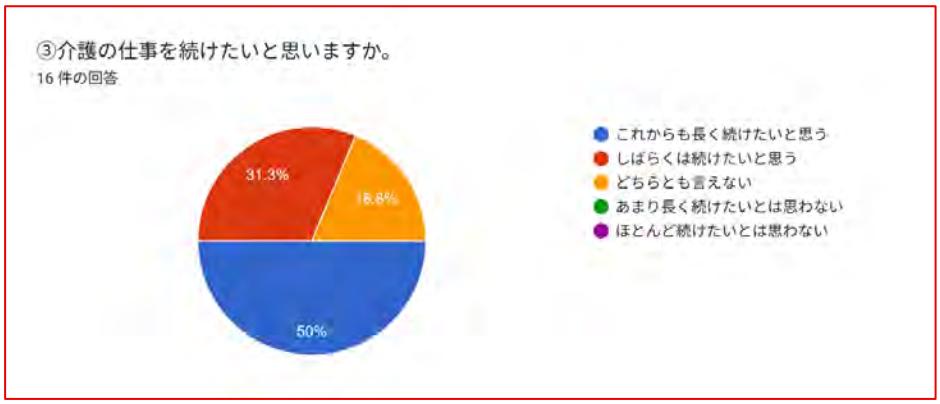
② 介護に関する認識について

「高齢者役アンケート」では、介護の仕事について尋ねた。「介護の仕事が好きか」どうかについては、「非常に好きだ」43.8%、「ある程度好きだ」50%で「好きだ」の回答が 93.8%。「やり甲斐を感ずるか」については、「非常にやり甲斐を感じる」50%、「ある程度やり甲斐を感じる」31.3%、「介護の仕事を続けたいと思うか」については、「これからも長く続けたいと思う」50%、「しばらくは続けたい」31.3%の回答であった。

介護の仕事をさらに魅力あるものにするために、介護への思いを尋ねた。その内容である。







●介護の仕事をさらに魅力あるものにするために（「高齢者役アンケート」結果）

（主な回答）

ⅰ．処遇・待遇の改善

・全体的に意識を向上させ、賃金をアップさせることが必要であると思う。

・一般職と同等の給与、盆暮れなく働く職員への労いが必要である。

・「辛い・きつい」というイメージを無くし、給与を上げることが重要である。

・利用者のみならず、介護従事者にも尊厳があることを理解する必要がある。

ⅱ．職場づくり・組織的取組みの促進

・質の高い職場環境の整備が必要であると感じる。

・法人の取り組みを現場単位で理解し進めていくことが、介護を魅力あるものにする一つの取組であると思う。

・事業所の種類や立場によって視点が偏りがちであり、互いの役割を理解・共有し、対象者の目線で考え続けることが必要であると思う。

・介護はネガティブなニュースが先行しやすいが、ポジティブなストーリーや創意工夫を発信し続けることで、介護職がより魅力的に映ると考える。その一つとして AJCC が役割を果たしていると思う。

ⅲ．人材育成・学びの機会を広げること

・先輩から後輩への技術伝達と、そのうえで得られる成功体験と喜びが重要であると思う。

・介護には答えがなく、思ったことを実践できる“無限の可能性がある職業”であると感じる。

・介護職員と、これから介護を目指す人や興味を持つ人が、仕事やライフスタイルを語り合える場があると良いと感じる。

ⅳ．地域や社会への発信・学びの機会を広げること

・各施設の多様な取り組みを見てもらえる機会が必要であると思う。
・介護職員・福祉関係者向けのセミナー等で、業界の将来を考える機会を増やすべきだと思う。
・一般や学生向けに、介護する体験・介護される体験ができるイベントがあればよいと感じる。
・介護に関わらない人でも触れられるメディアでの発信・アピールが必要であると感じる。
・子どもたちから憧れられる職業となるよう、積極的な地域交流や異業種連携、社会活動を進める必要があると思う。

6. 大会来場者の関心とその評価

～介護の現任者、そして未来の利用者と担い手

本大会（AJCC2025）の来場者は、1,500 名ほどであった。主催団体や選手及び選手派遣事業所関係者、養成校の学生やボランティア、そして一般来場者である。ここでは、「来場者アンケート」の結果から、来場者の介護に関する関心と具体的関心事項、ケアコンテスト（AJCC）の評価について整理した。

来場者を対象としたアンケートは以下の通りである。

■アンケート及びヒアリング調査の実施

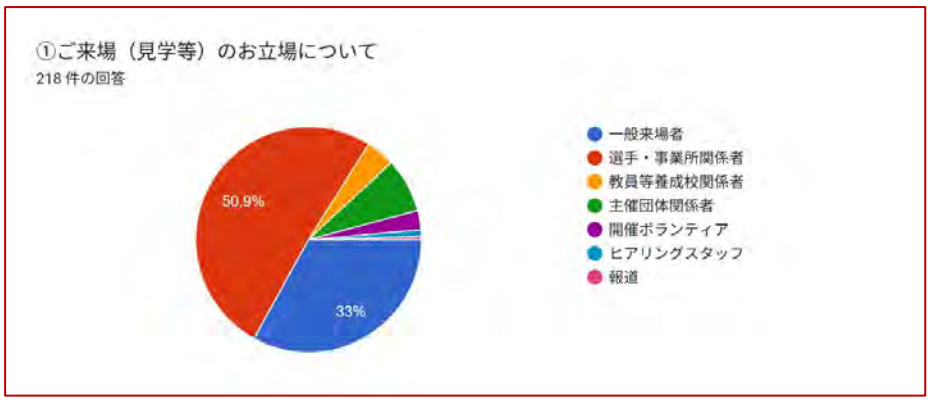
来場者（当日）アンケート調査 （以下、「来場者アンケート」と言う）	・来場者を対象とするアンケート。 ・10 月 4 日会場にてアンケート用紙を配布。プログラムに Web アンケートの QR コードを表示。 ・回答者 218 名。

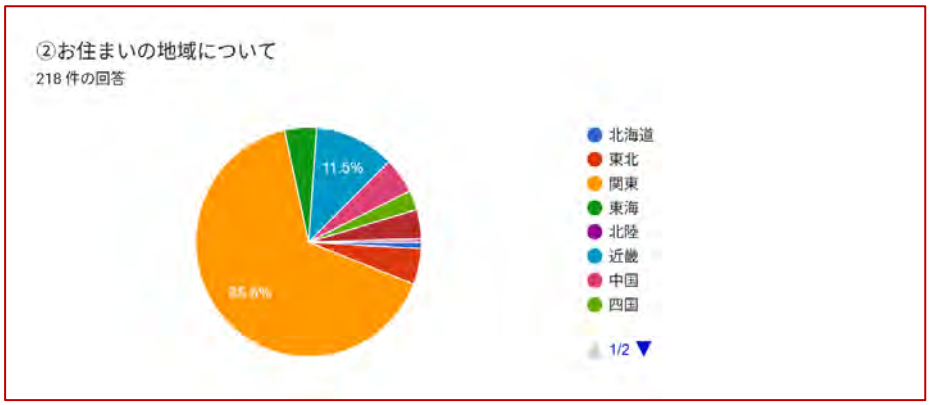
＊自由回答については、主な回答について親和性を基準にカテゴリー区分した結果である。

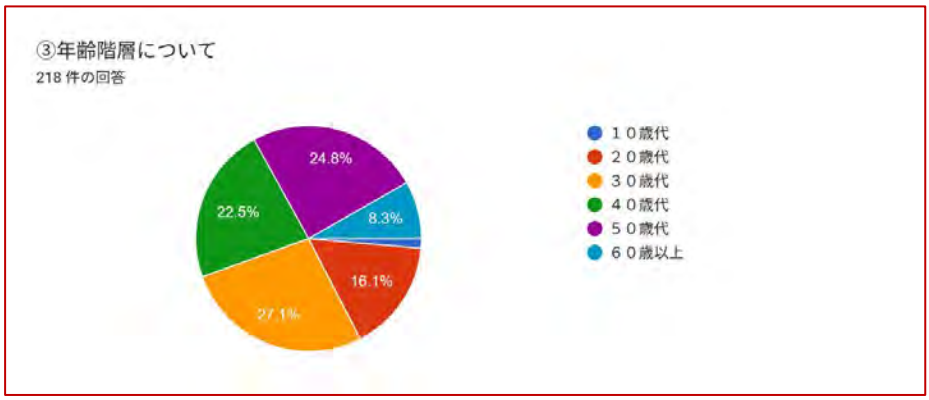
＊各アンケート及びヒアリングの集計図表では、Web 集計の番号・質問項目をそのまま表記した。本報告書の巻末に参考資料として掲載したアンケート及びヒアリング用紙を参照してほしい。

（1） 来場者の属性

「来場者アンケート」では、来場者の属性について取得した。回答者に限定した来場者特性ということになるが、「選手・選手事業所関係者」50.9%、「一般来場者」33%であった。居住地については、「関東」65.6%、「近畿」11.5%、次いで「東海」「東北」などであった。来場者の年齢階層は、「30 歳代」27.1%、「50 歳代」24.8%、「40 歳代」22.5%となっており、「20 歳代」が 16.1%、「60 歳代以上」が 8.3%であった。







（2） 介護についての関心領域

来場者の介護についての関心については、「大いに関心がある」75.7%、「ある程度関心がある」21.6%であった。来場者の属性の関する質問で「一般来場者」と回答した 33%の方々に限定すると「大いに関心がる」73.6%、「ある程度関心がある」20.8%で、関心の度合いには大きな違いはないことは判明した。具体的な関心領域はそれぞれの立場に応じて異なる傾向がうかがえる。

来場者には、介護の未来の「利用者」とともに、未来の「担い手」が参加されていることに留意しておきたい。

●具体的関心事項（「来場者アンケート」結果）

（主な回答）

ｉ．介護のあり方やこれからについて。

・今後、少子化で介護はどのように進化していくのか。
・今後、介護業界がどうなっていくか。
・これからの介護のあり方（ICT 活用、技術の向上）。
・介護の未来について。
・介護人材不足になるので気になる。
・介護職の社会的イメージのボトムアップ。
・業界の今後の発展。
・これから先、国の支援がどうなるのか。
・ロボット等の導入。
・科学的に成長できるか。
・高齢者社会での看取りなど。
・エッセンシャルワーカーとしての意義。
・価値（介護の価値に関心）。

ⅱ．介護技術・介助方法について

・介護技術について。
・介護の方法について。
・認知症介護・認知症の対応
・各介護技術の新しい知識。
・ケアのあり方・進化する支援方法。
・今回のような技術について。
・介護の姿勢、接遇を含めた技術。
・技術の評価。
・プロの介護。
・自立支援、利用者本位のケア。
・他者の介護方法に関心がある。

ⅲ．利用者との関わり・コミュニケーションについて

・利用者とのかかわり方、声かけ。

・人と人とのつながりが奥深い。

・コミュニケーション。

・利用者対応のあり方、優しい心づかい。

・生活を支える職業としての工夫。

・利用者とのより良い介護の仕方。

ⅳ．職業上の関心・キャリアとして

・自分自身の仕事であるため。

・ケアマネとして現場支援に関心。

・介護施設で事務をしているので他施設を見たい。

・介護福祉士になりたいので。

・介護士として働くうえでの気づきや技術向上。

・介護職としての自分の技術の振り返り。

・仕事として今後も続けるため。

・福祉従事者として時代変化に応じた介護に関心。

ⅴ．家族介護・個人の生活背景からの関心

・親が高齢のため。

・自身、家族を含めたこれからの介護のあり方。

・自分自身も高齢者となり今後を考える。

・自分自身障害があるので。

・健康の大事さ。

ⅵ．他施設・他者の介護から学びたいという関心

・他の人の介護・介助のやり方が気になる。

・当施設の介護をよりよいものにしたい。

・現状のケアの見直しができる。

・全国の介護職員のレベルが知りたい。

・他の施設の介護を見てみたい。

・事前に介護の様子を知りたい。

・サービスの質向上につながるケア方法を学びたい。

・現場を久しく離れているので実技を見たい。

ⅶ．その他

・外国人介護職員の活躍を見たかった。

・美容で介護の質が上がるか。

・プロとしての価値。

・自分の日常介護。

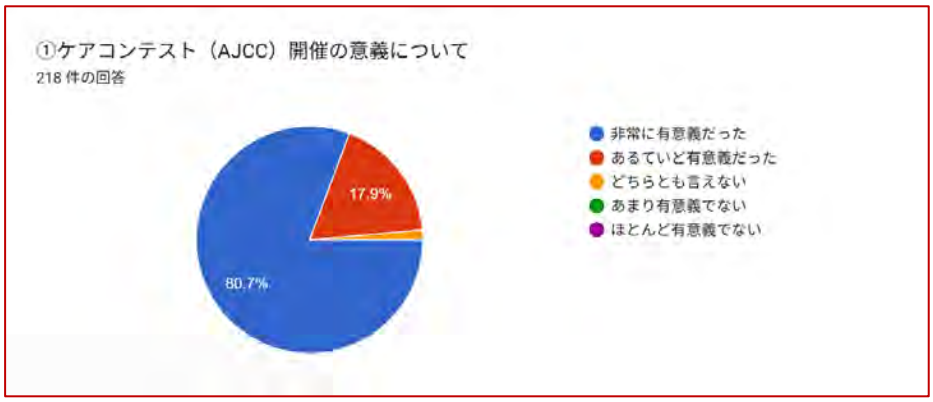
・高齢者を支援することそのものへの関心。

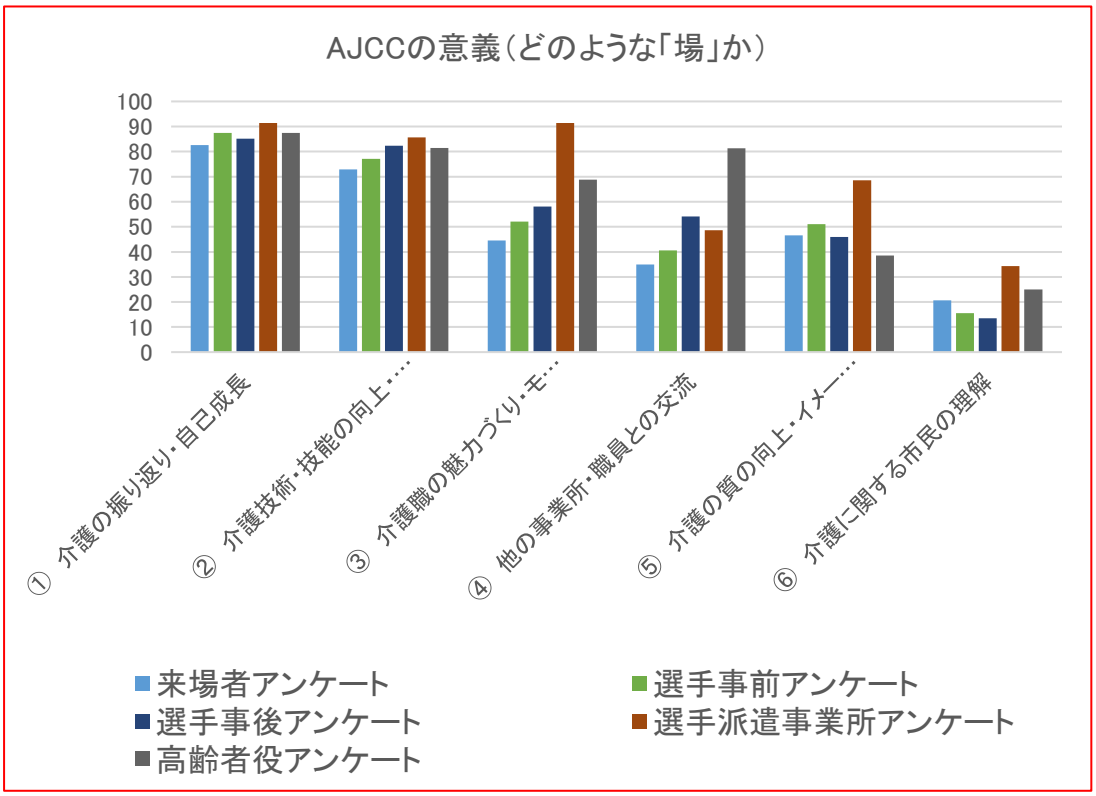
（3） ケアコンテスト（AJCC）の意義

ケアコンテスト（AJCC）開催の意義について、「非常に有益だった」80.7%、「ある程度有益だった」17.9%の回答で、98.6%の来場者が有益だと認識している。ケアコンテスト（AJCC）の意義ついての「来場者アンケート」の結果は、「介護の振り返り・自己成長」82.6%、介護技術・技能の向上・挑戦」72.9%、「介護の質の向上・イメージアップ」46.3%、「介護職の魅力づくり・モチベーションアップ」44.5%が上位の項目となった。

本節では、AJCC の意義について、来場者・選手事前・選手事後・選手派遣事業所・高齢者役の各アンケート調査の結果を比較できる図表として表示した。同質性と異質性に着眼してほしい。

来場者の意見、希望、要望などについては、「ケアコンテスト全体への評価・感動・学び」や「コンテストの意義・価値」に関するポジティブな評価の一方で、具体的な改善点や要望がある。





●来場者の感想、意見、要望など

（主な回答）

ｉ．ケアコンテスト全体への評価・感動・学び

・とてもよかったと思う。
・大変有意義なコンテスト／良い取り組みである。
・意欲的な雰囲気に励まされた。
・いろいろ勉強になった／介護について学びが多かった。
・自身のケアの振り返りができた。
・良いケアをいろいろ見ることができて良かった。
・介護実技を見るのは初めてで大変勉強になった。
・高齢者役体験が貴重で、良いケアを学べた。
・多くの方の介助を見ることができ有意義だった。
・今後増える高齢者支援の中で意義がある。
・現場の方の一所懸命さが伝わった。
・たくさん学び、刺激を受けた
・また来ます／また来てみたい。
・昨年よりパワーアップしていた／今年はさらに良かった。
・楽しかった／学生としても非常に勉強になった。
・とても良い雰囲気だった。
・皆の姿に感動した。
・非常に刺激的だった。
・たくさんの技術を見られ感謝。
・こうした実技の場が大事、意味がある。
・選手として参加したくなった。
・他府県の職員と交流・学習できた。

ⅱ．コンテストの意義・価値

・選手のレベルが高い。
・応用力・臨機応変さが必要で現場に忠実。
・プロフェッショナルな意識が素晴らしい
・良いケア、声かけを学べた。
・実践力が試される内容であった。
・アドバイザーのフィードバックが適切で納得できた。
・評価者の話が勉強になった。
・一つとして同じケアはないという気づき。
・利用者に寄り添う姿勢を学んだ。
・介護技術の向上の必要性を実感。
・外国人介護人材の活躍が見られて良かった。

・技術比較ができたのが良かった。
・自身の現場に活かしたい。
・外国人の取り組みがヒントになった。

ⅲ．今後の改善点・運営面への意見

・オープン会場で周囲の音が混ざり声が聞きにくかった。
・控えブースから会場が見える。
・ビブスが小さかった。
・もっと大きく告知すべきだと思った。
・介護施設全体にもっと PR をすべだと思う。
・アドバイザーに質問できる機会が欲しい。
・高齢者役体験は良かったので継続したい。
・ホスペック等で実技をもっと見せてほしい。

ⅳ．動画投稿コンテストに関する意見

・動画投稿の扱いが低すぎる。
・モニターやブースが小さい。
・映像と音声がずれている。
・椅子が少なかった。
・動画投稿学生のモチベーションを上げる工夫を。
・優秀校は現地で実技披露できる等のインセンティブが必要。

ⅴ．審査・進行・ルールに関する意見

・午前と午後で課題が異なるのに比較されている。
・5 番目の選手が講評を全て聞いてから実技に臨めるのは不公平。
・競技性を考えると評価方法に改善すべき点がある。
・評価者に主観的な人がいる。
・アドバイザーやスタッフによる模範演技を最後に見たい。

ⅵ．地域開催・オンライン配信・アクセス改善への要望

・一般見学が無料でうれしいので継続してほしい。
・遠方でなければ施設スタッフ全員で参加したい。
・地方でも開催してほしい。
・オンラインで配信してほしい。
・もっと広がってほしい／全国的に展開してほしい。
・パンフレットに設定課題・評価基準を載せてほしい。
・開催に当たり、年々大変さを感じる（労い)。
・ありがとうございました（感謝の声多数)。

第5章
AJCC のアウトカムと今後への期待（考察）

前章では、AJCC2025（第 15 回）大会における選手及び選手派遣事業所等の関係者の活動について、本調査研究で実施したアンケート及びヒアリングに基づきその成果（アウトプット）を整理してきた。本章では、そのプロセス（活動と成果）を踏まえて AJCC のアウトカム（効果）について分析、検討する。

多様なアウトカムが観察されるところであるが、本調査研究では、ロジックモデルの枠組みで検討し、継続活動による成果（初期アウトカム）として 7 項目、さらに、期待される成果・中長期の視点での影響（インパクト）として 4 項目をあげる。（図表参照）

アウトカムの受益者は、各項目によって影響度は異なるが、継続活動による成果の項目は、大会に参加する選手及び選手派遣事業所（動画投稿養成校の参加学生及び養成校を含む）、介護事業を推進する業界や介護の仕事を担う職能集団等にとって、とくに特徴的なアウトカムであり、期待される成果・中長期の視点での影響の項目は、広く介護サービスの利用者、市民、地域社会等にとってのアウトカムとして認識できるものである。

なお、本章の内容は、AJCC2024（第 14 回）大会を対象に行った昨年度の調査研究（先行研究）の成果を踏まえてまとめたものである。AJCC の今後の期待と課題についても検討する。

1. 継続活動の成果（初期アウトカム）

AJCC は、2010（平成 22）年の第 1 回大会以来、「介護の質の向上と地域との繋がりを目指して」の理念のもとで継続的な歩みを重ねている。第 15 回という節目を迎えた今年度大会は、全国から集結した 150 名の選手に加え、多くの来場者が東京ビッグサイトに集い、最大規模での開催となった。

とくに本年度の大会は、外国人介護職員分野に挑戦する選手が定員を上回る応募となり、部門を急遽拡充して対応したことや、若手から経験豊富なベテランまで幅広い年齢層の選手が集い、実技に挑戦したことが特徴であった。また、大学・専門学校・高等学校等の養成校による動画投稿コンテストにも多くの学生、生徒が挑戦し、次世代の担い手が参加する重層的な活動が展開された。

これまでの継続活動及び今年度の大会における選手等関係者の活動プロセスがもたらした特徴的なアウトカムとして、以下の 7 つの項目に整理し、考察する。

図表　ケアコンテスト（AJCC）の活動とその成果（ロジックモデル）

アウトカム

継続活動による成果		期待される成果・中長期の視点での影響
初期アウトカム	中間アウトカム	最終アウトカム
介護の「見える化」「価値・魅力」の共創		介護の社会的評価の向上
理念・エビデンスに基づく「良質な介護」		介護人材の確保・育成・定着
介護職のモチベーションアップ		介護サービスの質の向上
介護技術・技能、コンピテンシーの向上		新しい介護文化の創造 ～Well-Being を共創する介護
外国人介護人材の育成・ダイバーシティ		
介護現場のトレーニングモデル		
介護職員の交流、地域との繋がり		

プロセス

活　動	成果（アウトプット）
介護の社会化：プラットフォームとして活動の継続と拡充 ～AJCC15 年間の継続活動とその成果	
AJCC2025（第１５回）大会：選手及び動画投稿参加選手等の活動 ～ケアコンテスト参加選手及び事業所の活動とその成果 ～動画コンテスト参加選手及び養成校の活動とその成果 ～選手派遣事業所等の職員・学生の活動とその成果	
AJCC(プラットフォーム)に関わる多様なステークホルダーの活動 ～アドバイザー、高齢者役、実行委員スタッフ、ボランティア等の活動とその成果	
AJCC への地域・市民の参加活動 ～多様な来場者（市民・関係機関・報道機関）の活動とその成果	

資源

主催・共催団体 （非営利の社会貢献活動等）	選手及び選手派遣事業所（養成校） （参加組織等関係者等）
AJCC の目的と仕組み （開催コンセプト・ノウハウ等）	後援・協賛団体 （行政を含む後援団体・協賛団体等）
実行委員会、アドバイザー、高齢者役 （実行委員・ボランティアアスタッフ等）	地域社会・市民 （来場者、動画等視聴者等）

（1） 介護の「見える化」「価値・魅力」の共創

介護の専門性は、居宅や施設居室等の閉ざされた空間で行われるというのが一般的で、「密室性」が高いため外部からはその意味や価値が見えにくい特性がある。AJCC は、介護の専門性をコンテストという形式で公開の場に置くことにより、日常の現場では可視化されにくい介護の意味や価値を、具体的な実技として示し、介護を「見える化」している点が特徴である。

介護の「見える化」のプロセスは、単なる技術披露の場にとどまらず、現場における「良質な介護」の創造と実践を促す契機となっている。コンテストの舞台は、選手が「高齢者役」という一人の人間に対し、「いま」「ここで」の意向やニーズを汲み取りながら、最適解を導き出し、実践する場である。

本調査研究のアンケート結果によれば、参加選手の満足度は 95%を超え、「自身のケアを振り返る良い機会になった」「意欲的な雰囲気に励まされた」とする回答が目立つ。これは、選手自らが「見られる」ことを通じて、日頃無意識に行っている介護を「専門的技術」として再確認し、自身の介護の質を内省的に高める実践的なプロセスを体験していると言ってよい。

来場者から寄せられた「介護実技を見るのは初めてで大変勉強になった」「プロフェッショナルな技術に感動した」という多くの声は、本事業が介護を単なる「お世話」や「作業」してではなく、高度な技能や判断に基づいた専門性の高いものであることを示すものである。

今年度第 15 回大会は、外国人介護職員分野について定員を超えるエントリーがあり、また経験年数 10 年以上のベテラン介護職員の積極的な参画が特徴であった。多様な背景を持つ選手たちが、それぞれの立場で「良質な介護」を追求する姿は、介護が画一的な作業ではなく、利用者一人ひとりの尊厳の保持を理念とし、ニーズや意向に基づく極めて個別性の高い専門業務であることを示すものである。

来場者は、その姿に「感動」し、「介護の素晴らしさを実感した」「自分も選手として参加したくなった」と感想を述べている。これは、介護の価値や魅力が、選手と高齢者役の間で行われるケアコンテストの実技場面で創出されていることを意味するものである。「良質な介護」の実現をめざすプロセスは、介護を必要とする利用者にとって価値・魅力であり、専門職である介護の担い手にとっての価値・魅力となるものである。人と人との関係性のなかでの実現する「良質な介護」の価値や魅力の創出は、ともに創りあげるものであり、AJCC の「コンテスト＝競い合い」は「共創」の場になっていると言ってよい。

AJCC が提供する介護の「見える化」の場は、介護の専門性を一般社会へ開放すると同時に、関係者が一体となって「良質な介護」のあり方を探求し、実践するプラットフォームとして結実している。ここでの「良質な介護」の創出の取り組みは、介護の魅力を高め、介護職員の誇りを醸成し、社会的評価を高めるインパクトになるものである。

（2） 理念・エビデンスに基づく「良質な介護」の誘引

AJCC は、介護の基本理念とエビデンスに基づく実践を重視し、その定着を促進する役割を果たしている。設定課題及び評価指標は、利用者の尊厳の保持や意向の確認、安全・安心の確保、自立支援、個別ケアの実現といった介護の基本理念や規範に基づいて設計されている。

例えば看取り分野の評価基準には、「高齢者の意向や意思を尊重していた」「自立支援に配慮した介助が行われていた」といった具体的な指標の明示がある。これらの評価指標を事前に選手へ公開することは、結果として、選手が実技を通じて「良質な介護」の具現化を目指すことを誘引する仕組みになっている。事前準備の段階から選手及び関係者は明確な方向性をもって実技づくりに取り組むことになる。

この取り組みは、経験的に蓄積された個人の「暗黙知」としての技術を、評価基準という指標による誘引によって「形式知」へと構造化するプロセスでもあり、介護の専門性を可視化する基盤となっている。本調査研究のヒアリング結果によれば、選手は職場の上司や同僚とともに、これらの評価指標をどのように表現すべきかについて共同研究を行い、ロールプレイング等を通じて実技を磨いている。このような準備活動は、選手個人の振り返りに繋がるだけでなく、職場全体で「良質な介護」の根拠を再確認する機会となり、組織的な介護力の向上に寄与するものとなる。

また、選手の実技に対するアドバイザーの専門的フィードバックは、科学的根拠に基づく介護の専門性を再認識する契機となっている。アンケート結果での「改めて介護の理念やエビデンスに基づく科学的介護の重要性を再認識した」「自分のケアの方向性を理解し、良い点を言葉で示してもらい自信につながった」といった感想は、評価指標に沿った実践と専門的な助言が、学びの深化を促している結果と言える。

このように、AJCC が設定する評価指標に基づいた一連のプロセスは、介護現場において基本理念やエビデンスに基づく「良質な介護」を誘引し、定着させるための重要な基盤となっている。

（3） 介護職のモチベーションアップ

AJCC は、参加する介護職員のモチベーションを多層的に引き出す機能を果たしている。コンテストで表彰を受けた選手のみならず、参加した多くの選手、さらに関係者に顕著なモチベーションの向上が認められる。それは、AJCC が、他選手と実技の優劣を競う相対的な「競争」としての場ではなく、設定された課題のなかで「良質な介護」にどれだけ迫れるかという実技の「創出」の場として設計されているからである。選手や関係者の心理的安全性を担保し、前向きな意欲を引き出す要因となっている。

選手派遣事業所アンケートでは、「参加選手のモチベーションが高まった」が 94.3%であった。また、他の職員への影響（波及効果）についても、「非常によい影響を与えた」34.3%、「ある程よい影響を与えた」51.4%と、高い波及効果が認識されている。

選手のモチベーションを支える要因には、大会に至るまでの重層的なプロセスがある。職場の上司や同僚からの応援は、選手にとって大きな「心理的資源」であり、また、実技後のアドバイザーによる肯定的なフィードバックは、モチベーション要因としての「承認欲求」を充足し、深い「成長実感」をもたらしている。選手アンケートの「プロとしての責任感が芽生えた」「仕事を続けたいと思う」という言葉は、コンテストでの経験が、表面的な満足を超えて「誇り」や「やりがい」を喚起していることを示している。

また、介護や医療などの仕事に従事する職員の動機づけとして「プロソーシャル・モチベーション（他者貢献動機）」が重要であるという考え方がある。他者貢献動機とは、他者の視点に立ち、仲間や組織、そして利用者のために貢献しようとする意欲を指すものである。昨年度の先行研究でも触れているが、AJCC は、他者の視線があるコンテストという舞台で、選手が自らの専門職としての倫理観を再確認し、他者への貢献意欲を高める契機となっている。ヒアリング調査では、参加後に「施設内で率先して後輩指導を行うようになった」という事例も報告されている。同僚や後輩に対する支援も他者貢献動機として認識できるものである。選手個人のプロとしての意識の向上が組織全体へポジティブな影響を及ぼすことになる。

コンテストを体験した後の選手ヒアリングでは、今後の自己研鑽とともに現場実践への意欲を示す回答が目立ち、こうした他者貢献動機の高さは、介護の質の向上を促進する原動力となるものである。さらに、来場者がプロ意識の高い選手の姿に触れ、介護職を高度な専門職として再認識することも、社会からの承認を通じて選手のモチベーションをさらに強化する好循環として期待される。

（4） 介護技術・技能、コンピテンシーの向上

介護技術及び技能の向上は、AJCC 開催の最も基本的かつ直接的な目的であり、成果である。介護には多くの技術・技能が必要であり、それは「分かる」という知識のレベルだけではなく、「できる」という経験的スキルのレベルとして求められるものである。また、介護においては、テクニカルなスキルと共に、ヒューマン・スキル、とくにコミュニケーションスキルが重要になる。AJCC においては、これらのスキルが、設定課題のなかで「良質な介護」としての実技を創出する基礎になるものである。ケアコンテストにおいて、経験年数に基づき部門区分を行っているのは、経験によってスキルの熟練度が異なることが前提になっているからである。

AJCC は、介護の技術・技能の習熟を土台としながら、状況に応じて適切な判断で「良質な介護」を創出することができる実践力（「介護のコンピテンシー」）を求めており、その向上を促す契機となっている。コンピテンシーの考え方は、ビジネス領域においては「高業績者の行動特性」として提唱されているものであるが、介護においては「良好な介護者の行動特性」と言ってよい。

ケアコンテストの設定課題は、「想定外の反応を示す利用者」など、現場のリアルを再現した設定となっており、選手は予め準備した固定的な対応の再現ではなく、「いま」「ここで」の利用者に対する臨機応変な「判断」と適切な「対応」が求められる。実技コンテストの「事前準備・本番・振り返り」というプ

ロセスは、技術・技能の向上を超えて、介護のコンピテンシーを磨く機会となっている。選手アンケートにある「自分のケアの幅が広がった」という回答は、コンテストが介護の「ベストプラクティス」（優良実践例）を共有する相互研鑽の場となっていることを裏づけるものである。

こうしたコンピテンシー向上の成果は、職場全体へも波及している。派遣事業所ヒアリングでは、「選手の参加を機に、職場全体で介助技術の根拠を見直した」という声が聞かれた。AJCC の場で表出される高いレベルの実技が刺激となり、それが各現場における介護実践のベンチマークとなり、業界全体のレベルアップに寄与することになるだろう。認知症ケアや看取り等の専門分野において選手が見せる創意工夫は、次代の介護現場が指針とすべき新たな実践モデルとなるものである。

（5）外国人介護人材の育成・ダイバーシティ

AJCC は、外国籍の介護職員の研鑽と活躍の場を広く提供し、介護現場における人材のダイバーシティを推進している。本年度（第 15 回）大会は、外国人介護職員分野へのエントリーが募集定員を大幅に超え、部門を拡充するに至った。この背景には、外国人介護職員自身が自らの専門性を評価される機会を求めているということがある。

本大会の開会式では、外国籍の選手が宣誓を務めたが、国籍を問わず「良質な介護」を志す全選手の一体感を醸成する力となっている。また、近年の大会では、外国籍の選手が、外国人介護職分野でない他の専門分野の実技に挑戦し、最優秀賞や優秀賞を受賞する例も多くなっている。これは、AJCC が「国籍」という属性を超えて「共創」する場になっていることを示すものであり、「介護の専門性を通じたダイバーシティ」の深化を象徴するものである。

来場者アンケートでは、「日本の介護のグローバル化に希望を感じた」といった声が寄せられ、アドバイザーからは外国籍選手の高いコミュニケーション能力に対する肯定的な評価がなされている。これらは、外国籍選手の「自己肯定感」を高め、アンケートでは「この経験を活かしてリーダーを目指したい」というキャリア形成のステップともなっている。

若手からベテランまで年齢層を超えた多様な選手が集う姿は、介護が特定の属性に依存せず、誰もが専門性を発揮できる職業であることを可視化している。多様な人材が互いを尊重し、共に学び合い、成長するという取り組みは、これからの多文化共生型の介護現場づくりを支える重要な初期アウトカムとして認識できるものである。

（6） 介護現場のトレーニングモデルとしての機能

AJCC は、単なる技術の習熟を目的とした訓練の場に留まらず、現場で求められる総合的な実践力やコンピテンシーを開発するための「トレーニングモデル」として機能している。本調査研究における事業所ヒアリングや動画投稿養成校ヒアリングでは、本大会への参加プロセスそのものが、職場教育（OJT）や

人材育成、介護人材養成の有効なモデルとなっていることが確認できる。

とくに事業所における取り組みは、選手がコンテストに参加するだけではなく、AJCC への参加を契機に「事前準備→本番→振り返り→還元」という一連の好循環プロセスを体験し、組織的な学習プロセスになっている点である。ヒアリング結果によれば、選手は提示された設定課題と評価指標に基づき、職場の上司や同僚とともに課題の共同研究やロールプレイング（役割演技法）を重ねている。このプロセスは、普段の業務では見過ごされがちな「ケアの根拠」を職場ぐるみで問い直す機会となっており、選手個人のスキルアップと共に、職場全体の指導体制や介護標準の再構築を促す教育的効果をもたらしている。

また、介護は、個別ケアが中心であり、密室で行われ、他者から客観的な評価を受ける機会が少なく、自己流に陥りやすいという特性がある。AJCC におけるアドバイザーの評価とフィードバックの仕組みは、こうした「実践の知」を客観化し、自らの強みや改善点を明確にする貴重なトレーニング機能となっている。「同僚と準備を進める中で技術力が向上した」「実技を振り返ることでケアへの意識が変わった」といった選手の声は、トレーニングモデルとしての成果を表現するものである。

近年では、AJCC の活動を参考に、法人内や地域単位で独自のケアコンテストを実施する事例が増加している。これは、AJCC のプロセスで行われている「設定課題の事例検討や実技演習、そして第三者による評価とアドイバイス」という仕組みが、介護技術・技能の向上や人材育成、介護の質の向上を推進する仕組みとして有効であることが認識されているからであると言えるだろう。コンテスト終了後には、地域や法人内で研究発表会や実践発表会が開催され、得られた知見が現場に還元されている。今後さらに多くの法人・事業所において展開されていくことを期待したい。

（7） 介護職の交流・ネットワーク、地域との繋がり

AJCC は、創設当初から「介護の質の向上と地域との繋がりを目指して」を理念としている。15 年間の継続的な活動は、介護職員の交流、地域社会および多職種・多世代とのネットワーク形成として本事業の根幹をなす初期アウトカムとなっている。AJCC は、全国の介護職が所属や地域の枠を超えて集い、共通の課題に向き合う「横のつながり」を創出するプラットフォームとして機能しているし、地域とのネットワークづくりを推進してきたことは第 3 章でも示したところである。

交流やネットワーク形成を象徴する活動としては、前夜祭や大会当日の実技前後における多様な交流とその深化がある。参加選手は年齢、経験、国籍を超えた多様なバックグラウンドを持ちながらも、ケアコンテストへの挑戦という共通の目標のもとで対話を行い、日々の現場での苦労や課題認識やこれからのあり方を共有している。アンケート等では、選手や事業所から「他地域の職員との交流が刺激になった」「孤独になりがちな現場において、全国に仲間がいることを実感できた」という声が寄せられている。ここで形成された一体感は、大会終了後も続くインフォーマルなネットワークの基盤となり、地域や法人を超えた相互研鑽の土壌ともなっている。

また、AJCC は介護現場と地域住民、養成校、行政等との接点を形成する重要な役割を果たしている。来場者アンケートでは、「地域で介護を支える姿に感動した」「介護職への尊敬の念が深まった」という意見があり、介護を「見える化」することが、地域住民の理解と共感を呼び起こす要因となっている。養成校による動画投稿や学生の実技大会への来場は、次世代の担い手と現役職員を繋ぐ機会となっている。ヒアリング調査からは、養成校が AJCC の活動を「生きた教材」として活用している（あるいは活用したい）との声がある。

さらに、これらの繋がりは、「介護の魅力」「介護職へのリスペクト」を高めることになっている。選手が、所属法人や地域を代表して出場し、その姿が一般市民に公開されるプロセスは、介護職自身の自己肯定感を高めることになるし、社会的地位の向上に寄与するものである。来場者が実技を通じて「感謝・感動・かっこいい」というポジティブなイメージを抱くことは、介護職に対する社会的なリスペクトを醸成する好循環を生み出すものとなる。

AJCC の交流とネットワークの場は、単なる情報の交換に留まらず、介護の専門性を地域社会へ開放し、社会的評価を高めるための基盤ともなるものである。地域住民や次世代を巻き込んだこの繋がりは、地域包括ケアの推進を側面から支え、これからの超高齢社会を共に創り上げる「共創」の原動力になっていると言えるだろう。

2. 期待される成果・中長期の影響（インパクト）

前節では、AJCC の継続的な活動が直接的にもたらす特徴的な成果として、7 つの初期アウトカムを整理した。本節では、それらの成果を基盤とし、さらに中長期的な視点に立って期待される波及効果や、社会全体に与えるインパクトについて考察する。

これまでの 15 年に及ぶ活動の蓄積と、本大会の活動成果を踏まえて、現時点において、また今後の活動を通じてもたらす中長期的な成果について、以下の 4 つの項目に整理し、展望する。ここでは、介護職の社会的評価の向上や介護人材の確保・育成・定着といった個別の課題とともに、最終的なアウトカムとして利用者の幸せと介護職の働きがいが響き合う「新しい介護文化」の創造へと向かう道筋を明らかにする。

（1） 介護職の社会的評価の向上

介護職の社会的評価の向上は、AJCC 創設時からの原点であり、現在、そして将来に亘って継続的に追求し続ける重要なミッションである。介護の現場は、利用者の生活空間に深く入り込み、個別性や関係性に支えられる実践であるがゆえに、外部からは見えにくいという構造的特性を持っていた。AJCC は、これまで 15 年にわたって介護の専門性をケアコンテストという場で公開し、実技として「見える化」することを続けてきた。この間、介護に対する社会に意識は確実に変容していると言ってよい。

AJCC の実技コンテストの場において選手と高齢者役との間で繰り広げられる真摯な「出会い（エンカウンター)」の場面は、来場者や見学者に深い感動を与えている。この「感動」や「感謝」は、単に一過性の受けとめとしてではなく、「介護専門職へのリスペクト」や「プロフェッショナルへの信頼」という社会資本（ソーシャル・キャピタル）へと昇華され、社会に定着し始めている。また、選手たちは、他者貢献動機（プロソーシャル・モチベーション）を高める契機とし、エッセンシャルワーカーとして、専門職としての自覚と誇りの醸成を図っている。

さらに、こうした専門性の可視化は、中長期的には他職種等との連携において、対等なパートナーシップを構築する基盤となるものである。介護職が自らの実践の根拠を論理的に示せるようになることは、多職種連携等において介護の専門的知見が尊重されることにつながり、結果として地域包括ケアシステム全体の質を高めることにも寄与するものとなる。

AJCC を通じた介護職の価値の可視化は、道半ばではあるものの、かつて介護現場に対して流布された「きつい・汚い・危険」といったネガティブな「3K」イメージを、AJCC の場において「感謝・感動・かっこいい」というポジティブイメージの「新 3K」へと転換させ、中長期的な視点において介護職の社会的評価を着実に上げつつあると言ってよいだろう。

メディア等を通じた発信力とも相まって、着実に社会の意識を変容させている。そして、このことが、次世代の若者が介護職を魅力的な「グッドジョブ」として選択するための土壌となり、超高齢社会の新たな介護文化の形成に波及することが期待される。

（2） 介護人材の確保･育成･定着

超高齢社会の進展に伴い、厚労省の調査研究では、2040 年までに新たに約 57 万人の介護人材確保が必要であると推計されている。人材の「確保・育成・定着」施策の推進は、事業体における喫緊の課題であり、社会的課題となっている。課題解決に向けて事業体としてのさまざまな施策が推進されるなかで、国の支援施策としては介護職員の処遇改善、労働の負荷の軽減や職場環境整備など「介護の生産性向上」に関する施策が推進されている。AJCC の活動の成果もまた、このことに貢献するものであるし、将来に向けてさらに波及効果を高めていくことが期待される。

本調査研究の「選手事後アンケート」では、「介護の仕事が好きか」どうかについて「非常に好きだ」51.4%、「ある程度好きだ」41.9%との回答で、「好きだ」の回答が 93.3%になっている。「やり甲斐を感じるか」についても全く同率の回答であった。また、「介護の仕事を続けたいと思うか」については、「これからも長く続けたいと思う」56.8%、「しばらくは続けたい」39.2%で「続ける」の回答が 96%であった。出場する選手の介護に仕事への思いが表現されている数値である。

また、「選手実技後ヒアリング」では、ヒアリング対象の選手全員が「好き」「誇りに思う」と回答し、ポジティブな回答が 100%であった。介護の仕事で大事にしていることの自由回答をカテゴリーに区分

してみると、「利用者尊重・その人らしさの尊重」「安全・安心、清潔の確保」「自立支援・意欲向上・生活機能の支援」「コミュニケーション・声掛け・信頼関係」「笑顔・関係づくり」などの項目が上がっている。AJCC の活動のプロセスでの「良質な介護」への取り組みが、介護の仕事が「好き」になり、「やり甲斐」を感じることに繋がるものであることを示すものである。

価値観が多様化するなかで職業選択や就労動機は多様化の傾向にあるが、「好きだ」「誇りがもてる」ということは根源的な就労動機になると言ってよい。処遇改善や職場環境整備等は必要な条件ではあるが、職員の「ワークエンゲージメント（仕事に対する活力・熱意・没頭）」を高める施策が重要である。AJCC は、その一端を担う活動になっている。

現役職員のワークエンゲージメントの向上は、将来の担い手である若年層への「リクルーティング」にも好影響となるものである。養成校の学生・生徒による動画投稿コンテストや、ケアコンテストのライブ体験は、次世代の担い手に介護のリアルな魅力を伝える貴重な機会となっている。教科書的な知識を超え、専門職のプロフェッショナルが真摯に利用者と向き合い、技術と感性を駆使する姿を目の当たりにすることは、介護を「かっこいい」「目指すべき」職業選択肢（グッドジョブ）へと変容させ、将来的な入職者の質と量の双方を担保する重要なインパクトとなる。

さらに、こうした個々の動きは業界全体の「育成」の標準化へと収斂していく。AJCC が示す評価基準や「良質な介護」のモデルは、各事業所における独自のキャリアパスや内部研修と連動し始めており、コンテストへの挑戦を目標に据えることで、現場職員が自律的に学び、また学び合う土壌が形成される。これは、受け身の研修ではない、能動的な人材育成モデルを示すものである。また、業界全体の生産性と介護の質の向上を同時に実現する基盤となるものであろう。

「ダイバーシティ」の推進のもとで外国籍人材が活躍し、高度な専門職としてキャリア形成をめざしている点も重要である。多様な背景を持つ人材が、その能力を発揮する場や機会に挑戦し、さらにモチベーションを高めることは、育成とともに定着にも大きく貢献するものである。本大会（第 15 回）大会における外国籍選手のパフォーマンスの高さは、その重要性を示すものである。多くの外国籍職員を採用していくことになる今後の状況のなかで、意義深いアウトカムである。

（3） 介護の質の向上

介護の質の向上は、AJCC が目指す活動の究極の目標であり、時代の変遷とともに求められる水準が高度化するなかで、継続的に取り組まなければならないテーマである。AJCC 活動のアウトカムは、参加選手個人の技能向上に留まらず、そこから創出される「ベストプラクティス（優良実践例）」が各事業所へと還流し、業界全体の「ケアの標準（スタンダード）」を底上げしていくことが重要である。

大会を通じて示される高度な実践は、参加した 150 名の選手やその派遣事業所を通じて、それぞれの地域や現場へと持ち帰り、波及していく。すでに見て来たように、コンテストの設定課題が利用者の尊厳

保持やエビデンスに基づく自立支援を軸に設計されているため、ここで評価された実技が現場に還元されることは「質の高いケアの具体的モデル」として機能することになる。このように、特定の場での学びと実践が広く現場へと浸透していく取り組みは、主観や経験に基づく介護ではなく、科学的根拠に基づいた介護を業界の「当たり前」の文化として定着させていくプロセスでもある。

また、AJCC においてアドバイザーという第三者から評価を受ける体験は、現場において「客観的な視点による改善」のサイクルを定着させるエンジンとなるものである。高齢者役が示す意向やニーズを的確にアセスメントし、自らの介護のあり方を創出していく選手の取り組みは、介護が標準的にマニュアルに基づいて実践しながらも、関係のなかで絶えず創造していくものであることを示している。それは、「その人らしい介護」を創造することでもある。こうした取り組みを組織全体で共有し、チームケアの充実を図っていくことが、利用者や家族から真に「選ばれる介護」につながることになる。

中長期的な視点に立てば、こうした質の向上は地域連携の深化とも密接に関係してくる。個々の事業所が AJCC 参加を契機に磨いている高い専門性を発揮し、地域における介護の質を担保し続けることは、地域包括ケアシステム全体の信頼性を高めることに他ならない。常に新たな目標にチャレンジし、質の追求を続ける AJCC の活動は、次代の介護現場における介護の質を支える基盤ともなるものである。

（4） 新しい介護文化の創造 ～「Well-Being を共創する介護」

AJCC が 15 年の歳月をかけて追求してきた軌跡の先には、「新しい介護文化の創造」という新たな地平が広がっている。それは、単に介護のイメージを刷新し、技術・技能の向上を図るということに留まるものではなく、介護という営みを「Life（生命・生活・人生）を支え、共に豊かにしていく活動」として再定義することができるプロセスである。

この新しい介護文化の中核となるコンセプトは、「Well-Being（ウェルービーイング）（幸せ・より良く生きること）を共創する介護」と位置づけることができる。介護における「良質さ」とは、尊厳の保持や安全・安心の確保、そしてエビデンスに基づく確かな実践によって担保されるものであるが、その真髄は、利用者と介護者が「いま、ここ」で向き合う「出会い（エンカウンター）」の瞬間に実現するものである。利用者の意向を尊重し、その人らしい人生の継続を支える介護の実践は、利用者の「Well-Being（ウェルービーイング）の実現」と共に、そのプロセスに関わる介護者自身にとっても、専門職として充実の体験であり、自身の「Well-Being（ウェルービーイング）の実現」をもたらすものである。

「共創」のあり方は、本大会が推進してきたダイバーシティの視点とも深く共鳴するものである。国籍や年齢、経験の異なる多様な担い手が、それぞれの感性と背景を持ち寄りながら一つのケアを形作っていく姿は、多様性を力に変え、共に支え合う共生社会の縮図と言える。介護は「一方的にサービスを施すもの」ではなく、利用者や家族、そして地域社会と共に、人生の豊かさを分かち合い、創り上げていく双方向の営みとして位置づけることができる。

AJCC というプラットフォームにおいて、選手たちが磨き合い、高め合ってきた「実践の知」は、これからの社会における新しい介護のあり方となり、未来の介護文化を形作る静かな、しかし確かな力となっていくであろう。AJCC の継続的な活動が、これからも介護のイノベーションを推進し、関わるすべての人々の「Well-Being（ウェルービーイング）」が共創される社会の実現に寄与し続けることが期待される。

3. AJCC への期待と課題

介護の質向上と地域との繋がりを目指す AJCC の活動は、15 年の継続を経て多大な成果を創出してきた。一方で、本調査研究を通じて、活動をさらに持続的かつ効果的なものにするための課題も浮き彫りになっている。本節では、本調査研究で行ったアンケート・ヒアリングで得られた声に基づき、今後の発展に向けた期待と改善点を整理する。

（1）「挑戦の場」の継続的確保と参加機会の拡大

選手アンケートにおいて最も多く寄せられたのは、「このような研鑽の場を継続してほしい」という強い要望である。特に外国人介護職員や若手職員からは、自身の技術を客観的に評価される機会が希少であることが指摘されている。

- 物理的な会場での開催に加え、オンラインや動画投稿の仕組みをさらに活用し、地域や施設種別を問わず、より多くの職員が日常的に「挑戦」できる機会を多層的に構築していくことが望まれる。
- 参加枠の拡大、選考方式の透明化、地方ブロック大会の開催、業界・職能団体との連携強化などの意見がある。

（2） 評価指標等の現場活用とフィードバックの充実

派遣事業所からは、「大会の評価基準が職場内研修の非常に良い指針になった」という声がある一方で、「より詳細な評価内容を職場に持ち帰り、事後の指導に活かしたい」という要望も寄せられている。

- 大会当日の評価結果やアドバイザーの講評を、より詳細かつデータ化してフィードバックする仕組みを検討してほしいとの要望がある。これにより、大会が「一過性のイベント」で終わることなく、各事業所における継続的な PDCA サイクル（教育・改善）を回すためのツールになる。
- 現場の実情を反映した課題の更新、高齢者役の演技の標準化、フィードバック体制の充実（自信に繋がる助言のあり方）が望まれる。
- 設定課題の早期配布は、職場の共同研究（OJT）を活性化させるために重要である。

（3） 選手相互の交流、ネットワークの促進

前夜祭における選手相互の交流の促進とともに、継続的に交流できるネットワークを組織化してほし

いとの意見などが出されている。

・大会で出会った選手たちが、地域や国籍を越えて継続的に事例検討や情報交換を行える場としてのネットワークがあるとよい。
・前夜祭に参加できない選手に対して、競技のオリエンテー等を SNS 等で配信してほしい。
・競技のハイライトなどの動画を SNS で配信し、交流とともに広く社会へ発信するとよい。一般市民のみならず多職種に対しても介護の専門性を積極的に提示していく必要がある。

（4） 次世代養成・動画投稿コンテストの拡充

動画投稿コンテストへの学生の関心は高く、動画投稿コンテストの充実と、現任者による実技コンテストへの連携に関する期待と要望がある。次世代養成への期待は大きい。

・教育課程（高校・専門・大学）に応じた部門設定を行うとともに、単なる投稿に留まらない「双方向の学び」を実現するため、リモートを活用した教員・学生間の交流機会を設けてほしい。
・学階別部門の設置、履歴書に記載可能な参加証の授与、動画制作ガイドラインの明確化、養成校向けの実技コンテストの検討。
・実技コンテストの見学を希望する意見が強い。特に地方の学生が参加できる機会が望まれる。

(5)グローバル化への対応と多文化共生の深化

近年の外国籍選手の増加に伴い、これに対する体制整備の意見がある。

・外国籍選手枠の拡大に対応するプログラム上の配慮がほしい。日本語能力に配慮した設定課題などがあるとよい。多国籍交流の促進などの意見がある。
・また、養成校の外国籍学生も参加しやすい環境を整えることを検討してほしいとの意見。
・外国籍に選手も他の専門分野のコンテストに参加できるようにし、外国人介護職員分野を特別に設定しなくてもよいとの意見も出されている。

あとがき

本調査研究は、昨年度の先行研究の成果を踏まえ、その分析枠組みを継承しながら、AJCC の活動とその成果について改めて検証を行ったものである。本年度の調査研究においては、AJCC の活動について「プラットフォーム機能の形成と拡がり」に着眼した点に特色がある。AJCC は、介護の実践を公開の場において示し、評価と学習、交流を通じて多様な主体が参画する協働の基盤として形成されてきている。この継続的な活動の積み重ねは、単なる一過性のイベントにとどまらず、介護の「見える化」を通じた価値・魅力の創造と共有、そして専門性の進化を支える基盤として機能しているものである。

本調査研究では、AJCC の活動がもたらす成果について、ロジックモデルの枠組みに基づき整理を行い、継続活動による成果として、①介護の「見える化」と「価値・魅力」の共創、②理念・エビデンスに基づく「良質な介護」の誘引、③介護職のモチベーションの向上、④介護技術・技能及びコンピテンシーの向上、⑤外国人介護人材の育成とダイバーシティの推進、⑥介護現場におけるトレーニングモデルとしての機能、⑦介護職の交流とネットワーク形成の 7 つの初期アウトカムを整理した。

これらの成果は、参加した選手個人の技能向上にとどまるものではなく、所属する事業所や養成校、さらには地域社会へと波及し、介護の価値や魅力を再認識する契機となっている。とりわけ、コンテストという舞台において、自らの実践を振り返り、他者から評価を受け、仲間と学び合うプロセスは、介護職としての誇りや自己効力感を高め、仕事への意欲、すなわちモチベーションの向上をもたらすものである。

さらに、これらの成果を基盤として、中長期的な視点においては、介護職の社会的評価の向上、介護人材の確保・育成・定着、介護の質の向上といった影響が期待されるとともに、その延長線上には、利用者と介護職がともにより良く生きることを支え合う「Well-Being（ウェルービーイング）を共創する介護」という新しい介護文化の創造として位置づけられるものである。AJCC における「良質な介護」の創出の取り組みは、利用者の生活の質を高めるとともに、介護職自身にとっても働くことの喜びや誇りをもたらすものであり、双方の「Well-Being（ウェルービーイング）」（幸せ・よりよく生きること）が響き合う関係性を形成するものとなっている。

AJCC は、創設以来 15 年にわたり継続的な取り組みを通じて、介護の価値を可視化し、専門職としての誇りと社会的理解を育む場として発展してきた。本調査研究により、AJCC が、介護技能の向上にとどまらず、介護の価値の創造と共有、多様な主体の協働による学びと成長を促進するプラットフォームとして重要な役割を果たしていることが改めて明らかとなったところである。

本報告書が、介護の価値と専門性に対する理解を深めるとともに、介護職の社会的評価の向上に向けた取り組みをさらに推進し、AJCC のさらなる発展と、介護の質の向上、そして「Well-Being（ウェルービーイング）を共創する介護」という新しい介護文化の創造に向けた取り組みの一助となることを期待するものである。（M）

AJCC2025（第15 回）調査研究事業　06　来場者アンケート

・AJCC2025（第 15 回）にお越しいただきありがとうございます。
・本アンケートは、AJCC の効果分析に関する調査研究事業として実施するものです。
・下記の質問項目にチェックを入れてお答えください。QR コードでの回答も可能です。
・ご回答は、プライバシーに配慮し、個人を特定しない範囲でデータ集計を行います。

１．ご自身の立場についてお答えください。

①　来場（見学等）の立場について

１□一般来場者
２□選手・事業所関係者
３□教員等養成校関係者
４□主催団体関係者
５□開催ボランティア
６□その他（　　）

②　お住まいの地域（都道府県）について
（プルダウン　地域：東京・関東・中部等）

③　年齢階層について

１□１０歳代
２□２０歳代
３□３０歳代
４□４０歳代
５□５０歳代
６□６０歳以上

④　現在のお仕事について

１□職業人（福祉関係）
２□職業人（福祉関係以外）
３□自営業
４□教員
５□学生
６□その他（　　）

⑤　ケアコンテストへの来場について

１□初めて来た
２□過去に何回か来たことがある
３□ほぼ毎年来ている
４□その他（　　）

⑥ 今回のケアコンテストをどのように知りましたか

（あてはまるものすべてを選択）

1□公式ホームページ

2□SNS（X・Facebook・Instagram 等）

3□所属事業所・学校からの案内

4□知人・友人からの紹介

5□新聞・雑誌・テレビ等

6□開催パンフレット

7□その他（　　）

⑦ 会場（東京ビックサイト・お台場）の開催場所について

1□非常に良かった

2□ある程度良かった

3□どちらとも言えない

4□あまり良くない

5□全く良くない

（その理由：　　）

2．介護についてお答えください。

① 介護についてのご自身の関心について

1□大いに関心がある

2□ある程度関心がある

3□どちらとも言えない

4□あまり関心はない

5□ほとんど関心がない

② どのような関心か（関心があると答えられた方）、簡潔にご記入ください。

3．ケアコンテスト（AJCC）についてお答えください。

① 今回のケアコンテスト（AJCC）について

1□非常に有意義だった

2□ある程度有意義だった

3□どちらとも言えない

4□あまり有意義でない

5□ほとんど有意義でない

② ケアコンテスト（AJCC）はどのような場だと思いますか。ご自身の思いに近いものを選択してください。（あてはまるものすべてを選択）

1□介護の振り返り・自己成長

2□介護技術・技能の向上・挑戦

3□介護職の魅力づくり・モチベーション向上

4 □他の事業所・職員との交流

5 □介護の質の向上・イメージアップ

6 □介護に関する市民の理解促進

7 □その他（　　）

4．ご感想、ご意見等を自由にご記入ください。

ご協力ありがとうございました。

AJCC2025（第 15 回）調査研究事業　選手事前アンケート（コンテスト前・Web 調査）

・AJCC2025（第 15 回）に参加申込をいただきありがとうございます。
・本アンケートは、AJCC の効果分析に関する調査研究事業として実施するものです。
・アンケートにご協力をお願いいたします。10 月 2 日までにご回答ください。
・スマホ、PC 等でアンケートをご覧いただき、チェックを入れてご返信ください。
・ご回答は、プライバシーに配慮し、事業所や個人を特定しない範囲でデータ集計を行います。

1．ご自身の属性等についてお答えください。

①　ケアコンテストの実技分野及び部門について

＜分野及び部門（プルダウン）：事務局から指定された最終の分野・部門＞

1□認知症
○A 部門　○B 部門

2 □看取り
○A 部門　○B 部門

3 □口腔ケア
○A 部門　○B 部門

4 □入浴
○A 部門　○B 部門

5 □食事
○A 部門　○B 部門

6 □排泄
○A 部門　○B 部門

7 □外国人介護職員分野
○A 部門　○B 部門　○C 部門

②　ご自身が所属する事業所の事業種について

1 □介護老人福祉施設（特養ホーム）

2 □介護老人保健施設（老健）

3 □認知症対応型共同生活介護（グループホーム）

4 □特定施設入居者生活介護（介護付き有料老人ホーム）

5 □訪問介護（ホームヘルプサービス）

6 □通所介護（デイサービス）

7 □その他（　　）

③　ご自身の年齢階層について

1 □１０歳代

２□２０歳代
３□３０歳代
４□４０歳代
５□５０歳代
６□60 歳以上

④　ご自身の介護職としての経験について
１□３年未満
２□３年以上５年未満
３□５年以上１０年未満
４□１０年以上
５□その他（　　）

⑤　ご自身の介護に関する保有資格等について
（あてはまるものすべてを選択）
１□介護福祉士
２□介護支援専門員
３□社会福祉士
４□看護師
５□理学療法士、作業療法士、言語聴覚士
６□管理栄養士
７□介護職員初任者研修修了
８□介護福祉士実務者研修修了
９□その他（　　）

⑥　所属する法人・事業所での組織上の立場について
１□管理職
２□チームリーダー等指導的立場
３□中堅職員（概ね３年以上）
４□初任者（3 年未満）
５□その他（　　）

⑦　外国籍の方は次の項目についてもお答えください。
・国籍について、
（　　）
・日本での在留資格について、
１□EPA（経済連携協定）
２□技能実習
３□特定技能
４□在留資格「介護」
５□その他（　　）
・ご自身の日本語（検定）能力

1□N1 相当

2□N2 相当

3□N3 相当

4 □N4 相当

5 □その他（　　）

2．今回のケアコンテスト参加についてお答えください。

① ご自身の参加回数について、

（あてはまるものすべてを選択）

1 □選手として初めての参加

2 □選手として複数回の参加である

3 □大会に来場するのは初めて

4 □大会には複数回来場

5 その他（　　）

② 法人・事業所の参加回数について、

1 □初めての参加

2 □複数回の参加

3 □分からない

4 □その他（　　）

③ 今回のケアコンテストへの参加人数について

1 □１人の参加

2 □２人から３人の参加

3 □４人以上の参加

4 □分からない

5 □その他（　　）

④ ご自身のケアコンテスト参加動機について

1 □自発的意思

2 □上司の推薦（または指示）

3 □事業所の推薦（または指示）

4 □外部の方の紹介

5 □その他（　　）

3．ケアコンテストの事前準備についてあなたの考えに近いものをお答えください。

① 事前準備についてご自身の取り組みについて、

1 □十分事前準備をすることができている

2 □ある程度事前準備をすることができている

3 □どちらとも言えない

4 □あまり事前準備ができていない

5 □ほとんど事前準備ができていない

② 事前準備における職場や職場の上司・同僚のサポートについて、

1□積極的な支援・指導がある
2□ある程度の支援・指導がある
3□どちらとも言えない
4□あまり指導・支援がない
5□ほとんど指導・支援がない

③　事前準備の方法について、
（あてはまるものすべてを選択）
1□担当する分野の課題研究
2□ロールプレイ等事業所内での練習会
3□上司・先輩からの指導
4□同僚との共同研究
5□オンライン教材・動画等の学習
6□自己研究・自主練習
7□その他（　　）

④　準備プロセスについてのご自身の思いについて、
（あてはまるものすべてを選択）
1□自身の介護を振り返る機会になった
2□介護技術・技能の向上になった
3□根拠（エビデンス）に基づく介護のあり方を考えるようになった
4□担当する分野の介護のあり方について深めることができた
5□介護の仕事の使命感や職業意識を自覚するようになった
6□介護の仕事へのモチベーションが高まった
7□職場の上司や仲間とコミュニケーションを密にする機会になった
8□職場での相互研鑽や後輩の指導について気づきがあった
9□事業所の代表者としての意識が高まった
10□他の事業所等、多くの方と交流するのが楽しみになった
11□介護についてさらに深めたいと思うようになった
12□その他（　　）

⑤　ケアコンテストの準備プロセスで感じた体験やエピソードについて、簡潔にご記入ください。

4．ケアコンテスト（AJCC）はどのような場だと思いますか。ご自身の思いに近いものを選択してください。（あてはまるものすべてを選択）
1□介護の振り返り・自己成長
2□介護技術・技能の向上・挑戦
3□介護職の魅力づくり・モチベーション向上
4□他の事業所・職員との交流
5□介護の質の向上・イメージアップ

6 □介護に関する市民の理解促進

7 □その他（　　）

5．介護の仕事についてご自身のお思いに近いものを選択してください。

① 介護の仕事は好きですか。

1 □非常に好きだと思う

2 □ある程度好きだと思う

3 □どちらとも言えない

4 □あまり好きだとは思わない

5 □ほとんど好きだとは思わない

② 介護の仕事にやり甲斐を感じますか。

1 □非常にやり甲斐を感じている

2 □ある程度やり甲斐を感じている

3 □どちらとも言えない

4 □あまりやり甲斐を感じない

5 □ほとんどやり甲斐を感じない

③ 介護の仕事を続けたいと思いますか。

1 □これからも長く続けたいと思う

2 □しばらくは続けたいと思う

3 □どちらとも言えない

4 □あまり長く続けたいとは思わない

5 □ほとんど続けたいとは思わない

④ 介護の仕事をさらに魅力あるものにするためにどのようなことが必要だと思いますか。ご自身の思いを簡潔にご記入ください。

ご協力ありがとうございました。

AJCC2025（第 15 回）調査研究事業　選手事後アンケート （コンテスト後・Web 調査）

・AJCC2025（第 15 回）大会にご参加いただきありがとうございました。

・本アンケートは、AJCC の効果分析に関する調査研究事業として実施するものです。

・2 回目のアンケートとなります。第 15 回大会のご体験を踏まえて 10 月 27 日までにご回答ください。
（統計処理のため前回アンケートと重複する内容がありますがご了承ください）

・スマホ、PC 等でアンケートをご覧いただき、チェックを入れてご返信ください。

・ご回答は、プライバシーに配慮し、事業所や個人を特定しない範囲でデータ集計を行います。

1．ご自身の属性等についてお答えください。

① ケアコンテストの実技分野及び部門について

＜分野及び部門（プルダウン）：事務局から指定された最終の分野・部門＞

1□認知症
○A 部門　○B 部門

2□看取り
○A 部門　○B 部門

3□口腔ケア
○A 部門　○B 部門

4□入浴
○A 部門　○B 部門

5□食事
○A 部門　○B 部門

6□排泄
○A 部門　○B 部門

7□外国人介護職員分野
○A 部門　○B 部門　○C 部門

② ご自身が所属する事業所の事業種について

1□介護老人福祉施設（特養ホーム）
2□介護老人保健施設（老健）
3□認知症対応型共同生活介護（グループホーム）
4□特定施設入居者生活介護（介護付き有料老人ホーム）
5□訪問介護（ホームヘルプサービス）
6□通所介護（デイサービス）
7□その他（　　）

③ ご自身の年齢階層について

1□１０歳代
2□２０歳代
3□３０歳代
4□４０歳代
5□５０歳代
6□60 歳以上

④ ご自身の参加回数について

（あてはまるものすべてを選択）

1□選手として初めての参加
2□選手として複数回の参加である
3□大会に来場するのは初めて
4□大会には複数回来場
5その他（　　）

⑤ 外国籍の方は次も項目についてお答えください。

・国籍について、
（　　）

・日本での在留資格について、
1□EPA（経済連携協定）
2□技能実習
3□特定技能
4□在留資格「介護」

5□その他（　　）

・ご自身の日本語（検定）能力

1□N1 相当

2□N2 相当

3□N3 相当

4□N4 相当

5□その他（　　）

2．今回のケアコンテストについてお答えください。

① ケアコンテストの事前準備について

1□十分事前準備をすることができた

2□ある程度事前準備をすることができた

3□どちらとも言えない

4□あまり事前準備ができなかった

5□ほとんど事前準備ができなかった

② ケアコンテストの実技での実力の発揮について

1□十分実力を発揮できた

2□ある程度実力を発揮できた

3□どちらとも言えない

4□あまり実力を発揮できなかった

5□ほとんど実力を発揮できなかった

③ 他の選手の実技の見学について

1□非常に参考になった

2□ある程度参考になった

3□どちらとも言えない

4□あまり参考にならなかった

5□ほとんど参考にならなかった

④ アドバイザーからのコメントについて

1□非常に参考になった

2□ある程度参考になった

3□どちらとも言えない

4□あまり参考にならなかった

5□ほとんど参考にならなかった

⑤ ケアコンテストの前夜祭での交流・懇親について

1□非常に有意義だった

2□ある程度有意義であった

3□どちらとも言えない

4□あまり有意義でなかった

5□ほとんど有意義でなかった

⑥　ケアコンテスト参加の成果について

（あてはまるものすべてを選択）

1□自身の介護を振り返る機会になった

2□介護技術・技能の向上になった

3□根拠（エビデンス）に基づく介護のあり方を考えるようになった

4□担当する分野の介護のあり方について深めることができた

5□介護の仕事の使命感や職業意識を自覚するようになった

6□介護の仕事へのモチベーションが高まった

7□職場の上司や仲間とコミュニケーションを密にする機会になった

8□職場での相互研鑽や後輩の指導について気づきがあった

9□事業所の代表者としての意識が高まった

10□他の事業所等、多くの方と交流することができた

11□介護についてさらに深めたいと思うようになった

12□成果と思えるものはなかった

13□その他（　　）

⑦　今回のケアコンテスト参加で得た学びの活用について

（あてはまるものはすべてを選択）

1□日常の介護実践に学んだことを取り入れたい

2□後輩や同僚への指導・研修に活かしたい

3□チーム内での共有・情報発信を行いたい

4□新しい学びの機会（研修・勉強会等）に積極的に参加したい

5□資格取得やキャリアアップを目指したい

6□活かしたいと思えるものはなかった

7□その他（　　）

⑧　今回の経験を踏まえて、同僚や後輩の AJCC への参加について

1□強く勧めたい

2□勧めたい

3□どちらとも言えない

4□あまり勧めたくない

5□全く勧めたくない

3．ケアコンテスト（AJCC）はどのような場だと思いますか。ご自身の思いに近いものを選択してください。（あてはまるものすべてを選択）

1□介護の振り返り・自己成長

2□介護技術・技能の向上・挑戦

3□介護職の魅力づくり・モチベーション向上

4□他の事業所・職員との交流

5□介護の質の向上・イメージアップ

6□介護に関する市民の理解促進

7□その他（　　）

4．介護の仕事について、改めてお答えください。

①　介護の仕事は好きですか。

1□非常に好きだと思う

2□ある程度好きだと思う

3□どちらとも言えない

4□あまり好きだとは思わない

5□ほとんど好きだとは思わない

②　介護の仕事にやり甲斐を感じますか。

1□非常にやり甲斐を感じている

2□ある程度やり甲斐を感じている

3□どちらとも言えない

4□あまりやり甲斐を感じない

5□ほとんどやり甲斐を感じない

③　介護の仕事を続けたいと思いますか。

1□これからも長く続けたいと思う

2□しばらくは続けたいと思う

3□どちらとも言えない

4□あまり長く続けたいとは思わない

5□ほとんど続けたいとは思わない

④　介護の仕事をさらに魅力あるものにするためにどのようなことが必要だと思いますか。ご自身の思いを簡潔にご記入ください。

5．ケアコンテスト（AJCC）全体についての感想、希望、改善点などについてご記入ください。

ご協力ありがとうございました。

AJCC2025（第 15 回）調査研究事業　コンテスト高齢者役アンケート （コンテスト後・Web 調査）

・AJCC2025（第 15 回）大会ケアコンテストで高齢者役を務められ、ご苦労様でした。
・本アンケートは、AJCC の効果分析に関する調査研究事業として実施するものです。
・ケアコンテストの「支え手」である高齢者役としての活動やその成果について、お答えください。10 月 27 日までにご回答ください。
・スマホ、PC 等でアンケートをご覧いただき、チェックを入れてご返信ください。
・ご回答は、プライバシーに配慮し、事業所や個人を特定しない範囲でデータ集計を行います。

1．ご自身の属性等についてお答えください。

①　ケアコンテストで高齢者役を務められた分野について

1□認知症　　5 □食事
2□看取り　　6 □排泄
3□口腔ケア　　7 □外国人介護職員分野
4□入浴

② ご自身の年齢階層について
1 □40 歳未満
2 □40 歳代
3 □50 歳代
4 □60 歳代
5 □70 歳以上

③ ご自身の介護職としての実務経験について
1 □5 年未満
2 □5 年以上 10 年未満
3 □10 年以上 20 年未満
4 □20 年以上

④ 高齢者役としての参加回数について
1 □初めての参加
2 □2 回以上 5 回未満
3 □5 回以上 10 回未満
4 □10 回以上

⑤ 高齢者役としての参加の動機について
1 □自発的意思
2 □上司の推薦（または指示）
3 □事業所の推薦（または指示）
4 □外部の方の紹介
5 □その他（　　）

2．高齢者役としての活動についてお答えください。

① 事前資料（設定課題）の理解度について
1□十分理解できた
2□ある程度理解できた
3□どちらとも言えない
4□あまり理解できなかった
5□ほとんど理解できなかった

② 高齢者役の事前ミーティングについて
1□非常に役に立った
2□ある程度役に立った
3□どちらとも言えない
4□あまり役に立たなかった

5□ほとんど役に立たなかった

③　高齢者役としてのご自身の対応について

1□設定課題に則して適切な対応ができた

2□設定課題に則してほぼ適切な対応ができた

3□どちらとも言えない

4□設定課題に則して適切な対応があまりできなかった

5□設定課題に則して適切な対応がほとんどできなかった

④　高齢者役としての活動のコンテスト全体おける貢献について

1□大いに貢献できた

2□ある程度貢献できた

3□どちらとも言えない

4□あまり貢献できなかった

5□ほとんど貢献できなかった

⑤　高齢者役としての活動における気づきや達成感について

1□非常に感じた

2□ある程度感じた

3□どちらとも言えない

4□あまり感じなかった

5□ほとんど感じなかった

⑥　高齢者役を務めた中で印象に残った体験やエピソードについてご記入ください。

（選手との関わり、ご自身の気づきや学びなど自由記述）

3．今後の意向についてお答えください。

①　今後の高齢者役として参加について

1□大いに参加したい思う

2□ある程度参加したいと思う

3□どちらとも言えない

4□あまり参加したいとは思わない

5□ほとんど参加したいとは思わない

②　同僚や後輩の高齢者役として参加について

1□大いに勧めたいと思う

2□ある程度勧めたいと思う

3□どちらとも言えない

4□あまり勧めたいとは思わない

5□ほとんど進めたいとは思わない

4．ケアコンテスト（AJCC）はどのような場だと思いますか。ご自身の思いに近いものを選択してください。（あてはまるものすべてを選択）

1□介護の振り返り・自己成長
2□介護技術・技能の向上・挑戦
3□介護職の魅力づくり・モチベーション向上
4□他の事業所・職員との交流
5□介護の質の向上・イメージアップ
6□介護に関する市民の理解促進
7□その他（　　）

5．最後に、介護の仕事についてお答えください。

① 介護の仕事は好きですか。
1□非常に好きだと思う
2□ある程度好きだと思う
3□どちらとも言えない
4□あまり好きだとは思わない
5□ほとんど好きだとは思わない

② 介護の仕事にやり甲斐を感じますか。
1□非常にやり甲斐を感じている
2□ある程度やり甲斐を感じている
3□どちらとも言えない
4□あまりやり甲斐を感じない
5□ほとんどやり甲斐を感じない

③ 介護の仕事を続けたいと思いますか。
1□これからも長く続けたいと思う
2□しばらくは続けたいと思う
3□どちらとも言えない
4□あまり長く続けたいとは思わない
5□ほとんど続けたいとは思わない

④ 介護の仕事をさらに魅力あるものにするためにどのようなことが必要だと思いますか。ご自身の思いを簡潔にご記入ください。

ご協力ありがとうございました。

AJCC20225（第 15 回）調査研究事業　選手派遣事業所アンケート （コンテスト後・Web 調査）

・AJCC2025（第 15 回）大会へ選手をご派遣していただきありがとうございました。
・本アンケートは、AJCC の効果分析に関する調査研究事業として実施するものです。
・アンケートにご協力をお願いいたします。10 月 27 日までにご回答ください。
・スマホ、PC 等でアンケートをご覧いただき、チェックを入れてご返信ください。

・ご回答は、プライバシーに配慮し、事業所や個人を特定しない範囲でデータ集計を行います。

1 法人・事業所の属性についてお答えください。

① 法人・事業所の所在地について

（プルダウン　地域：東京・関東・中部等）

② 法人・事業所の事業種について

（あてはまるものすべてを選択）

1 □介護老人福祉施設（特養ホーム）

2 □介護老人保健施設（老健）

3 □認知症対応型共同生活介護（グループホーム）

4 □特定施設入居者生活介護（介護付き有料老人ホーム）

5 □訪問介護（ホームヘルプサービス）

6 □通所介護（デイサービス）

7 □その他（　　）

2．今回のケアコンテスト（AJCC）参加についてお答えください。

① ケアコンテストの参加回数について

1 □はじめての参加

2 □2 回以上 5 回未満

3 □5 回以上 10 回未満

4 □10 回以上

② ケアコンテストへの参加選手数（法人として）について

・今回　　人

・うち外国籍　　人

・今回含めた総数　　人

・うち外国籍　　人

③ 法人・事業所としての派遣選手選定の基準について、簡潔にご記入ください。

3．参加選手に対する法人・事業所としての取組みについてお答えください。

① 参加選手に対する事前準備段階のサポートについて

1 □大いにサポートした

2 □ある程度サポートした

3 □どちらとも言えない

4 □あまりサポートしなかった

5 □ほとんどサポートしていない

②. 法人・事業所のサポート内容について、関係にお答えください。

4．参加プロセスを通じて得られた成果についてお答えください。

① 参加選手のモチベーションについて

1□非常に高まった
2□ある程度高まった
3□どちらとも言えない
4□あまり変わらない
5□ほとんど変わらない

② 参加選手の介護技術・技能について
1□非常に向上した
2□ある程度向上した
3□どちらとも言えない
4□あまり変わらない
5□ほとんど変わらない

③ 他の職員への影響（波及効果）について
1□非常によい影響を与えた
2□ある程度よい影響を与えた
3□どちらとも言えない
4□あまり影響しない
5□ほとんど影響しない

④ 法人・事業所として新たな視点や知見について
1□非常に多く得られた
2□ある程度得られた
3□どちらとも言えない
4□あまり得られない
5□ほとんど得られない

⑤ 法人・事業所としての満足度について
1□非常に満足した
2□ある程度満足した
3□どちらとも言えない
4□あまり満足していない
5□ほとんど満足していない

5．ケアコンテスト（AJCC）への法人・事業所としての期待についてお答えください。（あてはまるものすべてを選択）
1□介護の振り返り・自己成長
2□介護技術・技能の向上・挑戦
3□介護職の魅力づくり・モチベーション向上
4□他の事業所・職員との交流
5□介護の質の向上・イメージアップ
6□介護に関する市民の理解促進
7□その他（　　）

6．次回のケアコンテスト（AJCC）参加の予定について選択してください。

1 □大いに参加したいと思う

2 □ある程度参加したいと思う

3 □どちらとも言えない

4 □あまり参加したくない

5 □ほとんど参加したくない

7．ケアコンテスト（AJCC）について、希望、改善点など自由にお書きください。

ご協力ありがとうございました。

AJCC2025（第 15 回）調査研究事業　動画投稿参加選手アンケート （コンテスト後・Web 調査）

・AJCC2025（第 15 回）大会　動画投稿大会部門にご参加いただきありがとうございました。
・本アンケートは、AJCC の効果分析に関する調査研究事業として実施するものです。
・動画投稿参加の体験を踏まえて、10 月 27 日までにアンケートにご回答ください。
・スマホ、PC 等でアンケートをご覧いただき、チェックを入れてご返信ください。
・ご回答は、プライバシーに配慮し、事業所や個人を特定しない範囲でデータ集計を行います。

1．ご自身の属性等についてお答えください。

① 学校所在地について

（プルダウン）

② 学校の区分について

1 □大学

2 □専門学校

3 □高校

4 □その他（　　）

③ ご自身の年齢階層について

1 □20 歳未満

2 □２０歳代

3 □３０歳代

4 □４０歳以上

④ 外国籍の方は次も項目についてお答えください。

・国籍について、

（　　）

・ご自身の日本語（検定）能力

1□N1 相当

2□N2 相当

3□N3 相当

4 □N4 相当

5 □その他（　　）

2．今回の動画投稿参加についてお答えください。

① 動画投稿選手としての参加動機について

1 □自発的意思

2 □教員の推薦（または指示）

3 □学校の推薦（または指示）

4 □学生（仲間）の推進

5 □その他（　　）

② 動画制作の事前準備について

1 □十分事前準備をすることができた

2 □ある程度事前準備をすることができた

3 □どちらとも言えない

4 □あまり事前準備ができなかった

5 □ほとんど事前準備ができなかった

③ 動画制作の実技について

1 □十分実力を発揮できた

2 □ある程度実力を発揮できた

3 □どちらとも言えない

4 □あまり実力を発揮できなかった

5□ほとんど実力を発揮できなかった

④ 学校（教員）からの指導・支援について簡潔に記述してください。

⑤ 動画投稿コンテストの参加について

1 □非常に有意義だった

2 □ある程度有意義であった

3 □どちらとも言えない

4 □あまり有意義でなかった

5 □ほとんど有意義でなかった

⑥ 動画投稿コンテスト参加の成果について

（あてはまるものすべてを選択）

1 □動画制作で介護を実践的に学ぶことができた

2 □介護の実践力を身につけることができた

3 □根拠（エビデンス）に基づく介護のあり方を考えるようになった

4 □担当する分野の介護のあり方について深めることができた

5 □介護の仕事の使命感や職業意識を自覚するようになった

6 □介護の仕事へのモチベーションが高まった

7 □コミュニケーションやチームワークの大切さを実感した
8 □職場での相互研鑽や後輩の指導について気づきがあった
9 □学校の代表者としての意識が高まった
10□指導教師や他の学生（生徒）との信頼関係が深まった
11□介護についてさらに深めたいと思うようになった
12□成果と思えるものはなかった
13□その他（　　）

3．ケアコンテスト（AJCC）では、実務経験者による実技コンテストを実施していますが、ご自身の経験や思いをお答えください。　（あてはまるものすべてを選択）

1 □今年度の実技コンテスト（AJCC2025）を会場で見学した
2 □過去の実技コンテストを会場で見学したことがある
3 □過去の実技コンテストの動画を見たことがある
4 □機会があれば実技コンテストを見学したと思う
5 □実技コンテストの開催情報を知りたいと思う
6 □実技コンテストには関心がない
7 □その他（　　）

4．動画投稿コンテストについての感想、希望、改善点などについてご記入ください。

ご協力ありがとうございました。

AJCC　2025（第 15 回）調査研究事業　07　選手ヒアリング（当日・面接ヒアリング）

＊お尋ねする項目について Yes　No の回答をお願いいたします。
＊各項目に関連することについて体験、エピソード（喜び・感動・出会い等）をお聞かせください。
＊ご回答は、プライバシーに配慮し、個人を特定しない範囲で活用させていただきます。

1．まず、ケアコンテストの実技についてお尋ねします。

①　担当された実技分野及び部門はどちらでしたか。お名前も確認させていただきます。

1□認知症　　5 □食事
2□看取り　　6 □排泄
3□口腔ケア　　7 □外国人介護職員分野
4□入浴

お名前：

②　ご希望通りの分野、部門でしたか

1□はい　　2 □どちらとも言えない　　3 □いいえ

③　ケアコンテストに参加しての今の気持ちを一言で表現することができますか。

1□はい　　2□どちらとも言えない　　3□いいえ

（例えば、どんな言葉になりますか：満足、感動、挑戦、安堵、学び　etc.）

④　実技ではご自身の実力を発揮できましたか。

1□はい　　2□どちらとも言えない　　3□いいえ

⑤　アドバイザーのコメントは参考になりましたか

1□はい　　2□どちらとも言えない　　3□いいえ

⑥　高齢者役のコメントは参考になりましたか

1□はい　　2□どちらとも言えない　　3□いいえ

⑦　他の選手の実技を見て参考になりましたか。

1□はい　　2□どちらとも言えない　　3□いいえ

⑧　前夜祭では交流や懇親ができましたか

1□はい　　2□どちらとも言えない　　3□いいえ

⑨　コンテストに参加してよかったと思いますか

1□はい　　2□どちらとも言えない　　3□いいえ

⑩　次回は他の職員も参加した方がよいと思いますか

1□はい　　2□どちらとも言えない　　3□いいえ

⑪　今回の参加を通じて「自己成長」を実感できますか

1□はい　　2□どちらとも言えない　　3□いいえ

2．次に、ケアコンテストの準備ついてお尋ねします。

①　設定課題の事前研究等、実技の準備は十分行いましたか

1□はい　　2□どちらとも言えない　　3□いいえ

②　職場の上司や同僚と一緒に準備を進めましたか。

1□はい　　2□どちらとも言えない　　3□いいえ

③　準備の取組みで良かったと思うことがありますか。

1□はい　　2□どちらとも言えない　　3□いいえ

④　職場の上司や同僚との関係で、普段とは違うかかわりができたと思いますか。

1□はい　　2□どちらとも言えない　　3□いいえ

⑤　今日のコンテストには、職場から一緒にきてくれている人がいますか。

1□はい　　2□どちらとも言えない　　3□いいえ

3．これからのことや介護の仕事についてお尋ねします。

①　ケアコンテストの経験を活かし、これからやりたいと思うことがありますか。

1□はい　　2□どちらとも言えない　　3□いいえ

②　介護の仕事はお好きですか。

1□はい　　2□どちらとも言えない　　3□いいえ

③　介護のお仕事で大切にしていることがありますか。

1□はい　　2□どちらとも言えない　　3□いいえ

④　今回の参加を通じて、介護の仕事に対する「誇り」や「やりがい」をより強く感じましたか。

1□はい　　2□どちらとも言えない　　3□いいえ

4．このケアコンテスト(AJCC)についてお尋ねします。

①　このコンテストは続けるべきだと思いますか

1□はい　　2□どちらとも言えない　　3□いいえ

②　ケアコンテストの開催について何か希望することがありますか。

1□はい　　2□どちらとも言えない　　3□いいえ

5．最後に、外国籍の方にお尋ねすることがあります。

①　ご出身の国（国籍）を教えてください。

（　　）

②　日本での在留資格を教えてください。

1□EPA（経済連携協定）

2□技能実習

3□特定技能

4□在留資格「介護」

5□その他（　　）

③　日本語はとても上手ですが、ご自身の日本語（検定）能力はどのレベルですか。

1□N1 相当

2□N2 相当

3□N3 相当

４□N4 相当

５□その他（　　）

④　AJCC への参加経験が、日本で介護の仕事を続けたいという気持ちに影響しましたか。

1□はい　　２□どちらとも言えない　　３□いいえ

⑤　異なる国籍や背景を持つ選手・関係者との交流は有意義でしたか。

1□はい　　２□どちらとも言えない　　３□いいえ

⑥　その他、何かご感想やご要望がありますか。

1□はい　　２□どちらとも言えない　　３□いいえ

ご協力ありがとうございました。

この事業は、厚生労働省　令和７年度老人保健健康増進等事業
（老人保健健康増進等事業補助金）の一環として行ったものである。

介護技能の向上を目的とするコンテストの効果分析に関する
調査研究事業　報告書

令和８年３月発行

責任者　廣江　研　（社会福祉法人　こうほうえん　会長）
発行者　廣江　晃　（社会福祉法人　こうほうえん　理事長）
発行所　社会福祉法人　こうほうえん
〒683-0853 鳥取県米子市両三柳 1400
TEL : 0859-24-3111 / FAX : 0859-24-3113